

ヤバい剣しか投影できないオリ士郎君

ぬぶぬぶ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

勢いで書いた作品。  
失踪します。

淫夢語録多めです。苦手の人は気を付けてください。

あと感想欄では作者がネタバレをしていますので、これもお気を付けてください

# 目次

オリ主士郎君の始まり	1
激おこ英雄王	10
慎二の思い	19
つかの間の日常	31
聖杯戦争の幕開け	44
最初で最後の戦い	65
士郎と英雄王	84
決着、そして日常へ	101
f a t e / z e r o 編	
来る客星	121
その身に秘めたもの	137
f g o 編	
士郎くんカルデアに召喚される	152
士郎君のカルデアでの一日	163

## オリ主士郎君の始まり

気が付けばFateの衛宮士郎になった。

最初目を開けた時、俺の視界には目のハイライトが消えたおっさんが涙を流しながら俺の手を頬ずっていた。思わず失神しそうになったが、異常に気温が熱かったのでよく周りを見てみると、視界全体が地獄と化していた。周りに見える建造物がすべてが燃え盛っており、燃えている影響か赤黒く染まっている。

あれこの景色なんだか見覚えがあるなど思っ、いまだに俺の手を頬ずるおっさんの顔をよく見てみるとあら不思議。自分の大好きなFateの登場人物である衛宮切嗣にそっくりな男だった。そこまですぐ鈍い俺でもすぐわかった。

あつ…俺衛宮士郎に転生してしまったのか。

そんなあまりにも衝撃的な事実に耐えきれず、結局その場で俺は失神してしまった。

そのあとは原作のストーリー通り、両親を失った俺は切嗣のおっさんの養子となって過ごした。

ただっぴろい家におっさんと俺で住んでいて、時々ふじ姉こと藤村大河がおっさん目当てでよく遊びに来てた。おっさん目当てで来るのはいいけど、俺をいじめるのはやめていただきたい（切実）。

本来の衛宮士郎なら家事ダメダメのおっさんを見て家事が上達するはずなのだが、俺にはどうやら料理の才能がないようだ。食えればいいだろうと思っっているのが原因かもしれない。

さてここまでは転生してからのありふれた日常を語ってきたわけだが、直視しなければならぬことがある。

そう第五次聖杯戦争である。

どう考えても俺が巻き込まれることが確定してるので、俺は拾われてから一年ほどたってから毎日のように切嗣のおっさんに魔術を教えてくれるように頼み込んだ。そうしないと絶対殺される。さすがに衛宮士郎に転生してから十数年で無様に殺されるのはつらい。



やべ！興奮したせいで魔力が流れちゃった！

エアを投影してしまったという衝撃のせいだろうか。俺は集中してた気をゆるめてしまい、魔力がほんの少し乖離剣に右手から流れ込んでしまった。

そしていきなり高速で回転しだす三つの円筒。

「やべえええええッ!!」

とつさに俺は土蔵から飛び出し、庭のど真ん中で右手に持つエアをできるだけ上に上げた。エアの円筒の回転がさらに速くなっていき、それと同時にあたりに風が吹き始める。

(なにこれ！止まらないんだけど！)

回転を収めようとするが、どうすればいいのかさっぱりわからない。

そしていきなり吹き荒れるとてつもない暴風。エアは赤い光を発光しながらその直線上の空間を引き裂く。

右手で暴れる乖離剣を抑えるために、なんとかして魔力の流れを断ち切る。動力源たる魔力を失った乖離剣の円筒はすぐさま回転を止める。そうして暴風が止まり惨状を確認すると、日本式の庭園は荒れ果てており、屋敷の真上の空にあった雲はあとかたも無くなっていた。

滅茶苦茶になった庭を尻目に、屋敷にはそれほど壊滅的な被害がないことを確認した俺はひとまずほっとする。

「土郎」

ドキリと俺はおそるおそる声が出した土蔵のほうへ振り向く。

土蔵からでてきた切嗣のおっさんは服を砂ぼこりで汚しながら、曇りに曇った目と真顔でこちらを見ていた。

「とりあえず投影は今後禁止ね」

「…ハイ」

おっさん… あんたのその顔はこええよ。

といったことがあったか。あの後、それでも俺は時々切嗣のおっさ

んに頼みこみ、他に何か投影できないか試した。

しかしその結果はさんざんであった。以下投影して出てきた結果を紹介すると

何かの種、おもちゃのような刀、指先に乗るほどの大きさの鋼、皆様ご存じの約束された剣など…

これマジ？知ってる人にはわかるヤバイ剣しか投影されないんだが…

そんな剣ばかり投影してたら人理のパパ（抑止力）に怒られちゃうだろ！いい加減にしろ！

蔵でこんな危険な剣ばかり投影していると、こっそり覗いている切嗣からの視線が痛くなってきたので、今後は強化の魔術に専念することになります。

トレース、オン！（空元氣）

月日は流れ、最初の魔術の訓練をしてから一年と半年くらいたった。ここ最近はおつさんが家から出てどこかに行く時間が増えた。

おつさんは旅行してくるとか言ってるけど、まあたぶんアインツベルンへ行ってイリヤに会おうとしてるのだろう。けどおつさんだけではあのアインツベルンの森は抜けられなかったはずである。俺はどうするべきなのだろうか。

そんなある日。旅行（アインツベルン）から帰ってきた切嗣は土蔵に駆け足で入ってきて、体の強化の魔術を練習してた俺に頭を下げてきた。

「土郎！お願いだ！その力を娘に会うために使ってほしい！」

「あついいっすよ」（快諾）

アインツベルンのロリっ娘を迎えにいくとするぜ。

「ふん。またあやつが性懲りもなく来たか。」

そう呟くのはユーブスタクハイト・フォン・アインツベルン。通称アハト翁と呼ばれる男。

すでに二世紀もの歳月を生き、第二次聖杯戦争から聖杯戦争に関わっている。

その視線の先は目の前に映された映像の中の男、衛宮切嗣。第四次聖杯戦争時に裏切り、優勝者が決まる前に聖杯を破壊するなどの愚行を行った男にアハト翁は大変激怒していた。それゆえこのアインツベルンの森を通らせることはなかった。

「すでに衰弱してる貴様にこの森の結界は超えられまい」

そう判断しているアハト翁は切嗣に興味を無くし、部屋に戻ろうとしたその時。

突如城が揺れ始めた。

「…なんだこの揺れは？」

ハツと思ってもう一度衛宮切嗣が映っている画面を注視する。先ほどまでは気が付かなかったが切嗣のそばには幼い子供がいた。しかしその手にもっているのは恐ろしいほどに神秘が満ちた剣である。

「この剣…まさか宝具か？ホムンクルスたちよ。侵入者を撃退せよ。」

危機感を覚えたアハト翁はすぐさまその場を離れ、ホムンクルスを切嗣のもとへ行かせる。

そんなこんなでオリ主士郎君はというと

「お許エしくヌださいマ英雄エ王リ」

そう謝罪の言葉を口にして、乖離剣エアを城の前に立ちふさがる森めがけて放つ。最低出力にも関わらず、その破壊力はすさまじい。城まで続く木々は一切合切消し飛び、森にかけられていた結界は木端微



塵となった。

そして破壊の渦が城に届く寸前でエアの回転を止める。

「やはりすごい威力だな」

そばにいる切嗣のおっさんはたばこをカッコよくふかしながらそう呟く。たばこは体に悪いから、あとでこっさり箱ごと燃やします。

「つい勢いでここまで来てしまっただ銃とかもないんだけど、何か僕にも使える武器はあるかい士郎？」

ありますあります。

トレースオンと唱えてとある武器を作る。出てきたのはおもちやの刀。これなら戦闘能力皆無となったおっさんでもいけるだろう。

ほら受け取ってどうぞ。

「……これかい？見た目はただのおもちやなんだけど」

おっさんが困惑した表情でおもちやのような刀を手にもつ。ためしにとおっさんは刀を振ってみるがとても強そうには見えない。

「えっ？……このスイッチを押せて？わかったけど……うおおおっ?!」

突如腕をピンと伸ばしたおっさんが城めがけて突っ切っていく。途中でホムンクルスたちが襲い掛かってくるが、多人数相手でも容易に刀で攻撃を受け流し、カウンターでホムンクルスたちを気絶させていく。

すごいでしょ？あの剣のすごいところは自動で戦ってくれることなんですよ。

あつ、おっさんについてかないと。

おっさんに倒されたのか城までの道は気絶したホムンクルスで川のようになっていた。

その川は城の門まで続いている。

お邪魔します。はえくすっすごい大きい。まるでテーマパークに来たみたいだぜ。

と感嘆しながら城の中に入ると、中にはアハト翁と護衛のホムンクルスに向き合う切嗣のおっさんがいた。

「頼む！イリヤを返してくれ！」

おっさんはアハト翁に深々と頭を下げる。

「裏切者が… 自分が何をしたのかわかっているのか？」

「くっ… 聖杯は汚染されていた！ あんなものを完成させていたら世界が滅んでいた！」

「ふん、我らは第三魔法の実現だけを望んでいる。手段である聖杯が汚染されているかどうかなどどうでもよい」

「なんだとー！」

駄目だこりゃ。聖杯の完成を悲願としているアハト翁は次の聖杯戦争の鍵となるイリヤを決して渡そうとしないだろう。

俺は切嗣の横まで行き、アハト翁に向けてこう言った。

「俺が聖杯をとればおっさんの娘を返してくれるか？」

「なっ！ 士郎！」

「貴様がか？… ふむ」

アハト翁は俺をじっくり見る。感情の感じられないその目と顔は人形のようなのである。

「なるほど。ただの人の身でありながら何かしらの宝具を使える貴様ならば、サーヴァントと共に聖杯戦争を楽に勝てるかもしれない」

「そうだ。だから聖杯は俺が勝って持つてくるかわりにおっさんの娘を今返してちょうだい」

「まだ取つてすらいなのにイリヤスフィールをそう易々と渡すと思うのか？」

「別に返したくないならこちらが強引に連れ帰ってもいいんだけど」

右手に先ほどの乖離剣を投影して脅す。アハト翁はそれを見て、無表情な顔を少し歪める。

「フン… よかろう。イリヤスフィールを連れ帰るがよい。ただし聖杯は必ず持つてこい」

「わかったよ」

「本当にそれでいいのかい？ 士郎…」

切嗣は俺が聖杯戦争に参加すると聞いてひどく心配してる。まあ息子を死地に送るようなもんだからな。

「でもおっさんは娘を取り返したいんでしょ？ それに聖杯戦争は冬木

で起きるそうだし俺も他人事ではいられないからね」

まあ絶対聖杯戦争に巻き込まれるから多少はね？それにもし俺が干渉しなかったら世界がヤバい。

「士郎：…ありがとう」

切嗣は涙を流しながら俺に抱きついてくる。少し照れくさい。

その後、イリヤとの感動の再会をすました切嗣と俺は、イリヤの付き添いだったホームンクルスのメイド二人を連れて日本の冬木に戻った。

勝った！F a t e   s t a y n i g h t！完！

まあ終わるわけがなく日常は続くんですがね。

てか連れ帰ってきたメイドはおなじみのセラとリーゼリットなんすけど、この時期まだ生まれてないはずなのなんているんすかね？俺がいるせいかな？まあ家事ができないおっさんと俺は大変助かるからいいけど。

「シローーーーーー!!」

蔵で魔術の練習をしていると、どんつと後ろからかなりの衝撃がくる。

「イツイリヤ！魔術の練習中は危ないから急に飛びつくのはやめて！」

「むーイリヤじゅなくてお姉ちゃんって呼びなさい！私はシロウより年上なんだぞー！」

と俺の背中で暴れるのはつい先月衛宮さん家にやってきたイリヤスフィール。切嗣が連れ帰ることに成功したからか、原作のイリヤとは違い切嗣と俺に憎悪を抱いてはいない。どちらかというプリズマイリヤのほうの性格に似てると思う。

おいおい純粹無垢なロリとか天使か？

そんなイリヤと俺は今現在同じ小学校に通っている。年齢はイリヤのほうが一個上のはずなのだが、おっさんが過保護なのか俺と同じ学年に転入させた。

イリヤに近づく野郎どもは俺が倒しますよ（漆黒の意思）。

「シーローウー何かして遊ぼうよー」

「わかったわかったって。それじゃあ何する？」

とりあえずイリヤの遊びにつきあうとしよう。

けどお馬さんごっこはやめてくれよな

## 激おこ英雄王

俺は今人生最大のピンチにたっている。

「雑種」

衛宮さん家の門に立つのは今風の服を身に着け、真顔で俺を見下している英雄の中でも最上位にたつ男。

つまり激おこ英雄王その人である。

「貴様、我に何か言うべきことがあるのではないか？」

「乖離剣勝手に使つてすみませんでした！ゆるしてください何でもしますから！」

俺はすぐさま土下座をした。

ここまで死の気配を感じたことはなかったね。

「どうぞ。粗茶ですが…。」

屋敷の居間に英雄王を恐る恐る案内した俺は、家にあつた一番高級なお茶を正座しながら差し出す。イリヤのために買つといたやつだけど、許してくれイリヤ。

王の財宝から豪華な椅子を取り出し、そこに座つたギルガメッシュは茶飲みをつかみ、グイつと一気に飲む。そして茶碗をダン！と音がなるほど勢いよく机にたたきつける。

「贗作の乖離剣を作り出せる下郎がいるとは驚きだったが… 我に謁見をしに来ないのはどういうことか！」

「誠にごめんなさい！会いにいったら殺されると思つたんです許してください！」

「ふん、そう易々と殺しはせぬ」

英雄王は脚を机の上に投げ出し、こちらに背筋が凍るような笑みを向けた。

「王たる私の剣を許しを得ずに使い、あまつさえ我自ら足を運ばせる貴様は万死に値するが… 雑種が作る贗作には興味がある。試しに前に使つたあの贗作を作つてみよ」

「前に使ったというと・・・どの剣でしょうか？」

「たわけ！どこぞの森で先の戦いのセイバーのマスターであった男が使っていた贋作に決まっておろうが！」

「はっ、はいー！」

こっわこの人千里眼でなんでもお見通しかよ。とりあえず投影するか。

トレースオンと頭の中で唱え、右手に例の剣を投影する。

「どうぞ。お受け取りください」

「ほう。これが・・・」

俺が恭しく両手に乗せた剣を差し出すと、ギルガメッシュはその剣をゆつくりと手に取った。

ギルガメッシュは剣をじっくり観察する。

「このことは異なる世界にて、人が持ちうる技術を結集し作り上げた一品。外見が気に入らんが、その性能は良し。贋作など要らぬが、それはそれとしてこの剣はいただいておこう」

ギルガメッシュは剣を後ろへ放り投げると、そこにゲートオブバビロンが出現し剣が納められる。おいおいこの人異世界の剣であること見抜きやがったぞ。

王様は机にかけていた足をどかし、椅子を王の財宝へしまう。

「ふむ。それでは行くとするか」

（おっ？助かったか？）

帰る様子のギルガメッシュを見て、俺はとりあえず命は助かったのかとホツとする。二度と家に来ないで、どうぞ。

「何をしておる。さっさと支度せぬか」

「えっ!?何のことでしょうか・・・」

居間から出ようとしていたギルガメッシュはこちらに振り向いた。支度ってなんのだよ。

「まさかとは思うが・・・この我が乖離剣を使った貴様の大罪をこの程度で赦すと思っておるのか？」

「ただいま支度します！一分ほどお待ちください！」

「たわけ！40秒で支度しろ！」

どうやら、俺の絶体絶命の危機はまだ続くらしい。

「いいらでよいか」

英雄王は周囲を見渡して、そう呟く。

あのあと英雄王に連れられて俺は人気のない森へと向かった。わざわざ人気のないところにくるって… あっ（察し）。

「それでは「お待ちください！英雄王！」…なんだ雑種？」

嫌な予感が先ほどから止まらない俺は慌てて王様に嘆願する。

「おっ俺に戦闘は無理です。どうかお慈悲を!!」

俺の必死の命乞いに王様は笑う。

「フハハハハハハ！貴様が死ねばそれまでよ！せいぜい我を楽しませてみせよ！」

王様の周りにゲートオブバビロンが展開される。

くっそのこのジャイアンめ！こうなりややけだ！

俺は右手にさっきの剣を投影する。きちんとスイッチはオンにしとく。

「いくぞ英雄王。武器の貯蔵は充分か（震え声）」

「やかましいわッ！」

ギルガメッシュの周囲にあるゲートオブバビロンがピカッと光る。それと同時に俺の体は剣に引き寄せられ勝手に動き出す。

轟く轟音、俺は何が起きたのかさっぱりわからないので剣に必死にしがみつく。

（こっ、これマジ!?射出された武器が速すぎて全然見えんぞ！原作の士郎はどうやってこんなのと戦ったんだ！人間じゃねーわ）

次々と襲い掛かってきてるであろう英雄王の武器を視認できず、俺はこの剣にガチで感謝する。でもこのアクロバティックな動きはちよつと吐き気が…

「ふむ。やはりこの程度なら容易に対処するか。では数を増やすとしよう」

「ファッ!?まずいですよー！」

これのどこが容易だつて言うんだ！目ん玉ほじくるぞ！

今までギルガメッシュの周りに展開されていたゲートが消え、俺の周囲に現れた。その数はとても両手では数えられない。

そして先ほどよりいっそう激しくなる俺の動き。う、羽毛……(吐き気)。

「アカン死ぬウー！二刀目トレースオン！」

俺は空いている左手にもう一刀同じ剣を投影する。

「フハハハハハ！よいぞー！もつと踊るがいい！」

俺の迫真の防御にご満悦な英雄王はさらにゲートを増やす。

まさに雨が降ってくるかのような隙間のない絨毯爆撃にさすがのこの剣も分が悪くなってきたのか俺の服に英雄王の攻撃が時々かすつていく。男のダメージ脱衣とか誰得だよ！

「なかなかやるではないか！どれ、それならこれはどうする」

英雄王が右手を上げると、彼のそばに今までとは違う大きなゲートが開く。そして顔を出すのは特大の剣。そして英雄王が右手を振り下ろすと同時にソニックブームをまき散らしながらこちらへと射出される。

あつ、死んだわ( )

向かってくる大きな剣がスローモーションに見える。

走馬灯。俺の脳裏には、さまざまな記憶が過ぎ去る。

魔術の練習をしていると怖い真顔で俺を様子見してくる切嗣のおっさん。辛すぎる手作りカレーで俺をショック死寸前まで追い詰めたふじ姉。無い胸の八つ当たりを俺にするセラ。格闘ゲームで大人気なく俺をつぶすリズ。俺の行動すべてを管理したがるイリヤ。

あれ？嫌な思い出ししか出てこなくね？いい加減にしろ！

ふと右手と左手の剣に暖かさを感じた。

お前ら俺を慰めてくれてるのか……？



爆音とともに大きな衝撃波が発生する。

「ほう…」

ギルガメツシユは目を細め、眼前の男を見る。

その視線の先の男は持つ剣をクロスさせ、特大の剣を押しとどめていた。

「真名解放… 名刀電光丸」

それは異世界の未来の剣。幾たびも親友たちと共に世界を救ったロボットの剣。

英雄王はもう一度ゲートを大量に開放させる。しかしゲートに顔を出す剣はすべて先ほどの特大の剣と同じ大きさ。

しかも違うのは大きさだけではない。その内包する神秘は先ほどまで射出していた剣の比ではない。

そしてすべてが士郎に向けて豪速で迫りゆく。

真名解放した電光丸の刀身が黄金に輝く。光輝く両手の剣を士郎は残像を残しながら振り回す。

すると振り切った剣先から斬撃が宙を駆け、迫りくる宝具をすべて到達する前に撃ち落とす。

もはや壁のような密度の剣が士郎に殺到するが、士郎はその場を動かずその悉くを斬撃ではじく。

その様子を見てギルガメツシユは笑う。

「興が乗ったぞ小僧」

英雄王は右の手の平の上にゲートを開く。そしてゆつくりと現れたのは王律鍵バヴルイル。

ギルガメツシユはそれを手にとり、王の財宝の最深部のロックを開錠する。

鍵を開くと同時にすさまじい数の回路が形成され、それが一点に集中する。そして出現した真正銘本物の乖離剣エアをギルガメツシユが握る。

「エアよ。お前の贗作にその威光を知らしめてみせよ」

英雄王はそうエアに語り掛けると、エアは呼応するかのよう回転を始める。

「……トレリス オン 投影、開始」

士郎もまた右手に魔術回路を浮かび上がらせ、乖離剣を投影する。そして贗作の乖離剣もまた回転を始める。

「いざ仰げ！真の天地エヌ ママ エリ シュ乖離す開闢の星を！」

「王エヌ ママ エリ シュに謝罪す開闢の星ツツ！」

二つの対界宝具がぶつかり原初の地獄を作り出す。お互いの攻撃がぶつかる衝撃で森の木々は一切消し去り、地面はマグマとなり、周りはまるで火山の中にいるかのように灼熱となる。

地面は揺れ、その揺れは地震となり、二人を震源にして大きな地震が冬木を襲う。

しかし、彼らはそんなことなど気にも留めず、お互いの地獄をぶつ  
けあう。

「フハハハハハハハ！」

「うおおおおおおッ！」

そして二人を巻き込んで大爆発が起こった。

灼熱の煙が空へと浮かぶ。

煙は上昇気流に乗り、空にキノコ雲を形成する。

地表は荒れに荒れていた。地面は隆起し、大きな割れ目ができている。周囲の生き物は微生物含めてすべて死滅し、その場はまるで地獄そのものだった。

ジャリと何者かが地面を踏み歩く音が聞こえる。その人物は先ほどまでとは違い黄金の鎧を身にまとい、灰の雨が降る中、倒れている

男のもとまで歩く。

「死体すら残さず消えたと思っていたが…生きているとはな」

英雄王は倒れ伏す目の前の男、士郎を見る。時々うめき声をあげる士郎は目の前の英雄王を半分気絶しながらも、閉じ行く目でしっかりと見ていた。

「まぐれではあるまい。貴様、まだ奥の手があったな」

英雄王は面白くなさそうにフンと悪態つく。

「その剣を使えば、この我に一矢報いることができたであろうに。その傲慢さに免じて此度は貴様の罪を赦そう」

ギルガメツシユは士郎に背中を向ける。

「決戦は次にとっておくでしょう。有象無象の英霊を引き連れ、挑むがよい。贗作者」

去り行く男を見届け、士郎の意識は闇に飲まれた。

死ぬかと思った

何なんだよあの王様。普通本物の乖離剣だすと思うか？俺は思わない。

念のため戦闘が始まる前からあれを投影し始めといてよかったわ。まじであれがなかったら死んでたぞこのヤロー。

てか次の戦いとか言ってたけど、絶対第五次聖杯戦争のことだよな。戦いたくないんだけど。

あの後、夜遅くまで気絶していた俺は急いで衛宮さん家に帰ると、おっさんとイリヤが門の前で心配そうに待ってた。

イリヤに泣きながら飛びつかれた俺は、おっさんにどうしていたのかと怒られた。

とつさに転んで気を失っていたという嘘をつくとおっさんは怪訝な顔をしながらとりあえずは納得した。

どうやら俺と王様の戦闘の余波で大規模な地震があったらしく、テレビのニュースでは隕石衝突かと騒がれていた。

おっさんも何か察したらしく、それで降聞いてくることはなかったが、辛かったら必ず僕に言うんだよと俺に約束させた。

そのあとは外へ俺を探しに行ってたらしいセラとふじ姉の二人にげんこつをくらい、俺は頭を押さえながら疲労困憊の足を引きずって布団にもぐった。

トホホ… もう乖離剣を使うのはこりこりだよ…

そんなこんなで一週間がたった。

より一層過保護となったイリヤに四六時中監視されてる俺は、襖を通り抜けてくる朝日で目を覚ます。

ふわああと腕を伸ばそうとするも右腕に何かが引つかかっってしまう。ちらりと布団をまくと、大天使イリヤが俺の右腕に抱き着いて寝ていた。

おいおい天使か？

と考えながら、俺はそーつとイリヤの手をどかし、布団をイリヤにかける。

俺はサンダルを履き、庭でストレッチをする。春先の肌寒い気温の中、太陽の暖かな光が俺を包み込む。今日も素晴らしい一日となりますように。

数分ほどでストレッチを終えた俺は、サンダルを脱ぎ居間に入る。テレビからゲーム音が鳴り響く中、俺は冷蔵庫に赴き、牛乳をコップに注ぐ。

そして机の上にコップにおいて、目の前の現実を直視した。

「って何してるんすか英雄王！」

「ぬっ雑種か！今は忙しいあとにしろ！」

何と一週間前に戦ったギルガメツシュが勝手に人の家でゲームをしている。

「ここ俺の家なんですけど…」

「フハハハハ！この世すべてが私の庭よ！なればこそ我が貴様の家におろうが関係なからう！」

なにいつてんだこの人。

「てかこの間カツコよく別れたのに… 次の聖杯戦争で再会を果たす流れでしょうここは」

「次の聖杯戦争までは数年かかるだろう！それまで貴様ほど面白い道化を放っておけるか！」

我、一位フィニッシュ！と叫ぶ王様に俺はほとほとあきれ果てる。

「ナヌツ?!雑種貴様なんだその車は！加速がおかしいではないか！」

『俺の車の加速がおかしい』って、弱すぎるって意味だよな？」

「お… おのれ！おのれ！おのれ！おのれ！」

そのあとは何気に王様と楽しくゲームできましたまる

でも負けるたびにゲートオブバビロン使おうとしないでください死んでしまいます。

## 慎二の思い

第四次聖杯戦争、切嗣のおっさんに拾われてから5年の月日が流れた。

小学校の卒業を終えた俺とイリヤは中学校に入るまでの春休みを満喫していた。

今日はイリヤは学校の女友達と女子会をするらしいので、俺は一人公園のベンチで寝転がりぼーっと空を眺めている。

早いものでもう5年か……。第五次聖杯戦争まで半分を切ったか、嫌だな戦うの死にたくないし。

てか今思ってたけど何も聖杯戦争馬鹿正直に待つより、今の内に不安要素叩けばよくね？

イリヤはもう完全に味方だと思っし殺される心配はないから、あとは間桐と言峰のやろうだな。

たぶん言峰のほうはギルガメッシュがそばにいるし、倒せないと思うけど。間桐のほうは行けるんじゃないか？

まだ真アサシンがないから、虫だけだし名刀電光丸だけでどうにかかなりそうな感じだけど。

あつ、でも桜をどうにかしないといかんのか。この時期つてもう桜の心臓の中に臓硯の本体ついていたんだっけ？これももうわかんねえなあ。

「おい衛宮」

「ん？」

脚のほうから俺を呼ぶ声が聞こえたので、顔を上げると。

「なんだ慎二お前か」

「なんだとは失礼なやつだね。ほらっこの足どけろよ僕が座るんだからな」

「しようがねえなあ（悟空）」

仕方なくベンチに乗せていた足を下ろし、慎二が座るスペースを作る。

よっこらせと慎二がどきっとベンチに座る。そしてポケットからお菓子を取り出して食べ始める。

「こんなところで何をしてたんだよ。考え事か？」

「ああ。お前の爺さんを消す方法を考えていたんだ」

「ちよつと通報してくるわ」

「おつ、待てい（江戸っ子）」

お菓子を放りなげて近くの公衆電話のもとへ走ろうとする慎二を何とか止める。

「で、何でいきなりそんなこと言いだしたんだよ。ついに頭でも狂ったんですかね？」

「う〜んどうすっかなあ〜」

臓硯の悪行を教えても信じてもらえないかわからないしなあ。てか慎二がどっちサイドの人なのかいまいちわかってないんだよね。もつと原作しつかり見とけばよかったな。

「…それは桜に関係あることか？」

「そうだよ」

「ここは正直に言っておく。すると慎二は腕を組み、鼻で笑う。

「それならなおさら教えろよ。愚鈍で何もできない哀れな妹を守つてやるのも兄の役目だろ」

「でもたぶん教えたらお前の自尊心をぶち壊すことになると思うぞ」

「何だつて？」

慎二は機嫌を悪くし、俺を睨む。

「いいのか？」

「…言ってみろよ」

そして、俺は桜と臓硯について話し出す。

桜が臓硯の手によって間桐の魔術に無理矢理馴染ませるべく、蟲による人体改造されているということ。

また桜の体内には聖杯のカケラが仕込まれており、このまま聖杯戦

争が起きると桜はもうどうしようもないほど詰んでいる状況になってしまふということ。

その事実を知らないはずの慎二はつまり、自分だと思っていた間桐の真の後継者が桜であり、邪魔者として隔離されていたのは桜ではなく自分で、自分の方が要らない子であると気づくこととなる。

その他にもさまざまなことを話した。聖杯の汚染。五年前の第四次聖杯戦争の真実。迫る世界の危機。

淡々と事情を隣に座る慎二へ向かずに告げていく。慎二が今どのような顔をしているのかはわからない。彼は無言で士郎の話を聞いている。

嘘だと思われぬように証拠も一緒に話す。すると隣からはっと息をのむ音が聞こえた。俺が言ってる証拠に心当たりがあつたのだろう。

俺が知る情報をすべて慎二に話した。

人気の少ない公園にて、二人の間を風が通りぬける。眼前の桜の木はその枝を華やかにしならせ、花びらを降らす。

士郎は隣の人物に顔を向けることはなく、じっと彼の反応を待つ。すると隣の少年は勢いよく立ち上がり、眼前の桜の木の根元のもとへと歩く。

彼はその幹に静かに触れた。

「はっ！僕を甘く見るなよ士郎」

彼は少し震えた声でそう呟いた。

「桜が間桐の真の後継者だつて？それがどうした！僕が間桐で要らない子だつて？それがどうした！」

彼はこちらに振り返り、力強く士郎を見た。

「他人の評価なんてどうでもいい！僕は僕だ！その程度でへこたれるもんか！」



だからと彼は言った。

「その力を貸せ士郎！さっさとダメダメな妹を！ついでに世界も救いに行くぞ！」

「よう言うた！それでこそ俺の親友や！」

その日の夜。

目の前を歩く男の背中を見る。その手には寒気がするほど存在感あふれる剣が握られている。

ずるいやつだよお前は。

その能力に少しだけ嫉妬する。けれどかつてほどではない。

昔、こいつに投影を見せてもらったあの時。

魔術を全く使えない僕はそのときどうしようもないほど嫉妬で狂った。周りの人、物に八つ当たりを繰り返し、されどどうにもならないことに吐き気が止まらなかつた。

けれど、あの日。僕がどこぞの港で魔術が使えないことに一人悔し泣きをしているときに、お前は現れた。

お前は僕が泣いてることに心から心配をしてくれていた。その時はついイラついて

お前に何がわかる！魔術師の家系のくせに魔術も使えない僕のことを！と殴り掛かった。

人生で初めてのの本気の喧嘩だった。お互いに全力を出し切って殴り合った。

痛いことは苦手な僕だけど、その時は激情に身を任せ、痛みを無視して殴り続けた。

どれほど長い時間殴り合っていたのだろうか。疲労困憊の僕たちは最後の力を振り絞って、相手に殴り掛かる。

お互いの拳が相手の顔を貫き、僕たちは同時に倒れる。

息切れで胸が苦しく、体中が痛みまくるのになぜかすがすがしい気分だった。今まで心の中にためた鬱憤を吹き散らすことができたからであろうか。なんとも開放的な心地だった。

そのまま数分ほど、僕たちは無言で空に輝く星空を眺めた。

「満足したか？ 慎二」

「・・・ ああ」

「よし！ それなら仲直りだな！」

ガバツと土郎は起き上がると、僕を強引に立たせる。

「なあ衛宮」

「ん？ なんだ」

イテテと肩を回しながら土郎はこちらへと振り返った。

「もう一度お前の投影を見せてもらえないか？ できればとびきりきれいなやつを」

「おっ、しようがねえなあ」

からかうような口調で了承した土郎はトレースオンと呟く。

彼の右手が光輝く。この夜の闇にも負けない光が港を包み込む。

投影されたのはこの星空をも照らす神秘的な剣。まるで僕の心の醜い闇をも消し去るような神聖な光が僕らを照らす。

ああ、きれいだな。

その光に包まれた僕は不思議と胸のわだかまりは消えていた。

かつての出来事を思い出しながら、もう一度目の前の男を見やる。

土郎、お前には僕がいまだに魔術に固執しているように見えているのだろう。

確かに少しは未練が残っている。だけどそれは自分は他の人間とは違う選ばれた一族の嫡子だからという理由ではない。そんな自尊心を守るためにくる感情ではない。

ただ

お前の隣に立ちたいだけなんだ。

「つくう〜」

間桐邸襲撃決行時間は深夜。あらかじめ切嗣のおっさんには友達の家でお泊り会をすると言いくるめてある。イリヤは最後まで一緒に行く譲らなかつたので、なんでも言うことを聞くと約束して引き下がらせた。

目の前には嫌な雰囲気あふれる間桐邸。

「それで本当にいいのか慎二?」

「何が?」

「いや、お前の爺さんを倒すことになるんだけど」

「ふん、いまさら?あの人のことなんて今更何とも思っていないよ」

「そうか」

どうやらあまり気にしてないようだ。

あつ、そうだ。

持っていた剣を慎二に差し出す。慎二は顔に疑問を浮かばせながら受け取る。

「…なにこれ?」

「渡しとくぞ。ここからは別行動で行くから。万が一逃げられたら困るからな。俺は裏口に回る慎二は正面から頼むぞ」

「何言ってるんですかね!?こんな重い剣振り回せないぞ!」

「大丈夫だって安心しろよ。それは俺の投影できるやばい剣の内の一つだから。振らなくても持つてるだけでいいぞ。よしじゃあ戦場で会おう（決め台詞）」

「ちよ、本気で言ってるのか?!」

俺はさっそうと裏口へ回る。まあ本来の10分の1の力も出せないけど、あの剣渡しときゃいけるだろ。相手は虫だし。

「あいつバカかよ… 普通戦闘経験のないやつを一人にするかね？」  
悪態をつきながら、家の中を歩く。生まれ育った家の中、その足の向かう場所は地下。

衛宮の話の通りなら、この間桐邸のどこかに虫蔵があるはず。今の時間帯なら、そこに桜と臓硯がいるはず。

そして、とある扉の前に立つ。

そこは昔から嫌な雰囲気が出ていたので、恐れて入ろうとしなかった扉。この館で先を知らない扉はもうここしかない。

扉を開ける。開きゆく扉の先から何か虫が這いずるかのような気色の悪い音が聞こえた。

衛宮からもらった剣を無意識に強くにぎりしめ、ゆっくりと階段を降り始める。

階段を降りるにつれ、虫の音が大きくなる。

「ここが…」

階段の果てには部屋があった。その部屋をのぞいてみると、大きな部屋の中に数えきれないほどの蟲が轟いていた。

そしてその中央に桜が生氣のない目で蟲にされるがまま漂っていた。

僕は一歩ずつ階段を降りる。刀を握りしめる力が強まる。

「ここで何をやっておる。 慎二」

ゾクッと背後から感じた悪寒に震える。

慌てて振り返ると、虫蔵の入り口に臓硯がこちらを見ていた。

「敵意を持った侵入者が二人入ってきたと思いきや。その一人がお前だとはな慎二」

背後で蟲を轟かせている臓硯は顔をゆがめ、笑う。

「愚かな雁夜の真似事か？お前はそのような性格でないと可愛がっておったのにな」

気づけば虫蔵の蟲もこちらに少しずつ近づいてくる。

「ふん、あんたの妄執もここで終わりだよ爺さん」

「ナヌ?」

体の震えが止まらない。今にも目の前の恐怖にくじけそうだ。

だが決めたのだ。かつての港で、いつかあの気に食わない男に並ぶほど強くなりたいと。

「ここでアンタの悪行は終わりだと言ったんだ。無能な妹のために、アンタを倒させてもらわないとね」

「はははは、その震えた体でどうするっていうのだ。妙な刀を持っているが、それを振るう技術など今のお主にあるまい」

そして蟲の大軍が臓硯から僕めがけて押し寄せる。

「クッ!」

僕は刀を強く握り、体ごと回転することで剣をふるう。すると

ゴウつと炎が刀身から発生し、目の前の大軍を燃やし尽くす。

「…なるほどな。その威勢だけは良い態度はその剣があったからか。だが四方から同時に攻められたらどうする?」

虫蔵にいた蟲が僕の四方から襲い掛かる。

士郎! お前が言っていたことを信じるぞ!

僕は振りかぶった剣を地面に突き刺す。体を熱が包み込む。熱い。とても熱いが、耐えられないほどではない。

剣を突き刺した僕に蟲が襲い掛かるが、僕に触れる寸前のところで蟲が炎に包まれる。蟲は本能的に僕に近づくのはまずいと察したのか、気色の悪い鳴き声を上げるが、とつさに止まることができずに僕に近づき炎に包まれる。

「自動防御する剣だと…バカな」

「喰らえ!」

もう一度、剣をふるう。飛ぶ炎は臓硯を両断し、燃やす。

「おどろいた。今のわたしにはどうやらお前を倒す手段がないようだ」

燃える臓硯から飛び出した蟲は桜のそばにもう一度その体を蟲で再生する。そして桜をつかみ持ち上げる。

「これ以上この工房を荒らされてはたまらんな。この小娘を人質

とするとしよう」

「ツ！お前！」

「ほれ、どうする慎二。今ここでこれを殺してもいいのか？」

臓硯は桜の首元に蟲の刃をそえる。

「ツわかった！この剣を置く！だから止める！」

僕は悔しさに拳を握りしめながら剣を地面に放りだす。放り出した剣は蟲の渦へと飲み込まれていく。

臓硯は桜の首から蟲を離し、笑う。

「はははっ！馬鹿な男よの」

ズドンと僕の体を何かが貫通した。蟲だ。いつの間にか僕の背後から猛スピードで貫いたのだ。

「ガハッ！」

「刀を失えば、魔術も使えないただの無能。仕留めるのに二匹もいらぬわ」

僕は口から血を吐き、蟲の群れに倒れる。蟲はごちそうが来たかのように生き生きときしむ音をだし、僕に食らいつく。

「お前の最期は、お前の母と同じように蟲の餌でよかろう。さて、もう

一匹も桜を人質にして仕留めるかな」

臓硯は桜をつかみながら、虫蔵を出る階段を上る。

横目で慎二の最後を確認しながら、薄ら笑う。

「お前の人生は、魔術すら何もできず、無駄な生だったな慎二」

「いいや、無駄ではないさ」

「ナヌ？」

臓硯は声がした虫蔵の入り口を見やる。

コツンコツンと階段を降りる音が聞こえる。

（おせえよ。バカ）

慎二は薄れ行く意識の中ほくそ笑む。

入り口から現れたのは衛宮士郎。だがその様子はいつもと違う、髪は白く染まり、肌は黒ずんでいる。

「俺の友に、ずいぶんとやってくれたじゃないか」

しかし、もつとも普段とは異なるのは。

いつもの優しい気な面影がさっぱりない、怒りに包まれたその顔であった。

「蟲よー!」

臓硯は何かを感じ取ったのであろう。虫蔵にいたすべての蟲を衛宮士郎に殺到させる。

士郎は迫りくる蟲に対して右手の人差し指を上に向けた。

「限定解放」

臓硯を感じ取ったそれとは

「すべてを切れ、鋼よ」

数十年忘れていた、死への恐怖であった

暗闇に沈んでいた意識が覚醒する。

「目が覚めたか慎二」

目を開けるとまず地面が瞳にうつった。

顔を声のしたほうにむけると士郎がこちらを心配そうに見つめていた。その髪は半分が白く染まっている。

「どれだけ気絶してた?」

「いやたったの数分だよ」

士郎の手を借りて起き上がる。

「爺さんは?」

「あそこ」

士郎が指さす場所には、頭だけとなった臓硯が瀕死になりながらも生きていた。

ふと横を見ると、桜が士郎の上着をかけられて寝ている。

「ほかの蟲は？」

「すべて切った。残った臓硯の蟲はあそこのやつらだけだ。まったく屋敷中にいるから手間がかかったぞ」

士郎は落ちていた剣を拾うと僕に差し出す。僕はそれをなげなしの力で握る。

「慎二。彼の500年の終わりはお前に任せる。俺は疲れたからここで見学するさ」

と言うと士郎はその場に座りこむ。

僕は脚を引きずって臓硯のもとまで歩く。

「嫌だいやだイヤダ死にたくないシニタクナイ」

「おしまいだよ。爺さん」

刀を構える。

「じゃあね。500年おつかれさま」

そして振りかぶる。死の炎は瞬く間に臓硯を包み込む。

『… ああ… ユステイーツア』

炎に包まれた臓硯は老人のそれではなく、青年の澄んだ声でつぶやく。

『終わるのだな。我が宿願も、我が苦痛も、マキリの使命もすべて残さず… 思えば… あつという間の500年だった…』

最後にそう呟き、臓硯は灰となって消えていく。

すべてを見届けた僕は、膝から倒れこみ、もう一度気を失った。



朝の日のまぶしさで目を覚ます。

寝坊している桜を起こし、僕は机の上にあったパンを食べ、学校へ桜より先にいく。

まだ朝早い時間に学校へとつくと、僕は校門を潜り抜け、校庭の一角へと行く。

そこではすでに馬鹿が高跳びの練習をしていた。

「おっ、慎二。おっすおっす」

その馬鹿は僕に気づくとふざけた挨拶をする。

「まだそんなくらい飛べないの？魔術使えるのにだらしないね」

「出そうと思えば（世界記録）」

「いいからさっさと飛んでくれよ？お前のせいでクラス対抗の高跳び部門に負けるのは嫌だからね。まったく。まず僕が手本を見せてやるさ」

今日もこいつとの一日は楽しくなりそうだ。

## つかの間の日常

さんさんと照りつく熱い日差し。

目の前には白く輝く砂浜に押し寄せる青い波。

これが屋内にあるとは普通思うだろうか？俺は思わない。

遠くにはウォータースライダーを、誰かが面白そうに叫んで滑っている。

しかし俺は不動。

熱い日差しをパラセルで遮り、ビーチチェアに深くもたれかかる。

さきほど売店で買ったサングラスを付け、そばの机から長いストローを伸ばし動かずジュースを飲めるようにする。

「これぞ至福」

「楽しんでますねお兄さん」

ちらりと声がした隣のチェアを見る。

そこにはあの傍若無人がすっかりなりを潜めたギルガメッシュの子供時代。通称子ギルがニコニコと笑いながらアイスを食べている。

「俺の予想より早くできたんすねわくわくざぶーん。あと5年はかかると思ってたのに」

「大人の僕が急ピッチで開発を進めたんですよね」

「だけど俺にとっては子ギルも結構苦手な部類なのだ。大人ギルガメッシュは論外として、こっちはこっちで怖さがある。」

「そういえば話は変わるんですけど、この間お兄さんのお友達が使っていた剣について」

「あつーイリヤが呼んでるわ!!それじゃ俺は行きますので!」

「あつー待ってくださいいよ〜」

ジュースを一気飲みした俺は、すぐさまこの場から離脱する。大人時代と子供時代とでコレクター癖が変わらねえぞオイ!

「ハアハア...」

さすがに建物の端から端まで全力疾走はきつい。

「士郎、どこ行ってたんだよ」

そう俺に聞いてきた慎二は浮き輪の上に座ってプールを漂っている。

「いや、恐ろしい最古のジヤイアンに追われていたんだ」

「?何言ってるのお前。てかお前の妹かまってやれよ。さつきからお前を探しててうるさいんだよ」

「まじか、イリヤはどこにんの」

「あつちだよ。ついでに桜もかまってやってくれ。僕はここでゆつくりするから」

こいつ面倒ごと押し付けやがったな。

「そんなことを言っちゃう慎二君にはおしおきだ」

「ん?なにすんだってうおおおっ!」

思いつきり浮き輪の端を持ち上げて、浮き輪に座っていた慎二をプールの中へと落とす。

「何すんだ士郎!」

「ははははは!めんどくさがりは泳いで肺活量でも鍛えてるがいいさ!」

その場からさっそうと立ち去る俺の背中に慎二の怒鳴り声が聞こえるが、俺はそれを無視してイリヤと桜のいる場所へ向かう。

「お待ちせイリヤ」

「あつ、士郎!どこ行ってたの?」

「ちよいとビーチチェアで一息ついてたのさ。桜も楽しんでるか?」

「はい。先輩」

イリヤと桜は椅子に座って、昼飯のお握りを食べていた。

「あれ?おっさんはどこ行ったんだ?」

周りを見るも、イリヤと桜の見守りを頼んでいた切嗣のおっさんがいない。

「切嗣ならトイレに行ったわよ。それよりも士郎!お昼ご飯を食べた

ら一緒に泳ごうよ！サクラも一緒に！」

「おつ、いいぜ。その前に俺も腹が減ったからお握りを一つまみつと」  
置いてあったお握りのうち、あまり形の整っていないお握りを食べる。

「あつ、先輩…… そのお握りは……」

「おつ！桜が作ってくれたのかこのお握り？うん、美味しいぞ！何個でも食える」

と手に取ったお握り二個を一口で食べる。昆布と鮭の王道コンボだなこれは。

「！…… フフ、のどに詰まってしまいますよ先輩」

桜はそれを見てほほ笑む。

慎二とともに地獄から救い出してからはや数か月。桜のメンタルカウンセリングとして衛宮邸でイリヤやふじ姉達と接させているが、結構良い効果があるようだ。

前まではめったに笑うことはなかったのに、ここ最近は少しずつ顔に表情が出てきている。

あと数か月くらいで、原作の明るさまでには戻るだろう。

「そういえば体の調子はどうか桜？痛いとかことかないか？」

「大丈夫ですよ先輩。先輩の治療のおかげか、前よりすごく元気なんです」

そう呟く桜の髪は、本来の髪の色にだんだんと戻ってきている。

「そうか！それならよかった」

桜には、俺の投影で出すとある剣で治療している。ほんとなら一度で一気に治したいのだが、なぜかあの剣は俺の出す剣の中でトップの反動があり、一度に数回しか使えない。治療しかできないのにどうして……

「シロウ！はやく泳ごうよ！」

「わかったわかった。ほら桜も行こうぜ」

「ありがとうございます、先輩」

イリヤに腕をつかまれて催促された俺は、手を桜に差し出し起き上がらせる。

流れるプールにほらいくどー

「お待たせイリヤ、桜ちゃん。トイレが混んでてつてあれ？二人ともどこ行ったんだ？」

その場にはトイレから帰ってきたおっさんがポツンと取り残された。

そのあとは流れるプールでゆっくりと時間を過ごし、50mプールで慎二と泳ぎを競い合ったり、ビーチバレーで間桐チームと衛宮チームとで別れ戦ったりなどした。

それにしても慎二がチートすぎる。あいつ魔術関係なかったら何でもできるな。ほぼあいつのワンマンプレーだったぞ。

そしてプールで数時間遊び尽くした俺たちはようやく家へと帰ることにした。日が傾き、きれいな夕焼けになっている。

俺は銭湯からの帰りのような、清々しい気分で家までの道なりを歩く。

するとイリヤが俺の後ろに気づかれないようにこっそりとやってきた。

「シロウ。すごい焼けてるよ。つんつと」

「あひゃあああ!？」

「アハハハハ何その声!？」

イリヤが俺の日焼けした背中をつんつとつまむ。それと同時に俺の背中に耐えがたい痛みが走り、気持ち悪い声を出してしまった。

「な、何すんだイリヤ!？」

「ふふふ、今夜のお風呂が楽しみなシロウ」

「あーあだから日焼け止め塗って言って言ったのに」

そう呟く慎二の体はあまり焼けていなかった。イリヤと桜も同様だ。

「男なら！日焼け止めなど使わずに焼くものだぞ慎二！てことで明日は俺の家の庭で焼けるまで帰さんからな貴様」

「理不尽すぎない!?!」

「士郎、あまりお友達をいじめちゃだめだぞ…」

そう切嗣のおっさんは呆れる。

今日はそのまま衛宮邸でお泊り会なので、衛宮邸へと直行する。

「ただいま〜セラ、リズ！」

「慎二、桜。入ってどうぞ」

「あっお邪魔します」

「†悔い改めて†」

「ん？なんて言った今」

俺は桜と慎二を家の中へと上げる。

「おかえりなさいませお嬢様。そしていらっしやいませお友達の方々。夕食の準備は既にできております。お手洗いをしてお召し上がりください」

「イリヤ士郎おかえり〜」

居間を開けると、セラとリズが待っていた。けれど夕食の準備をしたのはセラだけのようだ。リズはテレビを見ながら寝転んでいる。

「おっ…うまそうなハンバーグだなってイテテテ」

「手洗いをしてからと言ったはずですよ士郎」

ただ旨そうなのはんにウキウキしていただけなのに、セラに耳を引っ張られた。

「わかったってセラ！」

なんか俺にだけあたり強くないこの人？俺はプリズマ時空の士郎じゃないんだぞ！

洗面台に行き、手を洗う。

居間に行くと俺以外は既に座って待っていた。

「シロウ！遅いよ」

「ごめんって」

俺も急いで席に座る。

「それじゃあいただきます」

「いただきますー！」

切嗣の掛け声とともにみんなで食前の挨拶をする。

まずは野菜から食べる。ごまドレッシングをかけ、一口食べる。

冷蔵庫からとってきておいた納豆を箸でかきまぜ、ごはんに乗せる。ついでに生卵を入れることも忘れない。

納豆ごはんを食べながら俺は少し考え事をする。第五次聖杯戦争のことだ。

臓硯を倒した今、あとの不安要因は言峰ギルガメッシュのペアとキャスターについてだ。

遠坂はうっかりでエミヤを召喚することが確定してるだろうし、あの甘いから戦闘せずになんとかなるやろ。まあ遠坂のサーヴァントは俺に対して殺意高そうだけどね……

てか聖杯の汚染について後回しにしてたけど、どうするよ。

キャスターに頼みこんで、汚染を浄化してもらうか？そんなことできるか知らないけど。

それか俺のヤバイ剣シリーズで汚染をどうにかできるか試してみるか？汚染の概念ごと切ればなんとかなりそうな気がするけど。となるとやっぱり臓硯倒した時のあの剣か。

「ん？なんだ士郎ハンバーグ食わないのか？僕がもらってやるよ」

「は？」

隣から慎二がそう言っただけで俺のハンバーグを半分とっていった。そしてそれを一口で食べる慎二。

俺はダンと机をたたたく。

「久しぶりにキレちゃったよ……表出るコラア！」

「冗談だって！僕の半分あげるからさ！」

「それなら良いんだ」

俺は一気に落ち着き席に座る。危うくドンパッチソードが煌めくところだったぜ。

だけどこの恨みは忘れん。あとで格ゲーでボッコボコにしてやるから楽しみにしておけ。

食事の後は居間に横たわる。

行儀が悪いけど、プールで疲れてるから今日くらいいいだろう。

ふと横を見ると切嗣は眼鏡をかけて本を読んでいる。セラと桜は食器を洗っており、リズと慎二はお笑いの番組を見ていた。

「シローウー！」

元気な声が俺を呼ぶ。それと同時に腹に起こる衝撃。

……一瞬胃の中の物がのど元まで逆流してきた。

「今日はお風呂一緒に入ろうよく私が背中を洗ってあげるよ！」

「え？」

こんな歳にもなつて一緒にお風呂はまずいですよ！

「さすがにダメじゃないか？小学生のときならまだしも、俺たちもう中学生だし……」

「えーなんでだめなのよー」

「駄々こねても無理です」

それにそんなことしたらセラにお説教される。

だが俺の腹の上に乗るイリヤは邪悪な笑みを浮かべた。

「そういえば前にお泊り会一緒に行かせてくれない代わりになんでもするって言ったよね？」

「えっ、それは……」

数か月前なのになんで覚えてるんだこのロリっ子。

「ほらシロウはやくー！」



「ちよつと待ってせめてタオルは巻かせて」

結局なんでもすると買った手前、断ることができず了承してしまった。一緒に入ると聞いたセラのあの恐ろしい表情が脳裏によみがえる。

水を浴び、風呂につかる。焼けた皮膚にお湯の熱さが鋭い痛みを与える。

「イテテテテテ」

風呂の中で体を動かすたびに痛みが走る。これは一週間ほど痛みが続くな。

痛みがやわらいでくると、俺は今日の疲れをとるようにゆったりと湯舟につかる。

すると髪をシャワーで洗っていたイリヤが俺に声をかけた。

「シロウ髪洗ってくれる？」

「ん、わかったよ」

できるだけ痛みがこないようにゆっくりと風呂から上がる。

そして椅子に座るイリヤの背中側に膝をつく。シャンプーを手につけ、イリヤの髪を洗う。

そのまま無言でイリヤの髪を洗う。イリヤの髪はさらさらで手で梳いても髪同士が絡まることはない。

ふんふーんと歌うイリヤの声を聴きながらゆっくりと洗う。

「そういうえばシロウに聞きたいことがあるんだった」

「ん？なんだ？」

イリヤは鼻歌をやめると俺に顔だけを向け呟いた。

「シロウはいつも何に恐怖しているの？」

「！」

髪を洗う手が止まる。

「いつもいつも。ふざけているときも楽しんでいるときも眠っているときも。いつも何かを怖がってるじゃない」

「……」

士郎は拳を握る。それは何かを我慢しているかのようなようだった。

「な、なにを言ってるんだイリヤ。俺は別に…」

「嘘。私はシロウのお姉ちゃんなんだもん。わかるよ」

士郎は「はあ」と諦めたかのようにため息をこぼした。そして髪を洗うのを再開する。

「怖いんだ」

「何が？」

洗いながらポツリと呟いた士郎の言葉にイリヤが詳細を尋ねる。しかし士郎から返事が返ってこない。

「それって次の聖杯戦争のこと？」

髪を洗う手が少し固まる。凶星のようだ。

「大丈夫よ」

イリヤがそう呟く。

「お姉ちゃんの私が士郎を守るよ。絶対に」

「…ははは、頼りにしてるよお姉ちゃん」

「むう信じてないでしょ！シロウ！」

イリヤの髪についたシャンプーをシャワーで洗い流す。

その手の震えはなくなっていた。

「ギルガメツシュ」

どこかの教会の敷地内で、男は目の前で光の門を開いている王に話しかける。

「こんな時間に何をしているのだ」

「見てわからぬか綺礼。我が財宝の整理をしておるのだ」

そう呟く英雄王は王の財宝の最奥にてとあるものを発見する。

「これを探しておったのだ」

そしてギルガメツシユは空を見上げる。空には大きなゲートがギルガメツシユと綺礼を囲むかのように12個出現した。

「これは…」

それぞれのゲートから少しだけ姿を現したものに綺礼は久方ぶりの恐怖を覚えた。心臓はとつくの昔に止まっているというのに、緊張で鼓動が止まらない感触に襲われる。

「これを使うのは業腹だが、あの雑種との闘いならこれもまた一興か」  
英雄王はとてつもない存在感を放つ12の物体にニヤリと笑った。

風呂を上がったあと、俺と慎二は格闘ゲームをしていた。

宣言通りボッコボコにしてやると慎二は助けを呼ぶかのように後ろで見えていたリズと交代した。

そして俺は速攻でつぶされる。この人なんでこんな格闘ゲーム強いんだ。

そのまま数時間ほどしていると、セラに怒られたので寝る準備をする。

歯磨きをすまして、布団を慎二の分もあわせて敷く。桜はイリヤと一緒に寝るそうだ。

「よし寝るか」

俺は疲れ切った体を布団に沈める。今夜は数秒で眠りにつけそう  
だ。

「ちよ待てよ」

すると隣の慎二が俺の体を揺さぶって寝ないようにする。

「なんだ慎二」

「せっかく二人きりなんだ。恋バナでもしようぜ」

「それならまず慎二から話してくれ。慎二は気になってるやつとかいるのか？」

「僕はお前と違ってモテるからね。気になると思った時は既に行動は終わっているのさ。だから気になってるやつなんていないよ」

は？なんだこいつ自慢か？

「それよりも士郎お前はどうかなんだよ。イリヤスフィールか？桜か？それとも大穴を狙って藤村か？」

「やっぱり僕は王道を征く青セイバーですかね」

「誰だよ」

うるさいうるさい。俺はもう寝るんだ。

隣からのうるさい声をBGMにして、俺は眠りにつく。

ふと目が覚める。

襖の先から虫の綺麗な鳴き声が聞こえてくる。隣を見ると慎二が静かに眠っている。

妙に目が覚めたのでトイレに行くことにした。

慎二を起こさないように静かに襖を開ける。月明りが通路を照らしてくれているお陰で電気をつけずにすむ。

すると通路の途中で誰かが縁側で座っている。

「おっさん。寝るならちゃんとお布団に行けよ？」

「ん？ああ士郎か。大丈夫だよ」

切嗣のおっさんが穏やかな顔で座っていたので俺も隣に座る。大きな月が夜空に浮かんでいる。

そのまま数分、無言で一緒に月を眺めていると切嗣はぽつぽつとしゃべり始めた。

「士郎、僕はね。子供のころ正義の味方に憧れてたんだ」

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

「うん。残念ながらね」

切嗣は苦笑する。

「正義の味方は期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ……そんなこともっとはやくに気づけばよかった」

「そっか。それじゃあしょうがないな」

「そうだね、ほんとうにしょうがない」

「けど」

「ん？」

切嗣のおっさんがこつちに向く。俺も切嗣のほうへと顔をむける。

「あのとき。あの地獄から俺を救い出してくれたおっさんは、イリヤをあのかから連れもどしたおっさんは、俺たちにとって正義の味方だったと思うぞ」

「……ああ、そうか」

切嗣のおっさんの目から涙が流れる。

「僕は二人にとって、正義の味方になれたんだね。ああ……安心して」

おっさんは目を閉じる。その瞳からの涙が頬を下る。

そのまま数分ほど無言となる。俺はただ月を眺める。

「それじゃあ夜も遅いし寝よう」

「ズゴーーーーー!!」

「……かって、えっ!どうしたんだい士郎!いきなり庭にヘッドスライディングして!」

どうやら俺の思い違いだったようだ。ああ安心した。

「で」

次の日の昼頃。今日もまた昨日と同じように灼熱の日光が庭に降り注ぐ。

「なんで僕は庭で寝転んでいるわけ？」

「焼くためでしょ」

そう悪態つく慎二君は昨日まったく焼けていなかったもので、今日は全身焼かせます。

日光が目に入ると危険なので二人ともサングラスを着用し、庭の真ん中でシーツをひき、寝転がる。

「僕は別に焼きたくないんですけど」

「嫌だと言ってもするんだよ！」

暑い。昨日のわくわくぎぶーんはガラスで一枚隔てていたからか昨日よりも直射日光がすさまじく暑い。

「喉かわいた・・・喉乾かない？」

「もうどうにでもしてくれ・・・」

「オイルヌロツカー」

結局お互い、風呂に入れなほほどまで焼けた。

## 聖杯戦争の幕開け

ピピピピピピピピ

眠りの底に沈んでいた意識がうるさく鳴る音に覚醒してゆく。  
まだ寝ていたいのに。けど体を布団の中から起こさなきゃ学校に遅れてしまう。

「ふわあ~~~~~」

手を握って勢いよく起きる。そうしないと眠りの気持ちよさに負けてしまいそうだから。

そして鳴り続ける目覚まし時計のスイッチをたたく。

ベッドのそばにきれいに並べていた服に寝巻から着替える。

さあ今日も一日がんばろう。

自室の扉を開けて、居間へと向かう。

切嗣と可愛い弟にアインツベルンから連れ出され、この冬木にやってきてもう8年たった。

さすがにそれほどどの月日をこの家で過ごしているので、いまだに覚醒しきつてない頭でも、その足は自然と目的地まで歩く。

ふと気になったので立ち止まって窓から外を眺める。朝日が窓を通り体を温める。今日は晴れのようにだ。

「どうしたんだいイリヤ？外を眺めて」

視線を声かしたほうへ向ける。そこには浴衣を着た切嗣がいた。

「おはよう切嗣！今日は早いよね」

「ハハハ・・・昨日は士郎の特訓に付き合わされてね、いつもより早く寝たんだ」

二人して居間に入る。そこにはセラが既に朝ごはんの用意をしていた。

「おはようセラ！」

「おはようございませイリヤさん。それと切嗣さんも」

セラは私たちを見ると一礼する。

「おはようイリヤちゃん！切嗣さん！」

そして食卓にはすでに藤村大河が座って朝ごはんを忙しく食べていた。

「おはよう大河」

「随分と急いであるようだね大河ちゃん。何かあるのかい？」

「はい！これから急いでテストの採点をしなくちゃいけないんです！」

大河はそう言う勢いよく朝ごはんを食べていく。しかし、何かしら企んでいるようで何かを今か今かと待っている。リズは寝坊しているのかまだ寝ているようだ。

「あれ？士郎は？」

「あの人は先ほどまで道場で鍛えていたようです。先ほど呼びましたのですぐ来ると思っています」

すると居間の外から足音が聞こえた。

「おっすおっす皆」

入ってきたのは士郎だった。既に学生服を着ている。

「おはよう士郎！」

「おはよう士郎。朝から稽古かい？」

「ああ。筋トレしてたんだよ。ふじ姉もおはよう」

「ハイ、オハヨー」

なぜか片言で返事を返した大河はどこから出したのか新聞を読んでいる。

「ふう、朝から疲れましたよほんと」

明らかに怪しい大河を気にしてないのか士郎は大河の対面に座る。そして私もまた士郎の横に座る。

「それじゃあいただきます」

「いただきますー！」

いつものように切嗣のあとに食事の感謝の言葉を呟く。今日の朝ごはんはとろろごはんに味噌汁、焼き魚などがある。

「わあうまそー！」

士郎はそう呟き、テーブルの中央にある調味料へと手を伸ばす。



「フッフフ… あれ？」

大河が新聞をずらし邪悪な笑みを浮かべていたが、その顔は一瞬で崩れる。

士郎は調味料の中からソースを手を取ったのだ。

「あれ？士郎、それソースだよ？とろろごはんには醤油じゃなかったっけ？」

「ああ今日はソースの気分なんだよ」

と笑いながら士郎はソースをとろろごはんにかける。そこでごはんに流れる液体を見て私は（あれ？これソースじゃなくて醤油じゃない？）と気づいた。

「なんで…」

「あれれ？ふじ姉とろろごはんに醤油足りてなくなかない？しょうがないから俺が追加してやるよ」

「あつ！ちよつと待つ」

素早い身のこなしで醤油のボトル（中身はソース）を手を取った士郎は大河のとろろごはんに大量にソースを垂らす。

「ああ!!私のとろろごはんがああ！」

「ハハハハハ！この俺をだまそうとするなんて一億万年はやいわ！あつイリヤこれが醤油ね」

「あ、ありがとう…」

さつと士郎は醤油の入ったボトルを私に手渡す。  
「なにをしているんだい二人とも…」

呆れている切嗣は士郎と大河の喧嘩をよそに、ゆつたりと焼き魚を食べる。

私も二人の喧騒に笑いながら、朝ごはんを食べる。  
もちろんその後大河は遅刻した。

「イリヤー行くぞ〜」

「ちよつと待って士郎」

玄関で座って待つ士郎のために急いで準備する。学生服を着て、教

科書を鞆に入れる。

「士郎お待ちませ！」

「学校にほらいくど〜」

いつも通りふざける士郎に少し笑う。そんな彼に手を引っ張られて今日も一日が始まる。

「わが校は予算のバランスが極端なんだよ」

「はえ〜」

学校の資金繰りに眉をひそめるのは生徒会の長である生徒会長柳洞一成。学校についた俺とイリヤはクラスが同じなのだが、俺は一成に呼ばれていたので途中で別れた。

そして今一成に頼まれて古いストーブの修理をしている。

「直りそうか？」

「だめみたいですね」

「そうか…」

「ごめん嘘」

「どちらだよ!？」

少し不機嫌になる一成をなだめる。

「すまんちよつと外に出ててくれ」

「うむ。邪魔はせん」

生徒会室から外へ出た一成を確認して、魔術を行使する。解析をするのとストーブの不調の原因は手に取るようにわかった。

取り合えず今直すことができる断線などのストーブの問題箇所を修理していると、

「あら生徒会長」

「む、遠坂か」

「ん？」

どうやら生徒会室前の廊下に遠坂凜が来ているらしい。今外に出ると絡まれそうなので、おとなしくひきこもるとしよう。あの人怖いし。

廊下から遠坂と一成の会話する声が扉を通じて聞こえてくる。

作業に没頭すること数分、修理が終わったので外で待つ一成を呼ぶ  
「終わったか士郎？」

「ああ無事修理できたわ」

遠坂との会話が終わったのか、一成が生徒会室に入ってくる。どうやら遠坂はもうどこかへ行ったらしいよかったよかった。

そのまま一成とともに生徒会室を出て、自分のクラスへと向かう。既にクラスのみんな揃っているようだ。俺と一成はクラスへ入る。

「朝から精が出るね士郎」

「慎二」

クラスに入ると扉近く、一番右前の席に座っていた慎二がクラスに入った瞬間声をかけてくる。

「お前は朝練行ってたのか？」

「ああ。だからちよいと疲れててね。少し寝させてもらうよ」

そういうと慎二は机に突っ伏した。

「居眠りとは感心せんな慎二」

「一限目には起きるさ」

一成が慎二にそう言う。それならいいかと一成は自分の席へと座る。

「士郎！」

呼ばれたほうを向くと、クラスの窓際一番後ろという、主人公のほのほの俺を差し置いて主人公席に座っているイリヤがいた。ちなみにその前が俺の席である。

そして学校のチャイムが鳴る。

やべっそろそろ虎が来るじゃん座っておこ。

そして2月一番最初の授業が始まった。

「士郎！一緒に帰ろ！」

「おっけー」

今日最後の授業が終わると後ろからイリヤがいきなり飛びついてくる。さすがに慣れた。

俺とイリヤは部活動をしていないので、授業が終わると用事がなければすぐに家に帰る。

教室に残っていたクラスメイト数人に挨拶をして俺たちは教室を後にした。

下校する生徒で騒がしくなっている玄関で、靴を履き替え外に出る。

学校の中はストーブがついていたけどやっぱり外はまだ寒いな。

「士郎、イリヤスフィール」

「おっどうした慎二？」「どうしたのよ慎二？」

校門を通り抜けると、慎二が弓道着を身に着けて待っていた。

慎二は辺りを見渡し、周囲に誰もいないことを確認すると俺に耳打ちする。

「まだサーヴァントを召喚しないのか？こっちはもう桜がライダーを召喚してるといふのに」

「まあこっちにも都合があるのさ」

右手に最近できたあぎを見る。まだそれは本来の形にはなっていない。

「遠坂ももう召喚しているはずだし、あとはお前らだけだぞ。まあ士郎の投影があればそこらの英霊は太刀打ちできないだろうけど念には念を入れてせめて明日には召喚しておけよ？」

「わかったよ慎二」

そう伝えて満足したのか慎二は弓道の練習に戻る。桜と一緒に練習がんばっているようだな。

「まあ士郎はたぶんアーサー王が召喚されると思うよ」

「そうだろうな」

隣のイリヤが俺にそう言う。胸に手を当てる。俺のこの胸のなかに、アーサー王の剣の鞘が埋まっている。

この鞘が触媒となり、必ずあの青セイバーを引き寄せることができるだろう。

問題はイリヤのほうだ。

原作のイリヤが召喚していたかの大英雄ヘラクレスの触媒は残念ながら手に入ることができなかった。

本来ならアインツベルンに頼ればいいのだが、どうやら俺たちに触媒を与えたくないようだ。

頭にきますよ！

切嗣の手を借りようにも、既に10年も裏仕事から離れてる切嗣には頼る伝手も少なく、手に入れてもあまり強くない英霊の触媒しかないらしい。

既にセイバー、バーサーカー以外が召喚されているはずだ。俺がセイバーを召喚することが確定してるので、イリヤにはバーサーカーとなるが…

比較的マシな源頼光とか金時とかが来てくれないかな…

まあ召喚してから考えることにしよう。

そしてその日は終わる。始まりを明日に控えながら。

早朝、とある館。そこであるマスターとそのサーヴァントが話し合っている。

「なんだと？」

「だからマスターの候補よ。私の予想というか確信だけど一人は間桐慎二と同じクラスの

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに違いないわ」

「彼女が高校に通っているのか？」

「?そうだけど」

サーヴァントであるアーチャーは頭に手をそえる。それはまるで信じられないことを聞いたかのような反応だった。

「どうしたのよ?彼女のこと何か知ってるの?」

そんなアーチャーの様子をみて、マスターである遠坂凜が不思議に思って尋ねる。

「いや... なんでもない。それよりそのマスター候補とは話したことはあるのか?」

「ええ。前に一度だけ。アインツベルンって名前がつくから御三家の一人じゃない?気になってちよつと人となりを知るために話しかけたのよ」

「それで?」

「普通の魔術師のような考え方はしてなかったわね。魔術に興味がないさそうな感じ。衛宮君と彼のお父さんと一緒に住んでるらしいけど、関係性はわからないわ」

「何!?!」

「わっ!?!なによ?」

アーチャーは机をドンと叩き、身を乗り出す。

「衛宮とその父と言ったのか!?!」

「え、ええ。衛宮君とイリヤスフィールと親しそうに一緒に歩いてる男の人を見たことあるし、たぶん彼のお父さんだと思うけど」

「馬鹿な... じいさんがまだ生きてるのか?」

遠坂凜に聞こえないような声量でぶつぶつと呟くアーチャー。その様子に疑問を抱いた凜は

「ねえその人のこと何かしってるの?前の聖杯戦争でマスターだったとか?」

「... いや関係はない」

「本当？」

誤魔化しているかのような態度のアーチャーに疑問を抱いたが、また令呪を無駄に使って聞き出すのも馬鹿らしいのでその場は見過ごした。

「いったいどうなっているのだ・・・」

その真相はもうすぐわかる。

時は移ろい、その日の放課後。

「悪いな士郎。弓道場の掃除手伝ってもらって」

日が落ち、昼より寒くなった弓道場にて、慎二は床を雑巾で磨きながらそう言った。その口からは白い吐息がでている。

「ほんとだぞめんどくさいことさせやがって。おかげで切嗣のおっさんにイリヤを迎えにきてもらうはめになったじゃねーか。てか時期が時期なんだから掃除くらいサボれよ」

まだサーヴァントを召喚してないイリヤを一人で帰らせることは心配なため、切嗣に迎いに来てもらった。もちろんおっさんには名刀電光丸を持たせてある。

「そう言うなよ。僕は真面目で通ってるからね、サボりなんかできないのさ。それにライダーは家で桜を守らせていてね、僕が安全に家に帰るためにはお前が必要なんだよ」

「ちゃんと電光丸持ってたんだよな？」

「ああ。この通り」

そう言つて慎二は服の中から電光丸を取り出す。

「もう一個のあの剣はどうしたんだ？」

「あれはまだ僕が使うには早すぎるね。あのじゃじゃ馬を手懐けるのにまだ時間がかかりそうだよ」

「そうなのか？俺の言葉には素直に聞くのに・・・俺が作り出したからか？」

脳裏に妙に俺を慕っているあの剣を思い出す。俺を創造主とかよんでいたな。

「てか、手を動かしてくんない？いつまでたっても終わらないよこれ」  
「なんだア？てめエ…」

こいつこれが人にものを頼む態度か？

その後一時間ほどかけて、なんとか弓道場の掃除を終える。

「お疲れさん。ジュースでもおごってやるよ」

「じゃあ炭酸ジュースで頼むわ」

「了解」

それなりにきれいになった弓道場を一回り確認して掃除器具を片付ける。靴を履きかえ、そのまま外にでて弓道場に鍵をかける。

すると

「!!」

どこかから金属を打ち合う音がする。その音は止まることなく響いてくる。そこで俺は確信する。

「まじか、今日だったか」

「校庭からだね」

油断していた。まさか今日が運命の日だとは思わなかった。

「とりあえず様子見するでしょう。慎二、電光丸のスイッチを入れておけ」

「わかった」

慎二は懐から電光丸を取り出す。

「スイッチ入れたぞ」

「トレース、オン。音を立てるなよ慎二」

両手に電光丸を投影する。

そのまま慎二と音を立てずに校庭へと移動する。

校庭にたどりつくと、赤い外套を着た男と青色の衣装を身を包み、槍を持っている男が目で追いつけない速度で戦っていた。

その剣戟はすさまじく、打ち合いで生じた風がここまで吹いてくる。

その戦闘から少し離れたところでは、遠坂凜が真剣に戦闘を見ていた。



「赤い英霊と槍を持った男、ランサーか」

慎二は英霊同士の戦いを見て、分析を始める。

「遠坂のサーヴァントの赤いやつは両手剣を使っているな。セイバーではなさそうだが……狂気にまみれたバーサーカーでもないし、残りのクラスから考えて……もしかしてアーチャーか？お得意の弓は使わないのか」

「さすがだな慎二。お前の分析通りあの赤いやつはアーチャーだ。知ってるか？アーチャーは弓を使わないクラスなんだぞ」

「こんなときに何馬鹿な事言っただ士郎！戦闘の観察はもう十分だ引き上げるぞ」

「おかのした」

慎二はさすがに英霊二人相手では分が悪いと思ったのか、俺の背中を押し退を促す。俺も戦いたくないので反論せずに従う。

ランサーに宝具使われたら、概念ごと無くすヤバイ剣投影しなきやならんからね。さすがに初戦からあの剣を投影するのは嫌だ。

校庭から背を向け、静かに移動しようとするも。

「そこにいるのは誰だ？」

「なにっ？」

校庭からアーチャーの嫌な声が聞こえてきた。そしてランサーの殺意が身を貫く。

「フアツ!」

「くそっ！バレたか!」

アーチャーの野郎！俺と慎二が観察してるの鷹の目で見てやがったな！

「慎二！俺の後ろに隠れろ!」

「ああ!」

そして両手の電光丸に体をゆだねる。迫る死の槍に体が自動で動く。

ランサーの槍を右手の電光丸で止め、そしてカウンターでランサーの懐を左手の剣で殴りかかる。

「ほお」

ランサーは迫る剣を槍を回転させることではじくと、ランサーはバックステップで俺から距離をとる。

「ただの一般人かと思っただが、なかなかやるじゃねーか坊主」

「俺のは借り物の力だけだな」

ランサーに両手の剣を構える。頑張ってくれよ電光丸。

「臆病なマスターから帰還命令が出ているが… もう数手打ち合ってから退くとするかッ！」

ランサーは槍を構えると、ブンツと揺れるように姿が消える。

すると俺の両腕は自動で首の後ろへと瞬時に回る。耳に金属音が聞こえた。

それでは止まらず俺の両腕は動きを続ける。俺の両腕はそれぞれが独立して、右、左、上、後ろ、目に見えない速度で左右上下から迫る槍を電光丸は見事にはじき続ける。

「解せねえな」

ランサーは攻撃をやめて、俺を睨む。

「明らかに俺を捉えてないその目線。先ほど借り物と言っていたが… その剣がお前の体を動かしているのか？」

「さすがに気づくかランサー。確かに俺はこの両手の剣に体を委ねてるにすぎない」

「フン… 面白くねえ」

ランサーは槍を肩に乗せる。その顔は心底つまらなそうな表情を浮かべている。

「それでどうするランサー？このまま続けるか？それなら俺はとっておきを出すしかなくなるんだが」

「いいや、今夜はこれで終いだ」

そうランサーは呟くと、ランサーの背中から迫る矢を槍で全て撃ち落とす。

ランサーの背後を見ると、アーチャーが弓を構えていた。

「アーチャー。てめえはまた今度相手してやるよ。その時は今みたいに力を抑えず本気でな」

「負け惜しみを述べて、逃げ帰るならさっさとご主人様のところへ

帰ったらどうだランサー」

「チツ、次は殺してやるよアーチャー」

するとランサーは霊体化して消えた。俺は両手の剣を消す。どうやら言峰のところへ戻ったようだ。

「それで、どういうことか説明してもらおうかしら衛宮君と間桐君？」

声のするほうを向くと、遠坂凜が傍らにアーチャーを従え、ひきつった笑みを浮かべていた。

「どうすんだ士郎？」

後ろから電光丸を構えている慎二が声をかける。

俺はとりあえず遠坂とその傍にいるアーチャーにこう言った。

「まずうちさあ、お茶・・・あんだけど・・・話していかない？」

「はっ。」

その言葉を聞き、遠坂はこめかみに青い筋を浮かべた。

一触即発となった雰囲気には慎二が慌てて説得し、衛宮邸に連れていくことに成功した。もちろん慎二には頭を叩かれた。

「どうするんだ士郎、全部話すのか？」

衛宮邸への道の途中で慎二が話しかけてくる。

「そりゃそうよ。俺はさっさとこの聖杯戦争を終わらせたいんだよ。そのためにも遠坂には今の聖杯戦争の現状を知ってもらわないとな」

チラリと後ろを歩く遠坂を見る。その顔は先ほどのことにイラついているのかまだ俺を睨みつけている。

「まあそれもそうか」

慎二はそう納得する。

衛宮邸に到着すると俺はいつもの挨拶をする。

「入って、どうぞ」

「邪魔するぜ」「お邪魔します」

家に慎二と遠坂を招き入れる。

「アーチャー、いるんだろ出てこいよ」

「なんのようだ」

玄関先で霊体化を解除しアーチャーが現れた。その顔は俺など見たくもないかのように歪んでいる。

「お前も中に入って話聞けよ。なんでイリヤとじいさんがいるのか知りたんじゃないか？」

「！貴様どこまで知っている？」

「何もかもだけど？」

「・・・いいだろう」

殺気立つアーチャーは俺の言う通りに家の中に入る。

俺はアーチャーのあとに続き居間に入る。

「士郎、待っていたよ」

中に入るとおっさんとイリヤ、ライダーを連れた桜がすでに待っていた。

「それで、君がアーチャーなんだね」

「ああ・・・ そうだ」

アーチャーは切嗣とその横のイリヤを困惑した表情で見ている。

「さ、桜!? あなたマスターだったの!」

「そっそうです姉さん、すみません内緒にしてて」

桜とそのそばにいる英霊に衝撃を覚えている遠坂凜に桜は申し訳なさそうに謝る。

「ツ、まあいいわ!それで衛宮君!話について聞かせてくれるかしら」

遠坂は座布団の上にドサツと座りこむ。アーチャーはその後ろで腕を組み立っている。

俺も座布団の上に正座する。

「どこから話すべきか・・・ まずは聖杯が汚染されていることから話すとするか」

「なんですって!」

「これは切嗣のおっさんに話してもらおうほうが信ぴょう性があるか。頼むよおっさん」

「わかったよ士郎」

そうして切嗣は第四次聖杯戦争のことを話し出した。

セイバーのマスターとして参戦し、聖杯戦争を駆け抜けたこと。そして他のマスターを倒し、最後まで生き残ったこと。

そして聖杯から現れた災厄の泥のことを話した。

「聖杯が万能の願望器ではない呪われた存在であつたことを知った僕は、セイバーに宝具で聖杯を破壊させた。けどそれでは収まらず厄災の泥はあふれ出し、10年前の冬木大火災が起こった。そして」  
「そこで助け出されたのが俺ってわけだ」

親指を自分に向ける。遠坂は信じられないものを聞いたかのように机に倒れ伏す。その後ろのアーチャーはそういうことだったのかと頷いている。

「あーもう！で？これからどうするのよ衛宮君？」

机から起き上がった凜は俺に指さす。

「その前にまずアーチャーについて話したほうが良いんじゃないか。そうだろアーチャー？」

「？アーチャーがどうしたのよ」

凜は背後に立つアーチャーをチラリとみる。

「言いたくなければ俺がお前の正体について話すけどいいのか？」

「ふん…勝手にすればいいさ」

腕を組むアーチャーは俺の言葉にそう返す。

「おいどういふことだ士郎？その話は俺も聞いてないぞ」

隣に座る慎二が肘でつついてくる。

「まあこれは先に話しても信じてもらえないだろうからな。今まで秘密にしてたのさ」

「なんでアーチャーの正体について衛宮君が知ってるのよ？マスターである私ですら知らないのに」

対面に座る遠坂が当然の疑問を聞いてくる。アーチャーは無言を保っている。

「アーチャーが自分から言わないなら俺が言うけど」

俺はそう前置きをする。

「ぶつちやけて言うと、アーチャーの正体は俺だ。真名はエミヤシロウ。真正正銘未来の俺の姿だ」

アーチャーの正体を告げると、シンと居間の空気が止まる。

「ええーッ?!?!」

そして居間に大勢の驚きの声が響いた。

「どういふことよアーチャー!」

凜が後ろにいるアーチャーに飛び掛かって胸倉をつかむ。

「ちよっ!服を引っ張るな凜!」

アーチャーは暴走する凜を抑える。しかしアーチャーは俺の言った言葉を否定しなかった。

「うそだろ?この馬鹿が英霊になるっていうのか...?」

「喧嘩は買うぞ慎二」

慎二は俺とアーチャーを交互に見て愕然とする。

「先輩がアーチャーに...」

「なるほど、確かに似ていますね二人とも」

桜とライダーは俺がアーチャーであるという事実をかみしめている。

「これは...驚いたな、士郎が英霊になるとは」

「ふーん」

切嗣は驚いているが、イリヤは何を考えているのかその顔からは判断できない。

「落ち着け遠坂。一応言っておくが俺とアーチャーは厳密には同じ存在ではない」

アーチャーを揺らす手を止めた凜はこちらをゆっくりと振り向く。

「どういうことよ」

「俺とアーチャーは言ってみれば平行世界の自分同士だ。衛宮士郎であるという点は同じだが、その経歴はまったく異なる。ここにこの三人がいることがその証明だ」

俺は慎二、イリヤ、切嗣に視線を向ける。

「その三人がどうしたのよ」

「そこからはアーチャーが話してくれるよな」

俺はアーチャーに顔を向ける。アーチャーはため息をつく。

「どうやら… オレの願望はここでは達成できないらしいな」

アーチャー… エミヤは壁を背にして、座り込む。そして彼は淡々と正義の味方に憧れていた過去を語りだした。

摩耗しきったその記憶だったが、彼は少しずつ思い出しながら口に出していく。

かつてこの世界の衛宮士郎と同じように冬木の大火災時に切嗣によって助け出されたこと。

切嗣の死に際に正義の味方になることを誓ったこと。

そして、第五次聖杯戦争に巻き込まれたということ。

彼の語る聖杯戦争の内容は凄惨なものだった。

慎二、桜、イリヤスフィールのことはもちろんとして、その裏に暗躍する神父。そしてさらに底に潜む災厄。

彼が第五次聖杯戦争で得た体験をすべて話した。

「全てを救うという理想を追い求め、生前抑止と契約し、オレは死後守護者となった。霊長の守護者として世界を救うために殺して、殺しくした。それに終わりなどなかった」

彼は死後のことも語りだした。その口調はどこか投げやりとなっている。

「理想に絶望したオレは、ただ過去の英霊になる以前の自分を自らの手で殺すことだけを希望としてきた」

だが、とアーチャーは俺を見てそう呟く。

「どうやらこの世界のオレは正義の味方なんぞに憧れてはいないらしい」

「そうだな」

俺は他人を無条件で救いたいと思うほどできた存在ではないし、死後を明け渡すほどの理想を持っていない。

エミヤはそんな俺を見てうなだれる。彼の心境を思い量ることはできない。

「確かにいまのアーチャーの話が事実なら、この世界の衛宮君とは状況が違うようね。衛宮君のお父さんはまだ生きてるし、敵であったは

ずの間桐君もイリヤスフィールさんもここにいるし」

遠坂は三人を見ながらそう呟いた。

「シロウ」

いつの間にかエミヤのそばにイリヤが移動していた。彼女はエミヤの頭を抱き寄せる。

「今まで頑張ってきたんだね」

「やめてくれイリヤスフィール… オレはお前を救うことができなかったのに…」

「関係ないよ。だって私はシロウのお姉ちゃんなんだもん」

イリヤの腕に包まれるエミヤの顔には雫が走る。

「ああ… そうだったな」

その顔にはわずかばかりの笑みが浮かんでいた。

「それでこれからどうするのよ？ とりあえずエセ神父つぶす？」

遠坂がエミヤとイリヤを尻目に俺に話しかけてくる。どうやら言峰に強い憤りを感じているようだ。

「いやここはまずキャスターに同盟を申し込む必要があると思う。あのキャスターなら聖杯とその泥を分けることぐらいならできるはずだ」

「キャスターね… さっきのアーチャーの話からキャスターの真名はメディアであってるのよね？ そしてそのマスターは葛木先生ね」

「そのことは僕と士郎が確かめたさ。確かに葛木先生はキャスターのマスターだ」

慎二が話に混ざってくる。この間、俺と慎二は葛木のあとをつけて迎えに来ていたキャスターを確認しているのだ。

「それで一番の問題は… やっぱりギルガメッシュね」

遠坂が苦虫をつぶしたような顔をする。

「まあこちら側のサーヴァントの数なら何とか倒しきれるかしら… これから衛宮君とイリヤスフィールさんのサーヴァントを召喚するんでしょ？ ならこっちは4人か…」



「そのことなんだが、話がある」

俺は右手を上げる。これは今までみんなに黙っていたことだ。

「あの人との決着は俺だけでつける。皆は言峰と汚染した聖杯を頼む」

「な、なに言ってるんだ士郎！」

隣の慎二が動揺して俺の肩をつかむ。その手は震えている。

「お前が言ったんじゃないか！ギルガメッシュは次の戦いで慢心しないって！お前ひとりで戦うのは危険すぎる！」

「なに？」

慎二のその言葉に反応したのはかつてギルガメッシュと戦った経験があるアーチャーだった。

「あの男が慢心しないというなら、こちら側の英霊だけでは勝負になるかわからんぞ。何か考えがあるのか小僧？」

「ああ、そう言うと思ったからあらかじめ投影はしておいた。見せたほうが早いよな俺のヤバイ剣を」

俺は右手の人差し指を上に向けて、投影開始と小さく呟く。

「!!」

その部屋にいたライダーとアーチャーが反射的に武器を取り出し、それぞれのマスターの前に立つ。

「小僧：：なんだそれは」

アーチャーは冷や汗をながしながら、一瞬にして髪が白く染まり、体の皮膚が黒く変化した士郎の指の上にある物体を注意深く観察する。

「これが俺の数ある武器の中で頂点に立つ剣だ。この剣が投影できさえすればどんな相手だろうと終わる」

士郎は投影を解除する。するとその体の色素は少しずつもとにもどっていく。

「これが対ギルガメッシュ用の剣だ。他にもいろいろあるけど見るか？」

「フン：：今はよそう。大丈夫か凜？」

「大丈夫ですか桜？」

アーチャーとライダーは武装を解除すると後ろで腰を抜かしているマスターを支える。

「びっくりした・・・体が切られたかと思ったわよ」

「兄さんから先輩はすごい剣を出せると聞いていましたが、まさか実物があんなにすごいなんて・・・」

凜と桜は苦笑いを浮かべる。

「馬鹿やろう士郎！いきなり投影するな！気失うとこだったぞ」

「ははは悪い悪い、これが一番アーチャーと遠坂を手っ取り早く納得させられると思ったんだ。イリヤも大丈夫か？」

「え、ええ。けど心臓が悪いからもうやめてね士郎・・・切嗣がショック死してしまうじゃない」

「僕はそこまで弱くないよ!?!」

イリヤの言葉に切嗣が反論する。

「なるほど・・・今の剣で確かに納得したわ。ギルガメッシュはあなたに任せていいのね衛宮君？」

「ああまかせろ」

俺は拳を胸に叩きつけ、そう啖呵をきる。

「それじゃ話は纏まったことだし、サーヴァントを召喚するか」

「そうね。まず衛宮君とイリヤスフィールさんのサーヴァントを召喚しないと始まらないしね」

魔法陣は土蔵に書いてある。まずはそこに行くことにしよう。

頼むから青セイバーで頼むよお（フラグ）

とある教会にて、

「それで？言峰。泥を吐き出す準備はできたのか？」

片手にワイングラスを持ち、その男は優雅にワインを飲んでいる。その目線の先には、神父の服を着た男が神に祈りをささげている。

「ああ。お前の手伝いのおかげで一騎もサーヴァントを落とすこともなく聖杯を顕現させることができそうだ。あとはもういつでも泥を吐き出させることができる。それにしても、どうしてこんなに急いでいるのかね？」

「此度の戦いは最初からクライマックスといったものよ。既に7騎の内半分の英霊が今頃あの雑種と徒党を組み、こちらを襲撃しようとして企んでいるだろうさ」

「なるほど。彼らは既に聖杯に潜むこの世すべての悪を知っていると  
いうのか。」

面白くなさそうに言峰は勢いよく聖書を閉じる。

「そう怒るな言峰。あと二日もすればお前の望む光景が見られるだろうよ」

「私はそれぞれのマスターたちの苦悩をじっくりと見たかったのだがね。まあいいだろう」

言峰は教会の出口へと向かう。そして扉の前で立ち止まり呟く。

「衛宮士郎とは一対一で戦うのか？」

「そうだ。貴様であろうと邪魔は許さんぞ」

「ハッ、まさか。私はお前の戦いに混ざるほど強くはないのでな」

会話を終わると言峰は扉を開き外へと歩いて行った。教会にはギルガメッシュただ一人が残される。

「フム… 8年ほどか」

手元のワインを揺らしながら英雄王は何かを回想している。その顔には笑みが浮かんでいる。

英雄王はただ今か今かと決戦を待ち望んでいた。

## 最初で最後の戦い

居間を出た俺とイリヤは揃って玄関へと歩く。

「ところでさつきはうつかりしてて聞き忘れたけど、どうしてあなたが並行世界で起きたことを知ってるのよ?」

玄関で靴を履いていると、背後から遠坂にそう質問された。

「うーん、それは秘密だ」

「は?」

背後からポキツと指を鳴らす音が聞こえた。彼女のこめかみに青筋が浮かんでいることがたやすく想像できる。

「無駄だぞ遠坂。僕がずっと前から情報の出どころを尋ねてるのに全然教えてくれないからな」

慎二がそう言つて遠坂をなだめる。遠坂はため息をつく。

「まったく…イリヤスフィールさんも気にならないのこれ?」

「士郎が秘密にしてるなら、無理して聞きたくないかな」

困ったかのように隣のイリヤが苦笑する。

「そうだそうだ」

「アンタは黙ってなさい!」

俺がイリヤを援護すると、遠坂が怒りながら俺に指をさした。

俺は遠坂の鬼のような視線から逃げるため、みんなより先に外にでる。

「やつぱり夜になると寒いな」

ハアアッと息を口から出すと、白い吐息が空中に消えていく。

「うわっ!寒いわね」

外に出てきた遠坂が腕をさすりながら出てきた。慎二とイリヤも寒そうにしている。

よし早く土蔵にイクゾー

庭へと回り、土蔵の中に入る。

「どつちから召喚するんだ士郎?」

土蔵の床に書かれた召喚陣の前で慎二が尋ねる。

「そうだな… 最初はイリヤがやってくれるか？」

「私？… うんわかった」

了承したイリヤは召喚の準備を始める。俺は原作のように、一番最後でいいだろう。

「イリヤは触媒がないからな、たぶんイリヤの性質に近い英霊が呼び出されるはずだ」

桜とライダーのように触媒無しではマスターの性質や縁で英霊は呼び出される。イリヤはどういう英霊が来るだろうか。可愛い英霊でも来るのかな？

準備が終わったのか、イリヤがこちらへと振り返る。

「それじゃ始めるよ？」

「おっけ。遠坂と慎二は念のため離れておいてくれ。危険なサーヴァントが呼び出されるかもしれないからな」

アーチャーはたぶん霊体化して、イリヤの近くで見ているだろう。頼りになる護衛だな。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

イリヤが召喚を始める。彼女の周りには魔力の渦が流れ、それが召喚陣に吸収されていく。

イリヤは召喚の呪文を続ける。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——  
——！」

あれそういえばバーサーカー専用の呪文じゃなかったけど、こんなとどうなるんだ？

召喚陣が強く光る。あまりのまぶしさに手で光を遮る。

「わっ!？」

「!?!イリヤッ!!」

傍に立っていたイリヤの姿が召喚陣に吸い込まれるかのように遠ざかる。慌てて手を伸ばして掴もうとするも届かない。

光が強まる。視界全体が白く染まり、何も見えなくなる。

「これは…」

いつの間に霊体化を解いていたのか、アーチャーの驚く声が聞こえる。

そして急速に光が弱まる。召喚陣の中央には、何らかの民族衣装を着てぺたんと女の子座りをしているイリヤがいた。ん？これは…

「フアツ!？」

「…イリヤスフィールなのか？」

俺の混乱を無視して、隣にいるアーチャーが注意深く目の前にいるイリヤを観察する。イリヤは何かを考えているのか頭に手を当てている。

「…なるほど。そういうことね」

座っているイリヤは何やら呟くと、立ち上がる。

「ちよつと！何が起こったのよって、ええっ!?!イリヤスフィールが!」

「視界が真っ白になったと思っただらどうなっているんだこれ…」

後ろから遠坂と慎二が土蔵に顔だけを出して驚いている。

「大丈夫よ。私に召喚された女神たちが力を貸してくれるみたい」

「… 召喚されたのは女神だど？聖杯戦争では神霊は召喚できないはずだが… そうか、疑似サーヴァントか」

「知っているのかアーチャー!」

イリヤの呟いた言葉にアーチャーがなるほどとうなずく。俺は知ってるけど一応尋ねておこう。

「なんだその口調は… まあいい。疑似サーヴァントとは人間を触媒にした強引な英霊召喚だ。普通では召喚できない神霊や英霊に至れなかった幻霊などを、触媒となった人間に憑依させ呼び出すことができる。通常なら呼び出した英霊のほうの人格が強くなるらしいが… 特に変わりはないようだな」

「うん。女神たちはその力だけを貸してくれたみたい」

確かアイヌの女神シトナイ、フィンランドの女神ロウヒ、北欧神話のフレイヤが合わさったハイ・サーヴァントなんだっけ。fgoでもイリヤの性格が前面にでてたな。女神に人格奪われてなくてよかつ

た… まあ奪われてたら強制退去させてたけど。

「もう何が起きても驚かないわよ私。」

「異常事態が多くないかこの聖杯戦争」

イリヤの姿を見て、遠坂と慎二は心底疲れたような表情をしている。

イリヤはそんな二人を見てくすくす笑うと、両手で民族衣装のスカート裾をつまみ持ち上げて、丁寧な一礼をする。

「真名はシトナイ。クラスはエクストラクラスのアルターエゴ。けど今まで通り名前を呼ぶときはイリヤでいいわ」

そう呟くとイリヤは俺に向けてにっこりと笑った。

ちよつとだけ見惚れた。この子は天使か？

「じゃあ次は士郎の番ね！」

イリヤの召喚に呆然としてみると、イリヤは俺の腕に抱き着いてくる。イリヤが疑似サーヴァントとなった事実困惑したもの、少し落ち着いてから召喚を始めることにした。

土蔵の中に俺だけが入る。先ほどイリヤが使った魔法陣をそのまま使うことにする。

右手を召喚陣に向ける。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。以下省略！来てくれ青セイバーアアアアツツツ！！」

「どんな呪文だよ」

慎二のツツコミが土蔵の外から聞こえる。

だが召喚は成功したようだ。魔力の渦が先ほどと同じように召喚陣に吸い込まれていく。

光ではなく、青い煙が土蔵に舞い始める。そして彼女が姿を現した。見知った顔立ちである。

「召喚に応じ参上した。貴様が私のマスターという奴か？」  
だがその青セイバーはただ黒かった。

「ごめんなさい、泣いてもいいですか？」

場所は変わって衛宮邸の居間。そこでは先ほど召喚したセイバーが食事をとっていた。

「もつきゆもつきゆもつきゆもつきゆ。なるほど話はわかった。」

至急遠坂にジャンクフードのハンバーガーを作ってもらい、セイバーアルトリアオルタに土下座して献上した。

そしてさつき居間で話したことをセイバーに伝える。

「もとよりこの身に聖杯に叶えさせる願望などない。汚染されているというのなら悉くを破壊しつくそう。それはそうと凜、追加のハンバーガーをもってこい」

「はっ、ありがたき幸せ！遠坂！追加のバーガー頼む」

「っ、疲れた。どれだけ食うのよこいつ」

「…手伝ったほうがよさそうだな」

台所では遠坂が息を切らして料理をしていた。それを見て、アーチャーが応援に向かう。

「これで一応は7騎揃ったのか？なんだか異常が多いけど」

慎二が台所の戦場を引き攣った顔で見そう眩く。確かに。アサシンはキャスターが召喚しているはずなのでこれで7騎揃ったな。

「よしそれじゃあ作戦通り、明日はキャスターのところへ行くか」

そしてそれが終わればいよいよあの人の決戦だな。



そして時間は飛び、次の日の放課後。

既に夕日が地平線に沈み、夜の暗闇が町を覆う。

俺たちはキャスターがいる柳洞寺へと足を運んでいる。

「イリヤ本当に一緒に来るのか？ 戦闘するつもりはないけど、あっちが攻撃してきたら危険なんだぞ？」

「もう過保護なんだから士郎は。女神たちの力を借りてる今なら、こちらの英霊じゃあ私に太刀打ちできないわよ」

本当はイリヤを切嗣と一緒に留守番させたかったのだが、本人が行くといって聞かなかつたのだ。

「まあいいじゃないか士郎。こっちにはセイバー、アーチャー、ライダーがいるんだ。あっちもそう易々と攻撃はしてこないさ」

「慎二」

そう呟く慎二は俺が前に渡した剣を肩にかけている。

ライダーのマスターである桜は、戦いに向いていないため切嗣と留守番している。その代わりとして慎二がきたのだ。

「着いたわね」

遠坂が目の前にある柳洞寺へと続く大階段を前にそう呟く。

「フム…」

アーチャーが階段とは違う場所から敷地内へと手を伸ばす。

するとバチツという音とともに、アーチャーの手は跳ね返された。

「やはり英霊が階段以外の場所から入ってこられないように結界が貼ってあるな」

「そのようですね」

その隣のライダーもそれを確認する。

「それじゃあ正面突破といくか」

そして俺たちは階段に足を踏み入れた。

周りを注意しながら長い階段を一步步上っていく。

階段の横には雑木林が広がり、そこから鳥の鳴き声が時々聞こえてくる。

ふと顔を上に上げると、満月が階段の続く直線上に奇麗に輝いてい

る。そしてその大きな満月を背にして立っている男が階段の先にいた。

「これはこれは、ずいぶん豪華な顔ぶれよな」

セイバーが俺の前に立ち、その剣を構える。

階段の先で待っていた男、アサシンは腰に備えた刀をチャリと鳴らす。

「なるほど。あのキャスターの女狐めが言っていたことは本当だったようだ。既にこちらの陣営は孤立していたか」

アサシンはそう言うと、階段の端に寄りその場で座る。セイバーはその様子を見て怪訝な顔を浮かべる。

「どういうつもりだアサシン」

「なに、どうせならこの身果てるまで其方らと果たし合うところだが、あの女狐めに通せと言われているのでな。行くがよい」

「キャスターが私たちを．．？」

遠坂が疑問に思う。確かに俺たちを素通りさせるのは怪しいな。

「どつちにしろここで立ち止まっても仕方がない。さっさと行こうぜ」

「うーん、まあその通りね」

慎二がそう告げると遠坂は同意する。

階段の端に座るアサシンのそばを通りぬける。彼は横を通る俺たちに気を向けずただ夜空を眺めている。

「ようこそ。私の工房へ」

階段を上りきり、門をくぐると、キャスターが俺たちを待ち構えていた。

「アサシンを戦わせることなく通すとは何を考えているキャスター」

アーチャーが腕をくみ、高圧的に尋ねる。

すると目の前のキャスターはハアとため息をつく。

「さすがの私の工房でも1対4では分が悪いわ。それにどうやら戦いに来た雰囲気じゃなさそうだし」

キャスターはこちらを一人ずつ確認する。話合いをする気がある

なら話は早い。

「それなら単刀直入に言う、俺たちと同盟を結んでくれキャスター」

「あなたたちと同盟? どういうことかしら?」

俺はキャスターに事の顛末を簡単に聞かせる。

聖杯の汚染、裏に潜む首謀者の目的。そしてギルガメツシユのことをかいつまんで話した。

そして説明をし終わるとキャスターはなるほどねと頷いた。

「聖杯の泥。確かに私の魔術で分離くらいはできそうね」

「ほんとうか!」

「でもその話を私が受けるメリットはあるのかしら? 私は別に聖杯を浄化せずとも願望をかなえるくらいなら使えるし、その言峰とかいう相手との戦いに混ざる意味がないわ」

「メツ!」

確かにキャスターの言ってることには一理あるように思う。彼女は聖杯の汚染など関係なしに願望を叶えることができる力がある。汚染した聖杯を守っている言峰とギルガメツシユという相手にわざわざ危険を冒してまで戦いを挑む必要はないのだ。

何か良いメリット... メリット... あっ、あれだ。

「えっと、同盟に参加したら簡単に受肉できて、愛している葛木先生と末永く一緒に暮らせますよ」

「?!?ゴホッ!ゴホッ! 馬鹿にしてるの貴方!?!」

「えっ、結構真面目に考えたんですけど...」

俺がしぼりだしたメリットを口にする、キャスターは驚きでむせた。

「と、とにかく! そんなバカげた話は聞いていられないわ! 今日のところはさっさと帰って頂戴!」

「うわっ! 押さないで押さないで!」

動揺しているキャスターは俺を門まで押し返す。

えっ?! マジで帰らされるのこれ!?! せっかくここまで来たのに!?!

「まったく何だったのよあの坊や…」

キャスターは柳洞寺に張っている結界の不備がないか確認している中、つい先ほど追い返したマスターとそのサーヴァントたちを思い返す。

「私が宗一郎様を思ってるということも知られているし…」

どこからバレたというのだろうか。今まで他人にそんな素振りを見せたつもりはなかったというのに。

「ああ、勢い余って追い返してしまったわ」

本当は同盟を最初から受け入れるつもりだった。あの坊やの話を聞くかぎり、教会の神父と最古の王を倒さなければ、この世は地獄と化してしまう。宗一郎様といつまでも一緒にいたい自分にとっては死活問題なのだ。

同盟について渋ったのは、いくらかこちらに有利な約束を結ばせるため。相手が引き下がって、それが達成できたら喜んで協力したというのに。

それもこれもあの坊やが悪い。つい凶星をつかれて恥ずかしくなって追い出してしまった。次どういう顔をして同盟を受け入れればいいのか。

そういえば、とキャスターはあの坊やのことを考え始める。

妙な少年だった。一見ただの男なのだが、その身には何か恐ろしいものが潜んでいる気がした。

ただの杞憂なのかはわからない。

「確か名前は衛宮士郎だったかしら」

その他のマスターも彼と同じような年齢だったから、彼らはもともと友人同士だったのだろうか。それを知るすべは今はない。

連絡手段でも用意しておけばよかったわね。

キャスターは彼らが次に来た時は同盟のお誘いをしっかりと受け入れることに決めた。

結界の見回りが終わり、思い人の宗一郎の元へと戻ろうとしたその時。

「あの雑種がどうかしたかキャスター？」

「ハッ!？」

蛇ににらまれた蛙の気分に一瞬落ちる。すぐさま声がした後ろを振り返る。

柳洞寺の入り口の門の屋根に誰かが立っている。その男は腕を組み、こちらをその赤い目で見降ろしている。

「ギ、ギルガメツシュ…。」

誰なのかはすぐにわかった。これほどまでに存在感がある英霊は片手で数えるほどしかないだろう。

屋根に立つ男、ギルガメツシュは無表情でキャスターを見ていた。

何の成果も!!得られませんでしたア!!

さすがに追い返されるとは思わなかった。いったい何が駄目だったんでしようかねえ。

これにはいつも無表情のセイバーも苦笑い。

「絶対士郎のあれが原因だよな」

「そうね。あれがなきやキャスターも受け入れてたわよ」

「はあ… 士郎ったらもう」

俺の後ろで歩く三人からの非難の視線が体を貫く。

「過ぎ去ってしまった過去のことより、重要なのはこれからの未来

「じゃないかい？」

「たわけ！」

「痛い!？」

必死の言い訳をするも、アーチャーに頭を叩かれる。きやあ自分いじめ!

「しようがない... 次は俺のスライディング土下座で何とかして同盟加入の意思を勝ち取ろう」

「それはカッコつけて言うことなのでしょうか...？」

うるさいんじゃない!

失意のうちに、俺たちは衛宮邸への帰還を果たす。

明日、もう一度キャスターのいる柳洞寺に行くとしよう。

急がなければあの人動いてしまう。

その後は衛宮邸の居間で会議を行っていた。それぞれの役割を再確認したり、言峰とギルガメッシュがどのような行動をとってくるかを考察するなどしていた。

会議が終わると俺は息抜きに庭にでる。

「おっ、雪だ」

空からふわふわと雪が舞い落ちてくる。2月に入ったけれど、季節はいまだに冬だ。雪も降るだろう。だがこの程度なら雪が積る心配はない。

「士郎、何しているの？」

「ん? ああイリヤか」

背後を見ると、イリヤがシトナイの姿となって庭に出てきていた。

「寒くないかその恰好？」

「大丈夫。魔術で温めているから」

そう言っただけ抱き着くイリヤの体は確かに暖かい。

「士郎... 本当に一人であるの金ぴかと戦うの？」

「うん」

俺の胸に飛び込んできたイリヤは少し震えた声で俺に尋ねる。俺はすぐさま返事を返す。

俺の体にまわしているイリヤの腕の力が少し強まる。

「…もう、しょうがない弟なんだから。士郎！少しかがんで！」

「ん？…こうか」

身をかがめ、イリヤの顔と自分の顔の高さを同じにする。すると

「ん」

「ファッ!？」

イリヤが頬にキスをしてきた。

「な、なにすんだイリヤ！」

「ふふふ、女神の祝福！」

そう呟いたイリヤの顔にはほんのり朱が注いでいる。俺も恥ずかしさで顔が真っ赤になっているだろう。

「信じてるよ士郎。無事に帰ってくるって」

「当たり前だろう？あの人をすぐに倒してイリヤと皆のところへ駆けつけるよ」

そうイリヤに宣言する。白く冷たい雪が俺たちの周りを舞う。

息抜きもこれで十分かと思い、玄関に戻ろうとすると、

「ふむ…」

「どうしたんだ皆？」

玄関の前でアーチャーとセイバーとライダーがいた。

どうやら何かがあったらしい。

「士郎。サーヴァントがこちらに向かってきている。注意しなとセイバーが黒い鎧をまとい剣を構えていた。」

「サーヴァント？一体だれが…」

俺も両手に電光丸を構える。そして門の目の前まで来ているというサーヴァントに注意する。

「クツ…よかったここで合ってたようね」

「キャスターと葛木先生!？」

キャスターが血まみれになりながら、ボロボロの葛木先生に肩を貸していた。安心したのかキャスターはその場で倒れる。俺は彼女が地面に倒れきる前になんとか二人の体を支える。  
「まったく疲れたぜ」

その後ろからはランサーが息を切らして入ってきた。その胸には穴が開いており、穴を通じて向こうの景色が見えていた。  
「ランサー!?! 一体どうしたんだ?」

ランサーは門に寄りかかり、その場に座り込む。

「なに、言峰の野郎に令呪が使われてな。くだらねえ儀式を阻止しようとしてたのがバレたのか、槍でオレを貫かせやがった。だが心臓を穿たれたぐらいで俺は死なねえ。あの金ぴかに殺されそうになっていたその二人を担いで逃げてきたのさ」

たくツイてないぜとランサーは呟いた。

それより先に回復させねば。

「――トレース、オン 投影、開始!。真名解放、シン・サイフオジオ!」

右手を前に出し、金色の魔王の友の剣を投影する。

空中に4本の剣と4つの翼が出現する。それらは中央にある球体を中心として回転を始める。

「おお、こりやすごいな」

ランサーが自らの胸を見ると、体を貫通している穴がどんどんふさがっていく。

キャスターと葛木の怪我もみるみる回復していく。

彼らが完全に回復したのを見て少し安心するも、強烈な眩暈が襲う。やはり一度に数人を回復させるこの剣は負担が強い。

「小僧、そこで休んでいろ、あとは私たちがどうにかする」

「頼む」

俺は玄関に入り、そこに座って休む。

あとで何があったかキャスターから話を聞くとしよう。



暗闇に飲まれていた意識が覚醒する。

「……(こ)は？」

瞼を開けると知らない天井が目映る。

「そうだ宗一郎さま！」

自らの身に何があったのかを思い出し、勢いよく飛びあがる。彼は無事なのか。

すると横に気配を感じたので顔を向けると、そこには彼女の思い人が静かに寝ていた。傷も見当たらない、彼らが治してくれたのだろうか。

「よかった……」

飛び上がらせた体を安心したのか再び布団に沈めるキャスター。

「起きたかキャスター」

「坊や」

襖が開けられ、廊下から衛宮士郎が入ってきた。

「話はランサーから聞いたよ。それで、同盟を結んでくれるか？」

「もちろん。その話受けいれるわ」

やられっぱなしじゃられないもの。

居間にはアサシンを除く6人のサーヴァントがそろっている。

「キャスターを倒し、柳洞寺を占拠するということは、奴は既に大聖杯を起動できるのか」

アーチャーは難しい顔をしてそう呟く。それは生前の記憶から思い出したことである。彼の記憶では言峰とギルガメッシュは柳洞寺の周辺で聖杯の孔をあけていた。

「ええ、おそらく向かうのは円蔵山の内部の龍洞、そこにある大聖杯ね。そして孔をあけ、この世界をこの世すべての悪の泥で満たすつもりだと思うわ」

キャスターは自らの考えを示す。

「そういえばアサシンはどうしたのですか？彼はいまだにあの山門に

？」

「… 彼は私たちが逃がすために最後まで戦ってくれたわ」

「そうですか…」

ライダーが口を閉じる。アサシンが既に消滅していることを理解したのでろう。

「それにしても、なんで聖杯がもう現れるのよ。まだ一騎しか落ちてないじゃない」

「おそらくギルガメッシュが何らかの手段を用いて中身を満たしたのでろう。あれの財は何でもできるからな」

遠坂の疑問にセイバーは腕を組み答える。

まあ確かにあの人なら何でもできそうだけど…

「これ… もしかして今倒しに行かないと今夜中に泥があふれるんじゃないのか？」

「確かに、この状況を放っておくと不味いかもしれんな」

顔色の悪くなる慎二。アーチャーは顔を歪める。既に彼らは孔をあけているかもしれない。

「えっ、てことはもう決戦なの!?! 早くない!?!」

「そうなるな」

居間に緊張が走る。聖杯戦争が始まって、俺たちにとって初めての戦いがラスボス戦だ。

「みんな覚悟はいいか？俺はできてる」

俺は皆に尋ねる。

「僕はできてるぜ」

「ふむ、召喚されて早々だが戦の支度は既にできている」

「私もいつでもいけます」

俺の言葉に慎二、セイバー、ライダーが順に答える。

「さっきの借りを言峰に返してやるぜ」

「ええ… 宗一郎様に手を出したこと後悔させてあげるわ」

ランサーとキャスターも戦意を滾らせている。アーチャーは無言で凜の言葉を待つ。

「ああもう！しょうがない力を貸してアーチャー！」

「了解した凜」

そして俺はイリヤのほうへと顔を向ける。

するとイリヤもまたこちらへと向いていた。

「士郎。私も行くよ、女神たちが力を貸してくれたのはこのためだと思っもん」

イリヤは力強くこちらを見ている。その決意を止めることは俺にはできない。

皆の決意を確認した。

さて行くとしよう。決戦の場に。

先ほど通った道をまた歩いていく。

長く続く階段を上り、柳洞寺の門をくぐる。

寺にいる人の気配はない。既に先行していたアーチャーが、寺にいた一般人は謎の昏睡で全員救急車で運び出されたということを確認している。

そして俺は皆の前に出る。

「ここからは別行動だ。俺はギルガメッシュがいる所へ行くよ」

「どこにいるのかわかるのか？」

「ああ」

俺は視線をギルガメッシュがいるであろう場所へと向ける。あの人はあそこにいるだろう。

「士郎！絶対勝てよ！」

「衛宮君、あなたが無事に勝つことを祈ってるわ」

慎二と遠坂が俺に激励の言葉をくれる。俺はそれにまかせると返事をした。

「絶対に帰ってきてね士郎」

「大丈夫、すぐ戻ってくるから」

不安な顔を浮かべるイリヤの頭をやさしくなでる。彼女は待つて  
るからと呟いた。

「皆をまかせる」

俺はサーヴァントたちに頼む。彼らはただ頭を縦に振って頷いた。  
それを確認して少し安心した俺は、彼らを置いて走る。最古の王の  
もとへと。

そこは、柳洞寺から少し小高い場所にあった。

柳洞寺から古い階段を上ると、そこには開けた場所があり、そこか  
ら冬木の街並みを眺めることができる。

月の光が照らす中、その男は丸太でできた椅子に座っている。

その視線は先はさきほどから目の前の景色に固定されていた。

「やっぱりここにいたんすね王様」

「… 雑種か」

階段を駆け上ってきた男、衛宮士郎は座っていたギルガメッシュに  
声をかける。

ギルガメッシュは少し士郎を横目で見た後、再びその視線を前に戻  
す。

隣にやってきた士郎が、ギルガメッシュのそばにもう一個あった丸  
太の椅子に座る。彼もまた無言で街並みを眺める。

「ウルクの景色には及ばぬが、ここから眺める冬木も良い」

「そうすか？それならこの場所を紹介した甲斐があるっす」

深夜も遅く、もうすぐ朝日が昇る時間帯。遠くに見える新都の建物  
の光が奇麗に輝いている。

「フム、どうやらあの剣をあらかじめ投影してこなかったようだな」

「そりやそうですね、だってしてきたら王様怒るじゃないですか」

「フハハハ、こういうときだけは空気が読めるではないか雑種！」

ギルガメッシュが立ち上がる。そして一瞬だけ彼の周りを魔力の渦が流れると、彼は瞬時に黄金の鎧を着た。彼はこちらへと振り向き、ニヤリと笑った。

「決戦の舞台は用意しておるのだろうか？」

「そうつす。俺たちだと戦った余波で冬木が壊れちゃいますからね」

俺も椅子から立ち上がり、ギルガメッシュと向き合う。

そして右手を前にだし、それを唱える。

「体は剣で出来ている」

詠唱を始めるとともに士郎の体には魔術回路が浮かび上がり、周りには魔力の渦が彼を中心として回り始める。

「血潮は鉄で心は硝子 幾たびの戦場を越えて不敗」

ギルガメッシュはその詠唱を何もせずに眺めている。

「たった一度の敗走もなく、たった一度の勝利もなし」

士郎は無心で詠唱を続ける。

「しかし、荒野の上にて決着はつけられる」

彼が口に出すそれは、彼が原作の士郎と呼ぶ者の詠唱とは異なるものだった。

「その世界は、無限の剣戟でできていた」

そして二人はこの世界から姿を消した。

何もない荒野。雲が覆う空。

そこで二人は向き合っている。

「これが貴様の固有結界か」

英雄王は辺りを見回す。

「この世界なら周囲の心配をする必要はない。ここはどちらかが倒れるまで壊れることはない」

士郎が英雄王に向けてその言葉を呟く。英雄王は視線を目の前の男に戻す。

「なるほど、まさに貴様が本気を出せる場所というわけだな」

そしてそれはギルガメッシュも気兼ねなく全力を出せるということ。

ギルガメッシュは腕を組む。その顔は今まで見たことがないような笑みを浮かべている。

「そして俺は今からあの剣の投影を始める」

対する士郎は鋭い眼光で英雄王を見据える。

決着はあの剣が投影されるまでにつくのか、それとも投影されて終わるのか。

「全力で来い英雄王！」

「吠えるではないか！雑種！」

そして英雄王の頭上に1000を超えるゲートが開かれる。

10分。あの剣が投影されるまでの時間。

どのようにして決着がつくのか、それはまだ誰にもわからない。

## 士郎と英雄王

士郎と別れたあと、私たちは大聖杯のもとまで歩いてきた。円蔵山の内部にある大空洞、龍洞を目指し洞窟の中を進む。

「嫌な予感がするな」

前を歩くアーチャーが両手剣を持ち、周囲を注意深く警戒する。他のサーヴァントたちも私たちを囲みながら、前に進んでいく。

そして洞窟の先、大きな空洞があった。

盛り上がった台地の奥には、光り輝く光線が洞窟の天井まで届いている。そして空中には既に黒い孔が開いていた。そこから泥が少しずつ流れ始めている。

「来たか」

神父の服を着た男がいた。その男はこちらへと振り返る。

「観念しなさい綺礼！あんたのくだらない野望もここで終わりよ！」

「確かにこちらは私ただ一人、そちらはアサシンを除くすべての英霊。このままでは私に勝ち目はないだろう」

綺礼はフツと笑う。そして懐から黄金に輝く杯を取り出す。

「バカな…それは聖杯か？」

「ギルガメツシユの財のうちの一つだ。話は変わるが、お前たちは大聖杯のとある機能を知っているか？」

「聖杯の機能だと？」

言峰は手にもつ聖杯を掲げながら喋る。

「7騎のサーヴァントが一勢力に統一されたとき、それに対抗するために大聖杯には追加で7騎のサーヴァントを召喚するシステムがある。既にアサシンは落ち6騎だが、強引に起動してみるとしよう。」

言峰は英雄王の聖杯を眺める。

「私の手元に膨大な魔力の貯蔵庫がある。既に孔は開けた。ならばこれに残っている魔力すべてを使ってでも召喚してみるといふのはどうかね？」

言峰は私たちを歪んだ笑みで見つめる。

「その前に止める！」

アーチャーは弓を取り出し言峰に攻撃をくりだす。それを察知した言峰はあふれ出た泥の中へと姿を消す。矢は泥に触れると溶けるかのように消えていった。

「出てくるがいい、思考無きシャドウサーヴァントたちよ」

泥の中から言峰がそう呟くと、孔の大きさが突如大きくなる。そこから先ほどまでとは違い大量の泥があふれだす。

「泥には触れるな！汚染されるぞ！」

「足場は私の魔術で作るわ」

アーチャーが後ろにいるサーヴァントたちに警告をする。キャスターは空中に魔力でできた足場をかける。

「ふむ、あれが」

セイバーの視線の先、泥が孔から滝のように流れ落ちた場所を私も注視する。

突如泥の中から腕が伸びた。

泥の中から姿を現したのは黒い靄がかかった何か。おそらくあれが言峰が言っていたシャドウサーヴァントなのだろう。

だが

「おいおい、追加で出てくるのは7騎じゃなかったのか？」

そう呟くランサーは槍を構える。

泥の中からは次々と影のサーヴァントが出てくる。既にその数は両手では数えられない。

「はっー！」

前に出たライダーが一番手前にいるシャドウサーヴァントに鎖のついた刃で切りかかる。シャドウサーヴァントは向かってくるライダーに対して自らの手に持つ剣で迎撃するが、ライダーの素早さに追いつけず攻撃が当たらない。

「眠りなさい」

そしてその敏捷さを活かしてライダーはシャドウサーヴァントの背後をとると、その背中に深々と刃を突き刺す。

シャドウサーヴァントは聞きとれない悲鳴を上げて、黒い粒子とな



り消えていく。

「やはり一体一体は弱いですね、しかしこの数は厄介です」

傍に帰ってきたライダーは目の前に着々と増えていくシャドウサーヴァントを見てそう呟く。

「ああ、だが数だけだ」

アーチャーは弓を使い迫りくるシャドウサーヴァントの急所を正確に貫いていく。急所を貫かれた影は次々と消えていく。

「はっ！おもしろええ！」

槍を構えたランサーはシャドウサーヴァントの群れの中へと突撃する。周りからの攻撃を華麗にかわし、槍で相手を突き刺していく。

「アーチャー、キャスター。その3人をしっかり守っておけ。私も突撃する」

「言われなくとも」

「ええ、まかせなさい」

セイバーは二人にそう告げると、その場から風のように飛び出す。そして彼女は魔力放出で強めた筋力で複数の影を一度で切り裂く。

「まずいぜこれ… 個としては勝ってるけどあいつらどんどん増えていきやがる」

「ええ… 少しジリ貧かしら」

慎二と凜が泥からどんどん出てくる影に顔を青くする。

二人のその様子を見て私は胸に手を当てる。

「私もでるしかないわね。わたしの中の女神たち、力を貸して！」

「なっ！待てイリヤスフィール！」

手に氷でできた剣をつくり、前へと飛び出す。後ろからアーチャーの声が聞こえるがそれを無視して影に切りかかる。

「ええーいっ！」

大振りした氷の大剣が影の体を上下二つに裂く。周りの影が私に攻撃を繰り返してくるが、空気中に氷を形成させ、その攻撃を止める。

「まだまだー！」

攻撃が失敗し隙だらけとなった影を切り裂いていく。女神の力を借りた今なら、そう易々とダメージをくらうことは無い。

士郎が帰ってくるまでに何とかしてみせる。

泥の中から言峰は戦況を眺めている。

あふれ出るシャドウサーヴァントは止まる気配もなく湧き続けているが、その大半が彼らのサーヴァントに打倒されている。

しかし彼らのほうも打つ手はないのか、迫りくる影たちを延々と倒し続けている。

「宝具は決定打を見つけるまで温存しておくつもりか。だがその選択はどうか」

自らの手の内にある聖杯の魔力の消費を強める。これで少しはさつきまでの影たちより強いものがでてくるだろう。

「しかし、それでもまだ拮抗するだろうか」

彼らは真の英霊達。多少影が強くなつたところで敵わないだろう。事実彼らはまだ力を温存しているかのように見える。

「やはりあの二人の勝負の行方で決まるか」

脳裏にはギルガメッシュと士郎のことが思い浮かぶ。

その勝者が此度の戦いの決定打となることを言峰は確信した。

はじく。はじく。はじく。

魔力で強化された腕を振るい、迫りくる宝具を撃ち落とす。

その量はかつてとは比べものにならないほど。しかし両手の電光丸は金色に光り輝き、その悉くを撃ち落としてくれている。

敵の宝具はひとつでもあたったら致命傷となる。しかし士郎はそんな中でも恐怖すら持たずに両手の剣に身を委ねていた。

かつてとは違い余裕のある士郎は隙を見て剣を投影する。

「トレリス、オン 投影、開始 バルトアンデルス 月の紋章の剣」

士郎のすぐそばの宙で形成されたその剣は迫りくる宝具の間隙を縫って、王へと射出される。

「フン」

宝具の余波で発生した土煙の中から、剣が自らに向かって飛び出てきているのを確認したギルガメッシュはゲートを自身の前に数十個展開し、中から盾を出す。

金属音を上げて盾と剣がぶつかる。しかし盾は剣が触れた場所から崩れていく。そして次々と盾を壊していく。だがその勢いは盾を破るごとに減速していき、最後の一個の盾を打ち破ると勢いを無くしたのか、英雄王に当たることなく地に落ちていく。

「ほう、原子単位まで分解するか。盾を崩すにはうってつけと言う訳か」

ならば一か所に留まることは得策ではないかと呟いた英雄王はゲートから黄金とエメラルドで形成された空飛ぶ舟、ヴィマーナを出す。

「させるかー」

士郎のそばに先ほどのバルトアンデルスの剣が大量に投影される。それは士郎に向けて射出された宝具を分解しながらヴィマーナに乗る英雄王に迫る。

「遅い」

英雄王は急発進したヴィマーナの慣性力をもとめせず、追尾してくる剣を宝具で迎い打つ。バルトアンデルスの剣の切っ先に精確にゲートが開かれ、そこから飛び出た剣とぶつかっていく。それを数十回繰り返し、バルトアンデルスの剣は勢いを無くした。

「手は休めぬ。油断はせんぞっ」

音速で飛行する船に乗る英雄王が手をかざす。すると士郎の上空に大きなゲートが開かれ、そこから大きな剣が二つ落ちてくる。それを見た士郎は腕を空にのばす。

「投影、開始　斬艦刀！」

落ちてくる剣に対抗するかのように、空中に二つの大きな剣が投影される。名前の通り艦船を両断できそうな大きさのその剣は、落ちてくる剣とぶつかり合う。

巨大な鐘を鳴らしたかのような大きな音が響く。ぶつかり合った二つの剣は勢いを大幅に無くし、地面へと砂ぼこりを巻き上げて落ちる。

「ふむ… やはりこれでは貴様の剣が投影されるまでに決着はつかぬな」

既に戦いが始まってから数分は経っている。

回りに展開されていたゲートが閉じる。士郎は空を見上げると、そこにはヴィマーナの先端に英雄王が立っており士郎を見下している。彼は腕を組み、顔に笑みを浮かべている。

「よって、貴様にはこれをくれてやろう！」

英雄王の周りの空に12個の巨大なゲートが開く。それを見た士郎が両手の電光丸を構える。

「光栄に思え雑種！これをを使うのは後にも先にもこれだけだ！」

そして12のゲートからそれが姿を現す。

「嘘だろ……」

その言葉が口から漏れ出た士郎の顔がここにきて初めて青ざめる。

士郎にはそれらの内のいくつかに見覚えがあった。それは前世、彼がプレイしていたf g oのとある章にて現れた強敵。

「はるか遠い未来にて、人類が作り上げし宇宙航行艦！我が財の最奥に眠りし人の技術の到達点！」

奇しくもそれらはかつて地球に飛来した12の機械神たちと姿形

が似ている。

それだけでなく、この機械を作り出した技術者たちはそれぞれにとある神話の神々の名を与えた。そして彼らはこの12の機械を新・オリュンポス12機神と呼んだ。

「ここから先は私の目をもつてしても見通せん。さあ、どう足掻く？ 雑種」

ここからが真の戦いである。

衝撃で硬直していた体を奮い立たせる。両手の電光丸を強く握る。こちらを圧倒的な存在感で見下す12の機体。ギルガメッシュはいつの間にかはるか上空に移動している。

士郎は上空に浮かぶ機械を一体ずつしっかりと観察する。その中の5つに士郎は見覚えがあった。

ゼウス、デメテル、アフロディーテ、ポセイドン、アルテミス。彼がfgoの二部第5章で遭遇した敵の機械神。それによく似た形の機械が空に浮かんでいる。

その時、士郎の体が電光丸に引っ張られる。

すると士郎が元いた場所に巨大な電撃が落ちる。電光丸に引っ張られた士郎はその光景を見て冷や汗を流す。

電光丸があの攻撃を受け止めなかったということは、あの攻撃は受け流せない。剣で受け止めた時点で士郎は死んでいたということだ。

「投影、開始！」

すぐさま士郎はバルトアンデルスの剣を投影し、今の雷撃を放ったであろうゼウスの真体（アリスィア）によく似た機械へと放つ。

投影されたバルトアンデルスの剣は、勢い良くゼウスに向かっていく。

しかし、バルトアンデルスの剣はゼウスの目の前でバリアのような

ものにはじかれた。あのバリアはバルトアンデルスの剣で分解できないようだ。

突如、地面が影に覆われる。

「何ッ!？」

いつの間にか、士郎の真上に球体の形をした機体、デメテルが移動していた。それは自らのもつ質量をもって士郎に体当たりを行う。

「クッー！」

士郎は地面に突き刺すように斬艦刀を複数投影する。地面に突き刺さり、柱のようになった刀は士郎をデメテルの体当たりから防ぐ。しかしその重さに負けたのか、斬艦刀は切っ先から折れていく。

電光丸に引っ張られる士郎は、デメテルが斬艦刀に食い止められたそのわずかな時間を利用し、デメテルの真下から抜け出す。それと同時にデメテルは地面に落ちた。

衝撃が地面を揺らす、士郎はそれを気にせず周りの機体を警戒する。

すると視界に映るいくつかの機械がピカッと光った。それぞれから放たれた光線が士郎目掛けて放たれる。士郎は斬艦刀を投影し盾のようにすることで防ごうとするが、斬艦刀は光線に当たると容易く碎ける。

電光丸は士郎の体を引っぱり紙一重で光線をよける。しかし、艦は休むことなく攻撃を繰り返す、士郎は徐々に追い込まれていく。

「!?…頭が…」

降り注ぐ攻撃を避け続けていた士郎は自らの頭を手で押さえる。体の前後感覚がおかしくなり、幻覚や幻聴の症状が始めていた。

「脳に…響くこの音は…そうかアフロディーテのッ！」

士郎は歪む視界でこの精神攻撃を繰り返しているであろうアフロディーテの機体を見やる。その視界の先にはアフロディーテが空気中に音の波を展開していた。電光丸で防げないその音波は士郎の頭

に深刻なダメージを与えていく。

そして精神攻撃にひるむ士郎を超上空から狙いを定めている機体  
がいた。

ギルガメツシユはヴィマーナに乗り、はるか遠くの地表にいる士郎  
を眺めている。彼は12の機体を展開することにすべての力を使っ  
ているため、ただ眺めることしかしていない。

しかし、ギルガメツシユが何もせずとも眼下の士郎は着々と追い詰  
められている。

英雄王と同じ高さまで昇ってきた機体がある。それは月の女神の  
名を冠する機体。

そして今、その機体はエネルギーのチャージを終え、その標準を士  
郎に固定する。

「他の剣を出さねば、死ぬぞ雑種」

ギルガメツシユは頬杖をつき、その行方を眺めた。

ふと空が明るくなる。士郎が上を見上げるとその視界が白一色に  
染まる。

それは月の女神アルテミスの砲撃。かの大神ゼウスに匹敵するそ  
の砲撃の威力は島一つ消し飛ばすほどのもの。かのヘラクレスの1  
2の試練を貫通して消滅に追いやる神の一撃。

それだけではない。周りの機体からも援護射撃とばかりに光線が  
向かってくる。まるで流れ星が落ちてくるかのような幻想的な景色  
であった。

士郎は腕を空に掲げる。視界は揺れ、前後感覚は乱れ、今にも倒れ  
そうなその体を気力で強引に立たせる。

神を見据えるその眼はまだ死んではない。

「トレース、オン  
投影、開始」

そして固有結界を震わす大爆発が起こった。

大爆発が起こり、その衝撃波が上空を漂うギルガメッシュのもとにまで到達する。

その視線は先ほどから変わらずただ一点に集中していた。

「フハハハハハハハハ！そうではなくては！」

土煙が空を舞う。その中にいる男を見て、英雄王は大きな声で笑う。

「ついにお気に入りの剣を出したところか雑種！さあ見せてみる！貴様の『剣』を！」

王はその眼を持って、これまで以上に戦いを注視していた。

土煙が晴れる。

固有結界にはまさに隕石が落ちたかのような規模のクレーターができています。

しかしクレーターの中央、そこだけは破壊を免れ、盛り上がった台地のようになっていた。

そこに男は立っている。髪は白く染まり、皮膚は黒ずんだその男、士郎は手に持つ剣を構えた。

「真名解放 四宝剣」

それは文明を何度も滅ぼし、何度も歴史を繰り返した異星人の剣。



それはまさしく士郎が持つ剣の中でも最上位のものだった。

士郎がまだ生きていることを確認した機体は攻撃を続行する。  
しかし、その攻撃は士郎が剣を振るうと音もなく消えていく。

「消えろ」

攻撃を消しながら士郎は精神攻撃を続けてくるアフロディーテに向けて剣を振るう。直後、アフロディーテは狂ったかのような機械音を上げて忽然と姿を消した。

「カハッ！」

アフロディーテが消えた直後、士郎の口から大量の血が流れ出る。それだけでなく、血管が切れたのか体中から血が飛びだし、彼の全身は赤く染まる。

物の存在する確率を変動させるという規格外の力を持つこの四宝剣はとてつもなく強力だ。だがそれゆえにその力を使う士郎には大きな負担がかかり、自らに向かつてくる攻撃の存在確率を操作するだけでも彼は金属バットで頭を殴られたかのような痛みを覚える。

そしてアフロディーテほどの存在の確率すらも操り、消滅させた彼の体はもはやいつ気絶してもおかしくないほどの重症を負う。

しかし彼は止まらない。

その手にある四宝剣を消し、再び他の剣を投影する。

「トレリス、オン開始！」

歯を食いしばる士郎の目や耳からも血が流れ始める。

彼の肩に金色に輝く翼のようなものが2つ、そして彼の周囲に星のようなものが7つ投影された。

「今こそ壊劫えいけつの時。この廻剣かいけんは敵を断つ！」

士郎は剣の持つ力を借りて、空へと浮かぶ。周りの機体が何かを察したのか攻撃の勢いを増やすも、彼の周りには星が守る。

宙へ浮かぶと彼の肩にあった二つの翼が合体して一つとなり、剣の形となる。

そして士郎の周りに浮かんでいた7つの星は彼の目の前に集まり、

この固有結界の景色をその集まった星の内部に映し出す。

「神を撃ち落とす。『虚・帰滅を裁定せし廻剣』！」

あらゆるインドの神性を統合して絶対神となったとある人物の宝具。その贗作が今士郎の手によって展開される。

彼の背後に浮かんでいた剣が7つの星を両断する。そして世界全てを消滅させる一撃が固有結界内へと広がっていく。

神を撃ち落とすその破壊の嵐は、その場にいるすべての機体のバリアを貫通し、その内部を悉く破壊していく。

広がる嵐は遙か上空にいる英雄王にも到達する。

「フハハハハハハ！」

士郎から投影された二つの剣にたいそう満足している英雄王。

彼の目の前にまで破壊の一撃は迫ってきているのだが、それでも英雄王は笑みを絶やさない。そして王は嵐に飲まれる。

英雄王のすぐそばにいたアルテミスの機体は迫りくる攻撃になすすべもなく破壊されていく。

そして固有結界すべてにその破壊は行き届いた。

宝具を展開し終わった士郎は上空から落下し、地面へと倒れ伏す。

「ハア…ハア…」

しかし士郎は今までの反動で重い両足と両腕を使い起き上がる。既に片方の目は何も映さず、その耳はほぼ機能していない。

士郎は顔を上げる。

士郎の攻撃を受けた機体たちが空から火花を上げて地面へと墜落していく。しかし、その中にある機体がないと士郎は気づいた。

「ゼウス…」

かの大神、ゼウスの機体が空を見上げた士郎の視界いっぱいに映る。

既に外部の装甲は剥がれ落ち、内部の構造があちこちから見えていくのに、その機体は感情のない目でこちらをいまだに見降ろしてい

る。

ゼウスは雷を身にまとい、最後の1撃を士郎に下そうとしていた。

「トリスオン  
投影、開始」

彼の右手が光る。

そして出てきたのは手の平ほどの大きさの種。

「起きろ魔剣」

士郎がそれを力強く握ると、種から根が飛び出す。

そして根は地面へと勢いよく突き刺さる。

「結界の力すべてを吸え、お前の1撃を見せてみる」

手にする種がドクンと鼓動する。すると固有結界がまるで鳴いているかのように、不気味な音が結界内に響き渡る。

鳴き声が響き渡るとともに地面はひび割れ、空は崩れていく。今までのすべての攻撃に耐えていた固有結界が崩壊していく。

崩れ行く大地に何とか立つ士郎。右手に握りしめる種はどんどん成長し、剣の形を造っていく。

そして魔剣は完成する。

士郎の腕に剣から出た根が巻き付き、黒い刀身が上下に伸びている。

その剣を捕捉したゼウスはその剣が自らを容易く破壊できることに気づき、自らの持つ残りすべての力を使い、特大の雷撃を士郎目掛けて放つ。

ゼウス目掛けて飛び出た士郎は剣を構え、それを正面から受けて立つ。

「真名解放 魔剣・斬撃皇帝」

星の究極アルテミット・ワンの一すらも両断する魔剣がゼウスの雷撃を切り裂き、その先にいるゼウスを半分に両断する。

両断されたゼウスの機体は火花をまき散らし地面へと墜落していく。

これにてすべての神は地に堕ちた。

士郎はそれを見届けて、手にある魔剣を消す。

「見事だ雑種」

ほぼ機能してない耳がその言葉をかすかながら捉える。

士郎は声が聞こえてきた背後を振り向く。

そこには先ほどの攻撃で鎧が砕けたのか、上半身をさらけ出している英雄王が空に浮かびながらこちらを見ていた。

「残りは一分ほどか…」

英雄王は士郎の中にもうすぐ出来上がりつつある剣を見抜く。

「やはり最後はこれしかあるまい」

その言葉を呟いた英雄王の手にはいつの間にか乖離剣が握られている。

士郎もまた重い右腕を左手で支えながら贗作の乖離剣を投影する。それを見て、英雄王はニヤリと笑う。そして乖離剣を空中に突き刺す。

パキンと何かが割れる音がした。

空間だ、乖離剣を突き刺した空間がひび割れている。

「原子は混ざり、固まり、万象織り成す星を生む」

英雄王の言葉とともに乖離剣は回転を始める。

それはかつてとは比べ物にならないほどの出力だった。

かつて英雄王が士郎に見せたのは「地の理」。しかし今、英雄王は空中に浮かび完全出力の「天の理」を示そうとしている。

サーヴァントの身である英雄王は本来なら「地の理」だけしか使えない。しかし彼は今、自分の身を滅ぼしてでも「天の理」を強引に引き出そうとしている。

「フハハハハハハハ！」

そして空飛ぶ英雄王の眼下に出来上がったのは三つの巨大な渦。その一つ一つがとてつもない破壊力を秘めている。

ギルガメツシユは高笑いをしながら、乖離剣エアを握る。  
そしてゆつくりと乖離剣を掴んだ右腕を天へ掲げる。

「クッー」

それに危機感を覚えた士郎もまたかつてを上回る出力で贗作の乖離剣を回転させる。

彼らが出す乖離剣の力は、まさにその場を地獄へと変えさせていた。

「死して拜せよ！ 『天地乖離す開闢の星』!!」

「打ち破れ！ 『王に勝利す開闢の星』!!」

二人は互いに乖離剣を突き出した。世界を滅ぼす力が二人の間でぶつかる。

しかし、士郎が放つエアの力はすぐに力負けする。英雄王の放つエアの力は士郎目掛けて勢いを変えず突き進んでくる。

「まだだッ！ 投影、開始ッッ！」

乖離剣を突き出す士郎の両側に、新しく二つの乖離剣が投影される。そして二つの乖離剣もまた回転を始める。

「ゴハッー」

士郎はその莫大な負担により盛大に吐血する。体中に激痛が走り、爪は剥がれ、動脈が切れたのか士郎の体から噴水のように血が飛び出る。

しかし、それでもまだ足りない。英雄王の放つ乖離剣の力に、士郎の三つの乖離剣を合わせた力は徐々に押されている。

「うおおおおおおおおおッッッ!!!」

相手の破壊の渦はすでに士郎の目と鼻の先にまで来ている。

士郎は文字通り最後の力を振り絞り、投影が完了する時間が来るまで持たせようとしている。

しかし、

「終わりだ」

英雄王がそう呟いた。彼の体も強引に「天の理」を引き出した代償なのかとどこどころが透け始めている。

あの剣が投影される前に終わらせる。ギルガメツシユもまた最後の力を振り絞り、乖離剣に力をこめる。

そして大爆発が崩れゆく固有結界を包む。

「…」

上空に浮かんでいた英雄王が地に降りてくる。地に足をつけた彼は、倒れそうな体を必死に抑えている。

しかし、その顔には笑みが浮かんでいた。

「ククツ…なるほどな」

英雄王は視線の先、大爆発の煙が晴れた場所を見て笑う。

「それを見落としていたか」

その視線の先、そこには視界を覆うほどの大きさの白くて透明な何かがあった。

氷だ。視界一杯に氷河のように氷が広がっている。

そしてその氷は彼を大事そうに包み込んでいた。

厚い氷の中で、その男は血の池に沈んでいる。左腕、右足は消し飛び、腹から内臓が飛び出ているが、それでもその男はまだ生きている。

『ふふふ、女神の祝福！』

「ありが…とな、お姉…ちゃん」

既に何も見えてないその男の脳裏に、大切な姉の、雪の妖精の姿が

浮かぶ。

雪の妖精、イリヤが男に与えた加護が乖離剣の直撃から彼を守り通したのだ。

時は満ちた。

士郎は薄れゆく意識の中、右手にたったひとつだけ残った人差し指をゆつくりと上げる。

「トレースオン 投影、開始」

彼の人差し指に、その剣が投影されていく。

それを見た英雄王は彼の四方にゲートを開く。そしてそこから大量の剣が射出される。

「真名、解放」

目は見えずとも、士郎は切るべき相手を「捉えて」いた。

英雄王の剣が彼を包む氷を突き破っていく、そしてそれが士郎に当たるとる寸前。

彼は最後の剣の名を呼んだ。

「すべてを切れ、『イビルメタル 二次元の刃』」

そして世界は二つに切られた。

## 決着、そして日常へ

どれくらいの間眠っていたのだろうか。

最後にイビルメタルの投影に成功し、すべてを切ったことは覚えて  
いる。

目を開ける。

戦いの最後で見えなくなっていた目が、なぜか回復している。

朝日が昇り明るくなってきた空の景色が目映る。

耳の鼓膜も、風に揺れる草木の音をしっかりと届けている。

「目が覚めたか雑種」

「王様」

草木の上に横たわり空を見上げている士郎の耳に、英雄王の声が届く。

士郎は消し飛んだはずの左腕と右足を使い、起き上がる。

ギルガメッシュのほうへ顔を向ける。彼は丸太の上に座り、昇り行く朝日を眺めている。その体は徐々に透けていく。

「死の寸前にあつた貴様を治療した我の慈悲に心から感謝するが  
いい」

士郎は自分の体を確認する。よほどすごい財宝が使われたのか、士郎の体には傷一つない。

士郎は感謝の言葉を英雄王に告げる。

「フン… 此度の戦い、貴様の勝ちだ。これを受け取れ」

英雄王は手をかざすと士郎の前にゲートが開かれる。

慌てて士郎が手を差し出すと、士郎の手の上にラピスラズリの腕飾りが落ちてきた。

士郎はその腕輪を受け取ると自らの右手につける。右手につけたラピスラズリの腕輪に太陽光が反射して青い光を放っている。

「何の力も持たぬ石だが、この我がくれてやったのだ。後生大事にせよ」



ギルガメツシュが丸太から立ち上がる。そして、消えゆく体で士郎を見る。

「行け。さっさとこの戦いを終わらせてこい。そして日常に戻り、その生を謳歌しろ」

英雄王は士郎を正面から見つめる。ギルガメツシュは白い歯を見せ笑う。

英雄王の清々しい表情を見た士郎はギルガメツシュに一礼をする。そして背を向け、その場から走り去る。その脚が向かう先は、戦っているであろう皆のもと。

ギルガメツシュは去り行く士郎の背中を眺め、最後にこう告げた。

「お前と共に騒いだこの8年、なかなか楽しかったぞ。士郎」

士郎の走る脚が急に止まる。

その名を初めて英雄王に呼ばれた。

士郎は英雄王へ振り返る。だが既に彼はそこにいない。朝日のまぶしい輝きが、天に昇っていく黄金の粒子を照らしている。

その幻想的な風景の前に立ち尽くす士郎。その表情は……

士郎は右腕につけたラピスラズリの腕輪を眺める。

そして再び走り出した。

聖杯戦争の終わりを迎えるために。

「刺し穿つ死棘の槍!!」

影の大軍を前にして、ランサーは自らの宝具を解放する。

その槍の切っ先は、ランサーが槍を放つとともに木の枝のように分裂し、数多の影の心臓を一度に貫く。槍で貫かれたシャドウサーヴァントは塵となって消えていく。

「おいおい、宝具も打ったっていうのに一向に減らねえじゃねーか」

手元に帰ってきた槍を掴みながら、ランサーはそう呟く。

「ええ、今のところ倒す量と出てくる量は拮抗していますけど。さすがに不味い状況ですね」

ライダーはペガサスに乗り、影を蹂躪していく。しかし、影からの反撃を時々もらっているのかペガサスの体のいたるところに傷ができていく。

「やはり大本の孔を何とかしなければ」

ライダーは空に浮かぶ孔を眺める。そこから泥が勢いを増して流れている。シャドウサーヴァントが出てくる泥の源流を断たねばいくら倒しても言峰の持つ聖杯の魔力が尽きるまで終わらないだろう。

しかし、ライダーの宝具では孔を塞ぐことはできない。

孔を潰すのはアーチャーとセイバーにまかせ、私は影を蹴散らしますか。とライダーは影を蹂躪しながら決めた。

そして少し離れたところではアーチャーが弓を使い、迫りくる影を倒している。

アーチャーもライダーと同様に孔を潰すべきだと考え、自らのとっておきで孔を破壊することにした。アーチャーは後ろにいる凜に声をかける。

「凜！魔力を回せ！」

「ええ！わかったわアーチャー！」

凜の体から魔力がパスを通じてアーチャーに流れる。自らの肉体に十分な魔力が集まったことを確認したアーチャーは詠唱を始める。

「I am the bone of my sword」

アーチャーの手元に螺旋模様の剣が投影される。彼はそれを弓につがえた。狙いは泥が流れてくる孔。

「カ  
ラ  
ド  
ホ  
ル  
グ  
」  
偽・螺旋剣!!」

限界まで引き絞られた弓を放す。勢いよく飛び出た矢は孔に向かつて一直線に突き進んでいく。

そして大爆発が起こる。その爆発は孔の周囲にいたシャドウサーヴァントごと飲みこむ。

「チツ…ダメか」

アーチャーは舌打ちをする。

その視線の先の孔は依然として開いている。

「どうやら生半可な攻撃では消せないらしいな」

ここはやはり彼女の宝具か…とアーチャーは前方で戦っているセイバーをチラリとみる。

影を切り倒していくセイバーもまた自らの宝具をいつ使うべきか決めかねていた。

士郎から大聖杯は破壊しないでくれと伝えられている。今この場で宝具を解放すれば、孔の後ろにある大聖杯ごと巻き込んでしまう。それに魔力の問題もある。令呪の補助も無しこの状況、彼女では一発がせいぜいだろう。

「状況が不味くなれば躊躇せず解放させてもらうぞ士郎」

脳裏に能天気なマスターを思い浮かばせながら、彼女は戦い続ける。

そして、近くにいる雪の妖精もまた思考を繰り返していた。

彼女はその手に握りしめられた氷剣を振るい、影を切り伏せていく。

「キリがないね」

周囲のシャドウサーヴァントを断ち切ったイリヤはそう独り言ちる。

やはりシャドウサーヴァントでは、女神三人の力を借りた今のイリヤの敵ではない。

「それにしても…さっきから何か変」

さきほどからシャドウサーヴァントの手ごたえがない。

途中から少しは強くなったけど、今は最初のほうよりも弱くなって

いる気がする。

その違和感は凜と慎二を守っているキャスターも感じていた。

「やはり変だわ」

「どうしたんだキャスター？」

魔力弾を影に向けて撃ちながらキャスターは違和感を訴える。

そんなキャスターの様子を変に思った慎二が尋ねる。

「最初よりシャドウサーヴァントに込められている魔力が少ない。あの聖杯の魔力が切れたとは思わないし、何か企んでいるのかしら」

「やはりか。それで先ほどから楽に倒せているわけだ」

途切れることなく矢を放つアーチャーは敵の脆さの原因を理解する。シャドウサーヴァントはアーチャーの何の力も込められていない矢の一撃だけで沈んでいく。

「何を企んでいる？魔力を温存しているのか……？」

長年の戦闘経験を持つアーチャーは先ほどから嫌な予感をひしひしと感じている。

「ん？あれは……」

ふとアーチャーの視界の隅に剣を上段に構えたシャドウサーヴァントがうつる。

その剣に膨大な魔力を乗せながら。

「ツ！熾<sup>ロー</sup>天覆<sup>ア</sup>う七つの円環！！」

危機を感じたアーチャーはすぐさま右腕を前に出し、前方に自らの最大の防御を敷いた。

慎二と凜を守るかのように大きな7枚の花弁が咲く。

そして敵が放った漆黒の力の奔流が花に激しく衝突する。

「これは宝具!?ただの影が英霊の切り札を使えるというの!?!」

「ああ、そのようだ!」

キャスターが危うく自らに当たりかけた宝具に驚きの声を上げる。

アーチャーは全力を出して、敵の宝具を防ぐ。花弁はひとつひとつ割れていく。

「くっ… アイアスの盾が4つ破られたか」

敵の宝具の攻撃が終わる。こちら側に負傷はなかったが、アーチャーの盾がなかったら怪我では済まなかっただろう。そのことに少しだけホツとする凜と慎二。

だが

「!?」

一息付けぬままアーチャーは悪寒を感じ、とっさにアイアスの盾が広げられた腕をまた前に突き出す。それと同時にまたもや相手の宝具が盾にぶつかる。

「魔力を温存していたのはこのためか！」

連続した敵の宝具でアイアスの花が散っていく。理性無きシャドウサーヴァントが放つ宝具は同胞すら飲みこむ。彼らに同士討ちという概念はないのだろう。

パキンパキンと花びらは割れていき、そしてアイアスの花びらは最後の一枚となった。なおも止まらぬ敵の宝具により最後の花びらにヒビが入る。アーチャーはうなり声をあげてその一枚を死守する。

しかし、その最後の一枚はあっけなく破壊される。敵の宝具が無防備となったアーチャーたちに迫る。

「させない！」

突如、アーチャーたちの目の前に大きな氷が出現する。その氷は敵の宝具を一時的に防ぐ。

「大丈夫皆!?!」

「助かったわイリヤスフィール！」

前線から帰ってきたイリヤがアーチャーたちを氷で守ると、凜が感謝の言葉を告げる。

皆の無事を確認したイリヤは今の宝具を打ってきたシャドウサーヴァントを見据える。

そのシャドウは再びその剣に大量の魔力を溜めて、宝具を解放しようとしている。

「ランサーー！」

「おうともー」

宝具を解放寸前のシャドウへと音速で駆けぬけたランサーがその槍を突き出す。しかし、シャドウサーヴァントはランサーの槍裁きを自らが持つ剣ではじき返す。

「ほお、他の影どもとは一味違うじゃねーか」

ランサーはその顔に獰猛な笑みを浮かべ、目の前の敵と剣戟を続ける。

「あれはランサーに任せてよさそうだな」

そしてアーチャーは孔の真下に溜まる泥を見る。黒に染まった泥からとてつもない魔力を身に秘めたシャドウサーヴァントが現れる。

「敵は決めにきたのか？小僧の戦いが終わるまで仕掛けてこないと思っていたが」

「どうでもいい。こちらも決めにかかるまでだ」

アーチャーとセイバーの身に魔力が吹き荒れる。

「私も…！」

イリヤは女神たちの力を最大解放する。もともと白かった肌や髪がより氷のような白さになり、赤かった目が青く染まる。

「ここで決めるー！」

セイバー、アーチャーとともに出現した影に迫る。敵が放つ矢をくぐりぬけ、イリヤたちは影に切りかかる。

「たあっ！」

氷の剣を大振りで影に叩きつける。しかし、シトナイの筋力はEランク。強化された影にシトナイの攻撃は容易く防がれてしまう。

「まだまだー！」

氷剣から手を放し、相手が仕掛けた攻撃をよける。そのまま距離を取り、氷でできた弓を作り出す。

そして弓に氷の矢をつがえ、放つ。高い貫通力を誇るその氷の矢は一直線に敵へと向かい、敵が纏う鎧ごと貫く。

イリヤは矢のダメージにひるんでいる敵へと駆ける。

「わたしの中の女神たち、力を貸して……！」

イリヤは胸に手をあて、女神たちに祈りを捧げる。

そして先ほどよりも膨大な魔力を乗せた矢を作り出し、構える。

「貫け！」

放たれた矢は空中で巨大な氷の槍となり、隙だらけのシャドウサーヴァントに突き刺さる。

そして氷の槍に捕らわれ身動きできない敵にイリヤは剣を振りかざす。

「これでっ終わりー！」

手にもつ剣で敵を拘束する氷ごと両断する。左右二つに割れた影は霧となつて消えていく。

敵を倒せてほつとするイリヤ。

アーチャーとセイバーのほうを見てみると、彼らも問題なくシャドウサーヴァントを倒せていた。武器を携え、イリヤのもとへと集まる。

「怪我はないかイリヤスフィール」

「うん、大丈夫だよ」

傍まで来たアーチャーが心配そうに怪我がないか尋ねる。

そんなアーチャーの様子から、イリヤは士郎を頭に思い浮かべ、二人して過保護なんだからと苦笑する。

「さて、どうするつもりだ言峰」

敵を既に倒したのかランサーも槍を担いでイリヤのそばまで来た。その視線は目の前の台地の上に立つひとりの男へ。

「てめえの負けだ。正規の英霊ならならともかく、ただの影ごときで俺らを倒せると思わねえことだな」

宝具を使えたのは少し驚きだったがとランサーは呟く。

「・・・どうやらこちら側の敗北というわけか」

ランサーの言葉に言峰は意外にもあつさりとは敗北を認めた。

「ギルガメツシュが敗北した。衛宮士郎もじきにここへと来るだろう」

「士郎が!!」

言峰はギルガメツシュに通じるパスが途切れたことを把握した。それが意味することは、既にギルガメツシュがこの世から消えたとい

うこと。ギルガメッシュに打ち勝った衛宮士郎はすぐにでもこの場所にとどり着くだろう。

士郎が勝ったことを聞いたイリヤは喜びを顔に浮かべる。

しかし、手にもつ武器はまだ下ろさない。

警戒して言峰を観察する。

「残ったのは私ただ一人、ならば最後の足掻きをするでしょう」

聖杯を掲げる。聖杯に残るすべての魔力を使う勢いで消費し、言峰は自らの命を無視してまで決着をつけにかかる。

黒色の魔力が聖杯から孔へと流れる。

泥が流れ落ちていく孔がドクンと鼓動する。そして一体の影を産み落とした。

空から落ちてきたシャドウサーヴァントが地上に着地する。弓を携えたその体には今までの影とは比べ物にならないほど膨大な魔力が込められている。

影が弓を構えた。空間が凍り付くかのような悪寒に包まれる。

「不味いー」

アーチャーとイリヤはすぐさま矢を放ち、敵の宝具の解放を止めにかかる。しかし、その影は己に突き刺さる矢にもとせせず、弓をしならせる。

「解放しろ」

言峰の言葉とともに、影の体にヒビが入る。

それはまさに己の肉体すべてを使った一撃。消滅と引き換えに放つ、かつて大地を割った超強力な流れ星の一撃。

影となった今本来のそれには劣るが、広域に効果を持つその宝具をただの一点に集中させたその破壊力は容易くイリヤ達がいる龍洞を消し飛ばすだろう。

「■■■■ー！！」

聞き取れない大声をあげて、影が不可避の矢を放つ。その必殺の一撃はイリヤ達目掛けて突き進む。



「お願い女神たち！皆を守って！」

イリヤは両手を前にかざし、自らが持つすべての魔力を持って氷の壁を作り出す。

聳え立つ厚い氷がイリヤ達を包み込む。

そして矢が壁と衝突するとともに、その衝撃で龍洞が揺れる。

「ツツツ!!」

「イ、イリヤー！」

だが敵の放った矢はそんな氷をもともせず突き進んでくる。氷を支えているイリヤの腕の血管が破れ、血が流れ出る。

「クツ！私の宝具で相殺する！そのまま氷を出し続けるイリヤス  
フィール！」

イリヤの前に出たセイバーが黒に染まったエクスカリバーを構える。エクスカリバーが漆黒の魔力で包まれる。

「卑王鉄槌！光を呑め！」エクスカリバー・モルガン「約束された勝利の剣!!」

セイバーが宝具を解放する。黒い極光がイリヤの氷を突き破った矢とぶつかる。

だがわずかばかり矢の威力のほうが強いのか、極光の中を矢は依然として突き進んでくる。

「これでも足りないのか！」

「セイバーー！下がれ！」

後ろからランサーに呼びかけられたセイバーは後ろへと下がる。

ランサーは文字が書かれた石を四方へと投げる。

「キヤスターー！補助しろ！」

「ええ！ルーン魔術は専門外だけど！」

ランサーが呪文を呟くと、彼らを包み込む結界が貼られる。そしてキヤスターが高速詠唱をくりだし、その結界の強度を補強する。

セイバーが放った宝具を潜り抜けた矢がランサーの作り出した結界と衝突する。

イリヤの氷、セイバーの宝具と正面からぶつかったのにもかかわらず、いまだに恐ろしい破壊力を持っていた。

「この破壊力！あの影の宝具の力だけってわけじゃなさそうだな！」

ランサーは孔から流れ出る泥をチラリとみる

影が放った宝具は泥でコーティングされ、聖杯の無限ともいえる魔力のバックアップを受けた一撃。

サーヴァントであるがゆえに、彼らが持つ防御は容易く泥に侵食されてしまう。

イリヤ達を守る結界にヒビが入る。そして、結界は容易く打ち破られる。

「熾<sup>ロー</sup>天覆<sup>ア</sup>う七つの円環<sup>ア</sup>！」

先ほど出したばかりの宝具をアーチャーが再び解放する。しかし、魔力が足りておらず花卉は三枚しか開かれない。

「もう一度ー！」

イリヤもまたアイアスに重ねるように氷を展開する。花を包むように氷が形成される。

アーチャーとイリヤが最後の力を振り絞り、迫りくる矢を必死にとどめる。

しかし一枚、二枚と花びらは散っていく。

残りの一枚。

これが破られれば、もうあとがない。慎二や凜、サーヴァントもろともすべて消し飛ぶだろう。

最後の一枚にヒビが入る。

それでもイリヤは決して諦めない。その身果てるまで、生にしがみつく。

だって正義<sup>ヒー</sup>の味方<sup>ロー</sup>が来てくれるって信じてるから。

「矢を切り刻め、『<sup>イ</sup>次元<sup>ビル</sup>の刃<sup>メタル</sup>』」

ほら、やっぱり間に合った。

イリヤは愛する人の声を耳にし、笑顔を浮かべる。

そして、目の前まで迫っていた矢は跡形もなく切り刻まれた。

その瞬間、何があったのか言峰綺礼は理解できなかった。

自らの敗北を悟り、聖杯に残る魔力すべてを使つての自爆攻撃を行つたが、放つた宝具はあと一步というところで急に掻き消えた。

言峰は声がした龍洞の入り口へと顔を向ける。そしてその原因となつた人物を見つけた。

「貴様か！衛宮士郎！」

件の人物は、人差し指の上に背筋が凍るナニかを乗せていた。

「ケリをつけに来たぜ言峰」

鋭い目つきで士郎は言峰を見ていた。

誰一人として欠けていない皆を見て、少しホツとする士郎。

「士郎！」

ボロボロになつたイリヤがこちらへと振り向く。腕の痛みをまるで気にしていないかのような笑みを浮かべている。

すぐにでもイリヤのもとへ駆けつけたいが、士郎は目の前に迫ってきている影の集団を一瞥する。

「邪魔だ」

士郎がそう呟くと、視界すべての影が両断される。

目の前に障害がいなくなつたことを確認した士郎は二次元的刃を消し、アーチャーに声をかけた。

「アーチャー！今だ！」

「わかっている！キャスター！宝具を貸せ！」

「ええ！」

キャスターは己の懐から宝具を取り出す。それはキャスターが持

つ最強の対魔術宝具。

「狙い撃つー！」

キヤスターの宝具を手を取ったアーチャーは弓にその宝具をそえる。

そして高く飛び上がり、狙いを定めた。

「破戒すべき全ての符！」

放たれた宝具は一直線にアーチャーの狙いである大聖杯へと突き進む。すべての影が切り倒された今、その攻撃を止めるものは誰もいない。

そしてルールブレイカーは大聖杯に突き刺さる。

それと同時に禍々しい魔力が大聖杯から発生する。それはまるで中に潜む何かが悪しんでいるようだった。

破戒すべき全ての符の能力、それはあらゆる魔術を初期化するというもの。

貫かれた大聖杯は初期化され、その中にいる余分なものは外へと強制的に排出される。

空にあつた孔が消える。

そして大聖杯から大きな泥の塊が飛び出し、大聖杯から遠く離れた場所へと落ちる。

まるで人のような形をしたその泥は地面に倒れ伏し、まだ諦めていないのかその腕をイリヤ達へと伸ばす。

「すべての令呪をもってセイバーに命ずる。宝具を解放しろ」

「フツ、よかろうマスター！」

いつの間にかイリヤたちのそばまで来た士郎が手にある三つの令呪を使う。

その命令を了承したセイバーは、令呪のバックアップを受けてその剣に膨大な魔力を乗せる。

「投影、開始」

セイバーのそばに立った士郎はその両手に黄金の輝きを持った剣を投影する。

「鳴け。地に墜ちる時だ。極光は反転する」

「束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流」

黒と黄金の輝きが龍洞を照らす。

そして二人は同時に宝具を解放した。

『約束された勝利の剣!!!』

『偽・約束された勝利の剣!!!』

金色の奔流と漆黒の極光が束なるようにして泥の人形へと突き進む。泥は何もできずその金と闇の光に飲まれる。

そして黄金と漆黒の柱が龍洞の天井を突き抜け、空高く舞い上がった。

その柱は冬木のどこにいても見えるほどのものだった。

「…この世すべての悪が消えたか」

天に上る柱を見上げた言峰は力を失いその場に倒れる。

この世すべての悪によって生きながらえていた言峰の体が活動を停止する。

その指は一本として動かなくなり、意識が暗闇に飲まれていく。

「…」

言峰は瞼をゆっくりと閉じる。

彼が何を最後に考えていたのかは誰にもわからない。

そして一人の男がその人生を終えた。

終わった。

この10年もの長い間、ずっと俺を悩ませ続けてきた聖杯戦争がついに終わりを迎えたのだ。

「士郎!!」

この世全ての悪が消滅したことを確認すると、後ろから急に抱き着かれる。

後ろを振り返ると、イリヤが俺の体に抱き着き顔を綻ばせていた。

「イリヤ、みんなも無事だな」

慎二や凜、サーヴァントの皆誰ひとつ欠けることはなかった。

これも皆のおかげだろう。

「そういや、言峰の野郎はどこだ？」

ランサーが辺りを見回す。

「奴ならあそこだ。大方この世全ての悪が消えたことによつて連鎖的に死んだのだろう」

アーチャーが顔を向けると、そこには横たわった言峰が倒れている。その手から離れた聖杯が台地の上から転がって落ちてくる。

「おっと」と

転がってきた聖杯を慌てて掴む。

「聖杯も無事のようなね」

「そうだな」

傍に来た慎二と凜が聖杯の損傷を確認する。これがあれば皆の願いを叶える程度のこととはできるだろう。

「やっと終わったんだな……」

俺は感慨深げに空を見上げる。

龍洞の天井にあいた穴から太陽の光が入ってくる。

その光はこの聖杯戦争の勝者を祝うかのように俺たちを照らしていた。

「おっさんこれでいいかな？」

「いや士郎・・・さすがにこれは・・・」

「あれ？士郎と切嗣？何してるの？」

「何もない平穏などある一日、イリヤは玄関先で士郎と切嗣が何かをしているのを発見した。」

「おっ、イリヤか。今アインツベルンに送るために聖杯の梱包してたんだよ」

「こんな希少なものの普通の手段で送ってもいいのかな・・・」

「あつちも俺と直接会いたくないだろうしいいでしょ」

「士郎の前にある段ボール箱の中に、勝ち取った聖杯が入れられている。」

「きちんと衝撃を和らげるため、段ボールと聖杯の間にはクッション材が入られている。」

「超一級の魔術品をぞんざいに扱う士郎に笑いが止まらなくなる。」

「あははははは！士郎ってほんとうに面白いね！」

「これでも結構真面目に考えたんだけど・・・」

「士郎は聖杯が入った段ボールにガムテープをかけて固定する。」

「それじゃ送ってくるわ。おっさん送料のお金ちょうだい！」

「わかったよ、数万円あれば足りるかな？」

「懐から財布を出した切嗣が、福沢諭吉が描かれたお札を数枚士郎に渡す。」

「ヒツヒツヒツヒ、ありがとなおっさん」

「渡された一万札を扇子のように広げた士郎は邪悪な笑みを浮かべる。」

「これだけあればあの漫画が買えるなと士郎は周りに聞こえない音量でつぶやいた。」

「士郎」

「ん？どうしたセラ」

「居間のほうからエプロンを着たセラがやってくる。そしてその手にあった小さな紙を士郎に手渡す。」

「外にいくならついでに買い物をしてきてください。切嗣さんから渡す。」

されたお金があれば足りませよね？」

「しよがねえなあ」

士郎はしぶしぶ買うものが記された紙を受け取る。

「士郎！私も一緒に行ってもいい？」

「もちろん」

士郎の了承を確認した私は急いで靴を履く。

「イクゾー」

「行ってきます！」

「行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

切嗣とセラに見送られて玄関を飛び出る。

今日の天気も晴れ、気温も寒くはなくちようど良いくらい。

私と士郎は楽しく会話しながら、近くの配達所への道を歩いた。

「意外と配送料高かったな…」

「まあ距離が距離だしね」

配達所を出た士郎は少なくなった一万円札にがつくりとする。

私はそんな士郎の手を引いて、商店街まで歩く。

商店街につくと、時間帯のせいもあつてか人で賑わっていた。皆こ

こで買った材料を使って今日の晩御飯を作るのだろうか。

「えーとまずは魚か」

「魚ならこつちだね」

人混みを器用に避けながら士郎はセラからもらった紙を見る。

そして私たちはまず魚屋へと向かった。

「いい魚が並んでんじやん」

魚屋には美味しそうな魚がならんでいた。

目当ての魚が置いてあることを確認した士郎は中にいるであろう店員へと声をかける。



「すみませーんこの鮭が欲しいんですけど」

「あいよつとーん？なんだ坊主じゃねーか」

「ランサー！」

店の中から店員の恰好をしたランサーが出てきた。

「なんだランサー。ここでバイトしてたのか？」

「おう、見ての通りな」

そう言うランサーの店員姿は確かに似合っていた。

受肉したあと、生活費を稼ぐために働いているのだろうか。

「鮭だったよな？ほれ」

ランサーは充分な量の鮭の切れ身をビニール袋に入れ、士郎に手渡した。

士郎は料金ピッタリのお金を差し出す。

「ありがとなランサー、また来るよ」

「次も頼むぜ」

ランサーに別れを告げて、次の店へと回る。露店で売っている美味しそうな食べ物匂いが伝わってくる。

士郎は紙を眺めて、次の目的地を呟く。

「魚は買ったし、次は野菜か」

「じゃあ八百屋だね」

今度は八百屋さん。紙に書かれたキャベツ、人参、玉ねぎなどの野菜を購入する。

八百屋にはいろんな野菜が並んでいた。その中には目的の野菜もある。

できるだけ新鮮なやつを選ぼうとするも、二人とも素人なのでどれが良いのかわからない。

「あれ？先輩？」

「うん？おつ桜とライダー。二人も買い物か？」

「そうです」

悩んでいる私たちの後ろから桜が声をかけてきた。

そばにはライダーもいる。

「ちようど良かった桜。どの野菜がいいか選んでくれないか？俺たち

じゃ違いがわからなくて…。」

「わかりました先輩！この桜におまかせください！」

そう桜は自信満々で言うと、必要な野菜をすばやく選び取っていく。

やはり長年料理をしていると自然とこういう技術は身につくものなのだろうか。私もこれから頑張って料理の練習を試みよう。

「ありがとな、助かったよ」

「いえいえ！おかまいなく！」

士郎は選んでくれたお礼にと買ったじゃがいも数個を桜に渡そうとする。桜は最初断っていたが、士郎の熱意に負けしょうがなく受け取った。

「じゃあな桜。また学校で」

「じゃあね桜」

「はい！」

桜とライダーに手を振って別れの挨拶をする。

両手いっぱいビニール袋を持った士郎ははにかんだ笑みを浮かべ言う。

「それじゃあ紙に書かれた食料全部買ったし帰るとするか」

「うん！」

夕日を背中に浴びて、私たちは買ったものを手に家へと帰る。

聖杯戦争が終わり、私たちの何気ない日常が再び戻った。

あつという間に終わった聖杯戦争だったけれど、私は生涯この数日間を忘れることはないだろう。

ここまでが俺が生きた10年間の日々のできごと  
そしてそれはこれから始まるストーリーのプロローグでもある

ヤバい剣しか投影できない俺だけど  
がんばって生きていきます

f a t e / z e r o 編  
来る客屋

薄暗い地下室。

その中央に二人の男が立っている。

一人は真っ白に変質した髪と生気のない顔をした今にも死にそうな男。

そしてその背後には邪悪な笑みを浮かべている老人がいる。

白髪の男がその細い腕を前にかかげる。すると目の前の魔法陣が光始める。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公」

呪文をゆつくりと口にする彼は、一文を呟くごとに苦痛の表情を浮かべる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度」

彼の目からは薄い色の血が流れ出る。そして彼の顔の下を虫が勢いよくうごめく。

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし」  
魔法陣の光が増す。

術式に狂という要素を加えたそれは、本来ならばバーサーカーという狂気に飲まれた英霊が召喚されるはずであった。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」  
そう、はずであった。

（成功……したのか？）

光がやまぬ中、白髪の男、間桐雁夜は地面へと倒れこんだ。

雁夜は徐々に遠くなる意識を必死に抑え、魔法陣にたつ人物を見上

げる。

(子供：：？)

目の前にいたのは、とても英霊とは言えないであろう子供であった。

おそらく小学生くらいの身長の子供である。

(そんな：：)

雁夜は召喚された英霊を見て、敗北を確信した。

それはそうだろう。雁夜が思う英霊といえば、戦闘に卓越した偉丈夫やカリスマあふれる王などである。

断じて目の前にいるような脆弱な子供ではない。

「ヒツ：：」

絶望に身を包まれた雁夜の耳に、怯えた悲鳴が聞こえる。

雁夜ではない。

その声は雁夜の後ろから聞こえた。

雁夜は最後の力を振り絞って後ろを見た。そこには雁夜が心の底から憎む老人がいる。

しかし、怨敵のその顔は恐怖に包まれていた。持っていた杖を手放し、まるで蛇に睨まれたカエルのように尻もちをついている。

雁夜はそのことに疑問を抱くも、遠くなる意識に耐えられなくなり意識を手放す。

臓硯もまた自分が抱く恐怖に疑問を浮かべている。

それもそうであろう。雁夜が召喚した英霊はどう見てもただの子供。今までの聖杯戦争で数多の英霊を見てきた臓硯をして、神秘の欠片もない目の前の子供は虫一匹で容易く殺すことができるだろう。

だが

「――投影開始」

容易く殺せる目の前の子供の冷めきった眼差しが、臓硯の死への恐

怖を溢れ出させた。

「消え失せろ、虫」

その日、500年の妄執は燃え盛る炎とともに姿を消した。

温かい何かに体が包まれる。

それと同時に体を蝕む虫の唸り声が聞こえたような気がした。体を襲っていた激痛が薄れて消えていく。

瞼を開く。どのくらい時間がたったのだろうか。太陽がすでに空高く昇っているのが、窓から見える。

「起きた？」

はっとして俺は声が出たほうへと顔を向ける。

そこには自分が呼び出した子供の英霊が椅子に座っていた。赤い髪に、小柄な体。どうみてもただの子供だ。その少年の右手にはラピスラズリだろうか、青い宝石が明るく輝いている。

「体は剣で治したんだけど、異常はない？」

「なにっ」

改めて自分の体を見る。刻印蟲の影響で死に寸前であった自分の体は、今では健康的なそれへと戻っている。

「どうやって……いやそれよりも桜ちゃんは!？」

「桜ならもう大丈夫。あの虫のジジイもすでにこの世から消えてる」「なんだって!？」

とてもじゃないが信じられなかった。目の前の少年がああ臓硯を殺せるとは思わなかった。

しかし、現実に自分の体は治され、家を覆っていた虫の嫌な気配は一つもしなかった。

その事実には俺は困惑する。

「君はいつたい…？」

思わず目の前の存在に疑問をながかける。それほどまでに、この少年の存在が謎に包まれていた。

「俺の名前は土郎。投影魔術しか使えないただの土郎だよ」

少年、土郎は笑みを浮かべてそう告げた。

光に包まれたと思ったなら、いつの間にか第4次聖杯戦争に来ちゃったらしい。

というのも目の前には雁夜のおっさんと臓硯がいたことから、どうやら原作でいうバーサーカー枠として召喚されたらしい。

とりあえず臓硯とその周りにいた大量の蟲を投影した剣で燃やして、雁夜を治療した。

そのあとは臓硯がいなくなったことで暴走状態になっていた虫の駆除と桜の治療をした。

かつてのように絶望しきった目をしていた桜をベッドに寝かし、雁夜のもとへと移動する。

ベッドの上でとても青白い顔をして寝ている雁夜だったが、何回か頭痛を我慢しながら治療してあげると生氣あふれる顔になってきた。

これでもう大丈夫だろう。

そのあと、起きた雁夜は寝ている桜のもとへと走り、無事に寝ている様子を見て涙を流していた。俺も涙がで、でますよ。

桜の無事と臓硯の死を確認した雁夜と俺は作戦会議を開く。

机を挟んで対面していると、開始早々雁夜は頭を深く下げた。

「ありがとうー君のおかげで桜ちゃんも無事救出できた」

「(救出するのは) 当たり前前だよなあ」

「それでこれからのことなんだが…」と雁夜はつぶけた。

「桜ちゃんを臓硯から助けるといふ俺の願いは叶った。あとは召喚された君の願いだけだ。召喚されたといふことは聖杯にかける望みがあるんだろ?」

「それは大丈夫。聖杯に願う願望なんてないよ」

「なんだって? それじゃあ君はなぜ召喚に応じたんだ?」

「応じたといふか勝手に召喚されたといふか」

縁側でまったりしてただけだし、一言も承してないぞこっちは。

「ていうことは、ここで聖杯戦争から脱落するのもありじゃないか? わざわざ危険なことに首を突っ込む必要性はないことだし」

「うーん...」

俺自身聖杯に願うものなんてないし、ここで脱落する手も普通ならありなんだが、この聖杯戦争にはあのおっさんがいる。

「これは俺の考えだけど、今脱落するのは危ないと思う」

「それはなぜ?」

「今回アインツベルンのマスターとして参加しているだろう人がね...」

俺は雁夜にその人の危険性について詳しく説明した。おそらく用心深い今のあの人はサーヴァントを失ったマスターを躊躇せずに殺しに来るかもしれない。

それに現代兵器のプロであるあの人は、容易く今の俺を殺すことができるだろう。

そう、今の俺なぜか幼くなっている。

すわ黒の組織の仕業か?! と思っただけど、雁夜の少ない魔力量でも顕現し続けられるように未熟な幼少期の姿として召喚されたのだろうと俺は考察する。

これ無理だゾ。

おそらく投影しなければ今の俺は英霊一の低コストだろうけど、投影しようとすれば一瞬で雁夜は干からびるだろう。

つまりあの三つの剣のいずれかの投影なんてもってのほかである。これ無理だゾ。

投影のできない俺なんて、うなぎが無いな重と同じやないかい!



「てことで戦闘もできないし、ダメみたいですね…。」

「ん？話聞く限り何回も投影してるらしいけど、あまり負荷はないぞ？。」

「ん？。」

「そういえばそうだ。俺は召喚されてから5回は投影してる。」

「でも今のところ雁夜からは魔力欠乏の症状も見られない。これはどういうことだろうか。」

「つまり吾輩、士郎君は何らかのスキルを得て進化したのかツツ！」

「そんなポジティブに考えていいのかな… まあ投影分の魔力を気にしないですむのはいいけど」

「試しに、とある剣投影してみてもいい？」

「いいぞ。たぶん大丈夫だ r」

「雁夜のおっさんー!?!」

「イビルメタルを投影しようとした瞬間、雁夜は鼻血を盛大に吹き出しぶっ倒れた。」

「気絶した雁夜を軽く治療したあと、作戦会議を続ける。」

「どうやら俺の特にヤバい三つの剣の投影は無理そうですね…。」

「そんなにその三つの剣が重要なのか？聞く限り他の剣でも十分に勝てそうだけど」

「普通なら十分だろうけど、今回はあの王様がいるだろうし」

「そう暴虐の限りを尽くす、かの英雄王がいる。」

「前回の戦いでもそうであったが、あの三つの剣が投影できないと勝てるビジョンが浮かばない。」

「俺は雁夜にかの王様のヤバさを詳細に教える。」

「そんな奴が呼ばれるのか… それにしても召喚されたばかりなのに、なんでそんな情報知ってるんだ？」

「まあ俺のスキルってことにしといて」

「なんか怪しいな… でもその三つの剣、もしかしたら令呪を使えば投影できるんじゃないか？」

「！」

そうだ、令呪がある。令呪の莫大な魔力を使えば投影することが可能かもしれない。

てことは英雄王と戦うためには必要な令呪の数は。

「もし王様と戦うことになったら令呪が二つ必要になるかも」

「二つもいるのか？投影するだけなら一つで足りるんじゃない」

「あの王様と俺が戦ったら冬木が消し飛ばんじやーうから、俺の固有結界使わなきゃ」

「ええ…」

雁夜がドン引きする。

冬木に戦鬪の余波を出さないためにも、令呪を使って俺の固有結界に引き込まないといけない。

もし冬木の近くで戦ってて、あの人が興に乗って乖離剣を取り出したら目も当てられない。

冬木が原初の地獄（文字通り）になるだろう。

「とりあえず目標はどうする？」

「うーん、できるだけ戦いを避けるべきかも。俺と雁夜のおっさんは最弱コンビだし」

「なるほど」

英雄王に限らず、今回の聖杯戦争は強者ばかりだ。征服王に、ファイオナ騎士団、山の翁、そして我らが青セイバー。

「特に気を付けるべきなのはアサシンの山の翁っすかね。ほぼ一般人と変わらない耐久性の今の俺と雁夜のおっさんじゃ一瞬の不意で殺される」

「末恐ろしいな」

「ということ、これあげる」

俺は二つの剣を投影する。一つは我らが青狸の剣である。

雁夜は怪しげな表情を浮かべて二つの剣を受け取る。

「なんだこれ？」

「お守り。勝手に防御してくれるから、肌身離さず持つておいて」「すごいな。ウワツ!?この剣頭の中に話しかけてきたぞ！」

「害意はないから安心して。そいつは俺に逆らうことはないから」  
渡した剣はどちらも持つ者の体を操り守ってくれるもの。

電光丸ともうひとつのこの剣。もしかしたらとても強いのでは？  
今度俺も使ってみよう。

「その二つを持っておけば、アサシン程度なら生き残ることはできると思う。けど他のクラスとの直接戦闘は絶対禁止」

「すさまじいな。あとで桜ちゃんにも同じものを渡してくれないか？」

「もちろん」

その後、夜遅くまで作戦会議は続いた。

召喚されてから数日がたった。

初戦であるアーチャー対アサシンもそろそろ起きるころだろう。  
気を抜かずにいかなければならない。

本来ならば間桐邸にこもり続けることが大事なのだろうが、備蓄していた食料が底を尽きたので買い出しに行かなければならない。

雁夜を狙われるとまずいので、雁夜にはお留守番をしてもらおう。

「えっと、買い出し用のメモはと」

雁夜からお金と買う物のメモを玄関で確認する。

忘れ物がないことを確認した俺は靴を履き、玄関の扉を開ける。

「ん？」

ふと視線を感じたので後ろを見る。

そこには目のハイライトがない桜が無言でこちらを見ていた。

「一緒に行きたい？」

「…」

桜は無言でコクリと頷いた。外は危ないんだけどな…

けどここ数日外に出てないことだし、心の健康のためにも散歩くらいはさせるべきだろうか。

「おっけー。前に渡したお守りは持った？」

「… うん」

桜はそう言うと、懐から小さな電光丸を取り出した。

見た目はただのおもちやだから、子供が持っていてもおおかしくは見えないうらう、たぶん。

「それじゃーイクゾー」

「… おー」

俺は桜の手を取り、青空の天気の下へと歩き始めた。

桜と手をつなぎ、会話しながらショッピングセンターへの道なりを歩む。

まあ会話といつても俺が喋り続けてるだけなんだけど。

今の桜に必要なのは他者からの支えだろう。地獄に落とされた記憶は消えることがない。その絶望を上書きするほどの日常を噛みしめ続けるしかない。

ショッピングセンターにつく。

休日の影響なのか、ショッピングセンターの中は人でいっぱいだ。

桜とはぐれないように、しっかりと手をつなぎなおす。

センターの中を歩いていると、ふと桜が一瞬だけ立ち止まったような気がした。不思議に思っただけ桜の様子を見ると、桜の視線の先には可愛い子供用の服屋があった。

「せっかくだし、桜ちゃんの前でも見せていくか」

その一言にビクツとした桜の頭をやさしく撫でる。

桜は心配そうな顔つきで俺を見上げる。

「お金のことなら心配ないさ。雁夜のおっさんからたんまりもらってるからね」

俺の言葉に安心したのか、桜の表情が少しだけ柔らかくなったような気がする。

桜の手を優しく引き寄せ、服屋へと入る。

桜ちゃんのお着換えショーの開催や！

とりあえず店員におすすめの服を紹介してもらって、次々と桜に着させていく。

もとの良いからなんでも似合うなこの子。

お金はあるし、とりあえず桜が気に入ってそうなのは全部買うとしよう。

両手に買った服をかかえる。思いのほか大量に購入したので、買い物途中だが一度間桐邸に帰ることにしよう。

「楽しかった？桜ちゃん」

「うん」

桜はついでに買った大きなぬいぐるみを抱えている。時折顔をぬいぐるみに埋めて楽しそうだ。

買い物の最中に昼頃を迎え、ショッピングセンターにはどんどん人が増え始めてきた。

桜が人混みにまぎれ、迷子にならないように注意を払う。

「！」

そのおかげだろうか

相手より先に気づくことができた。

「桜ちゃん。こっちは人が混んでるし、あっちの出口から出ようか」

「？わかった」

視線を向けたのは一瞬だ。

見続けていたら確実にバレていただろう。

人形のような白髪の女性とその傍に立つ男装の麗人を尻目に俺たちは真反対へと向かった。

「？」

「どうしたのセイバー？」

「いえ、何か見られていたような気がして」

金髪の麗人、セイバーは人混みの中を注意深く見渡す。

敵意はない。ただの勘違いか。

セイバーはそう考えて、目の前で楽しく笑うアイリスフィールの姿を見て、微笑みを漏らす。

今宵。英霊たちは集結する。

「てことはアーチャーとアサシンの戦いはもうすでに終わっていたのか」

「セイバーがすでに冬木にいるからな。おそらく今夜ランサーとセイバーが戦うかも」

「こういうとき使い魔が使えないのはつらいな」

お互い魔術の初心者。俺は投影魔術以外ほとんど使えないし、雁夜の蟲を使う魔術もこの間俺が蟲を全部燃やしたせいで使えない。

さすがに家の中すべての蟲を燃やし尽くしたのは早計だったか。

「でどうする？」

「とりあえず港の倉庫街に行こう。一応どんなサーヴァントが来るか見ておきたい」

時間はすでに夜。

俺と雁夜は急いで準備をし、港の倉庫街への道を急ぐ。

剣戟の音が港で響く。

透明な剣を携えたセイバー、その攻撃を赤い槍でいなすランサーが戦っている。

その攻防はすさまじく、離れたここまで衝撃が伝わってくる。

「すさまじい戦いだな」

隣で双眼鏡をのぞく雁夜がそう言う。

「あんまり顔出さないでよ。スナイパーに撃たれるよ」

「おっとそうだった」

戦闘を覗いてた雁夜が頭をひっこめる。

おそらく切嗣のおっさんと久宇舞弥が銃を片手にどこかで潜んでいるだろう。

「どっちが優勢なんだ？」

「今のところは五分五分。けどランサーがもう一つの槍を使ったら傾くと思う」

原作通りなら、セイバーはランサーの宝具ゲイ・ボウで手に不治の傷を負う。

そこからランサー側に試合が傾くだろう。

「話通りならキャスター以外は集結するらしいけど、お前は行かないんだよな？」

「もちろん。あの中に入ったら死ゾ」

ライダーの侮蔑なんか怖くねえ！生き残れば良いってそれ一番言われてるから。

続けて戦いを見守る俺たち。

セイバーはランサーが持つ赤い槍の前では鎧は無駄と判断したのか、鎧を解いた。

そして身軽となった体でランサーへと迫る。

ランサーは迫るセイバーの前に、地中から黄色の槍を取り出す。

不意を突かれたセイバーは手首を切られる。

「おっ、セイバーがランサーの槍を食らったぞ」

「そろそろか」

今食らったゲイ・ボウによって、セイバーは宝具の開帳ができなくなった。

そして、この状況を観戦していたものが参戦する。

辺りを稲妻が襲う。

上空から戦車チャリオットに乗った大男が雷を身にまとい降りてくる。

「双方剣を収めよ！王の前であるぞ！」

腕をひろげ。眼前に立つ二人の剣士に向けてこう告げた。

「我が名は征服王イスカンドル！此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した！」

セイバーとランサーが呆気にとられる中、征服王イスカンドルは笑みを浮かべた。

「あれが征服王イスカンドル…」

双眼鏡を覗く雁夜が息を呑む。

一見自分から真名を告げるなど、大馬鹿者とししか思えない。しかし、かの王から発せられるカリスマがその愚行を消し飛ばす。

あれは自信があるのだ。自分の真名を告げたとしても、聖杯戦争を勝ち抜く自信があるのだ。

「あれに勝てるのか？」

雁夜は不安になり、隣に立つ少年に目を向ける。

少年もまた双眼鏡を覗き、イスカンドルを見ている。

そこに恐れなど感じられない。

「俺たちの目的は勝つことじゃない、生き残ることだよ。だから勝ち負けなんて関係ない。たとえ無様に敗走しようとも、途中で俺が消えたとしても、雁夜と桜が聖杯戦争を生き残れば俺たちの勝利だ」

それに、と少年は笑みを浮かべてつぶける。

「あの王には及ばない」

士郎の腕に着けた腕輪がキラツと光った。

イスカンドルとセイバーたちとの会話が続く。

どうやら二人ともライダーの軍門への勧誘は拒否したらしい。

ライダーが少ししよんぼりとしている。

その後ライダーのマスターとランサーのマスターとの間でいざこ



ざがあつたが、ライダーはそれを一蹴し、再び両腕を開き大声で叫んだ。

「おいコラっ！他にもおるだろうが！闇に紛れて覗き見しておる連中は!!聖杯に招かれし英霊ども！今ここに集うがいい!!」

堂々たる覇気をまとい、大声を倉庫街に響かせる

「なおも顔見せを怖じるような臆病者は、征服王イスカンドルの侮蔑を免れぬものと知れい!!」

その大声は離れた雁夜のもとへと届いていた。

「まづいな観戦がバレてるぞ」

「大丈夫だつて安心しろよ。無視すれば平気平気」

焦る雁夜を士郎がなだめる。

「こちら最弱コンビ。馬鹿正直に英霊たちの前に行く必要はない。

それよりも

「きた」

士郎がかの王の気配を感じとる。

慌てて雁夜が双眼鏡を覗きこむと、ライダーたちのそばの街灯の上に黄金の粒子が集まる。

「我をさしおいて王を名乗る不埒者が、一夜に二匹も湧くとはな」

黄金の鎧を身にまとい、三人のサーヴァントを見下ろすのは英雄王その人。

彼は鋭い目つきでライダーたちを睨みつけていた。

「難癖つけられたところであ。イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが」

「たわけ、真の王たる英雄は天上天下に我ただ一人。あとは有象無象の雑種に過ぎん」

「そこまで言うならまずは名乗りを挙げたらどうだ」

征服王はそう問を投げかける。

街灯の上に立つ英雄王は、その問を投げかけたライダーを強く睨む。

「問を投げるか、雑種風情が。王たるこの我にむけて」

彼が立つ街灯が激しく点滅する。それは英雄王の怒りと呼応しているかのようだった。

「我が拝謁の榮に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すならば、そんな蒙昧は生かしておく価値はない！」

彼の背後にゲートが開かれる。

ライダーたちは来る宝具に向けて構える。

「だがその前に」

英雄王の背後にあるゲートの向きが変わる。

その方向には誰もいないはずである。

「王たる我を盗み見する下郎を引きずりだすとするか」

英雄王もまたゲートが開いている方向へと視線をやる。

「とく参上せよ。そうでなければその場ごと吹き飛ばすぞ」

蛇のような英雄王の目は、遠く離れた場所で隠れている士郎雑種をしっかりと捉えていた。

「…なんかこっち見てないか？あの金ピカ」

雁夜は冷や汗を垂れ流しながら双眼鏡をのぞき込む。

覗きこんだ先には英雄王とその背後にある宝具とぼつちり目があう。

「なああって」

不安になった雁夜は今だ無言の己のサーヴァントへと視線を向ける。

そこには雁夜と同じく冷や汗を垂れ流している顔面蒼白な士郎がいた。

「た、たぶん同じ方向にアサシンがいるんでしょ！俺は関係ないから…」

その瞬間、雁夜と士郎の間を何かが高速で通り過ぎていった。

直後、二人の背後にあったコンテナ群が爆発する。

「……」

二人は首を機械のようにグギギギと動かしながら、たった今起こつ

た惨状へと目を向ける。

「我はとく参上せよと言ったのだぞ。3度目はない」

「よし行つてこい士郎君！骨は拾つてやるから!!」

「フアツ!!」

雁夜は信頼する相棒（○）の背中を叩き、英雄王<sup>地獄</sup>へと送りだす。

士郎はこの世の終わりみたいな表情を浮かべながら、とぼとぼと歩きだした。

そして士郎は集団の前に姿を現す。

「なツ!!」

「これはまたなんとも...」

「なんでここに...」

「子供が...?」

その場にいるサーヴァントとそのマスターの驚く声が聞こえる。

しかし士郎はそんな反応に意識を割くことができなかった。

「ほう...」

街灯の上に立つ英雄王の視線が体を貫く。

何もかも見透かされるような気分になる。

「面白い」

ギルガメッシュは士郎に何かを見出したのだろうか、笑みを浮かべる。

「雑種、この我が許可する。名を申せ」

英雄王のその言葉を聞いた士郎は、両手に握るおもちゃのような剣を構えて王に名乗った。

「愚地独歩でs「殺すぞ」... 士郎です」

ふざけて答えた士郎の周りに大量のゲートが出現したのを見て、士郎は正直に名乗った。

遠くで眺めていた雁夜がずっこけたような気がした。

## その身に秘めたもの

「坊主、あの子供はサーヴァントなのか？」

突如現れた少年とアーチャーの相対を見ているウェイバーに、傍に立つライダーはそう尋ねた。

「たぶんそうなんだろうけど、こんなサーヴァントがありえるのか!？」  
聖杯戦争に参加するマスターは、サーヴァントのおおよそのステータスがある程度把握できる。

例えばさつきまで戦っていたセイバーのステータスは、ほとんどが『A』以上である。

しかし、ウェイバーが見るかの少年のステータスは

「ほとんどが『E』」だぞ?!これが英霊なのか?!

能力値の最低値を示す『E』のさらに下。

少年は見た目通りの、脆弱な子供であることに違いない。  
隣に立つライダーはそれを聞くと、「ふむ」と顎に手を当てる。

「なるほどのお...。余の見立て通りの強さというわけか」

しかし、ライダーはアーチャーの言った言葉を見逃さなかった。

(あのアーチャー、あの子供を見て『面白い』と言いおった)

突如として現れたアーチャーだが、ライダーはすでにその性格を大方把握していた。

傲岸不遜、唯我独尊、傍若無人。

逆らえば殺し、価値のないものには見向きもしない。

まさに暴君の王そのもの。

しかし、そんな者があの少年を見て「面白い」と言った。

ライダーは少年をじっくりと観察する。

これといって変わりのない顔立ち。筋肉量は一般的な少年と変わらず、かといって王が放つようなカリスマ性も感じられない。

そして、その視線は少年が両手に持つ剣へと注がれる。

刀身が黄金色で、おもちゃのような刀。

傍から見れば、子供が遊びに使うような物である。

「どうするんだよライダー」

ウエイバーが不安そうに聞いてくる。

「まあ待て」

今彼らの邪魔はできない。少年とアーチャーは今、果し合いの真つただ中だ。

ウエイバーは、今から起きるであろうアーチャーによる一方的な蹂躪に戦々恐々としているのだろう。

しかし、ライダーにはわかる。

あの少年の目は死んでいない。

アーチャーの視線を堂々と受け止め、その上アーチャーの目をまっすぐに見つめ返している。

とてもただの少年とは思えない。

ライダーは笑みを浮かべて、状況の行く末を見守る。

少し離れた場所で、アイリスフィールのそばを守り立つセイバーもまた、シロウと名乗った件の少年のことについて考える。

(聖杯から受け取った知識によれば……天草四郎と呼ばれる存在がいるが)

天草四郎。江戸時代初期、島原の乱における一揆軍の最高指導者である。

しかし、セイバーの直観はかの少年がその英霊であることを否定する。

(あれはただの子供だ。先頭に立ち、民を率いるような存在ではない) それではあの少年は一体……？とセイバーは思考を続ける。

特に疑問に思うことは、その幼さ。

英霊は全盛期の姿で召喚されるというが、あの少年はあの姿が全盛期というのか。

(もしくは、私のように成長が途中で止まったのか)

セイバー、アルトリアはエクスカリバーを手にしたときに不老不死となった。

だがセイバーと同じく不老不死となった存在で、かの少年のような

特徴をもつ英霊は思いつかない。

(それに加えて、彼のクラスは何だ?)

あと判別していないクラスは、バーサーカーとキャスターの二つ。しかし、少年は狂気に身を堕としてしている様子はない。それならばキャスターなのかと思うが、自分の工房に籠らずここまで出てきていることから考えにくい。

(もしやエクストラクラスか?)

通常の7つのクラスのどれにも該当しないクラス。

詳しいことはセイバーにもわからないが、そういうクラスが存在することは聖杯の知識から知っている。

セイバーはさらに思考を深めながらも、アーチャーと少年を注意深く観察する。

二人は無言のまま睨み合っている。

「なッ!？」

すると突如、アーチャーの背後から2本の宝具が高速で射出される。

少年はその場を動かない。

すさまじい音とともに、爆発が起きる。

土郎がいた場所は爆発で発生した煙に包まれる。

「死んだのか...?」

ウェイバーの目には突如、少年がいた場所に爆発が発生したことしか見えなかった。

「なるほど。これは確かに面白い」

「え?」

「なんだ、わからなかったのか?」

土煙が晴れる。

そこには無傷で立っている土郎がいた。そばにはアーチャーが射出した2つの宝具が地面に刺さっている。

「あの小僧は迫りくる2つの宝具を両手に持った剣でいなしたのだ。その場から動かずな」

「な!？」

ウエイバーが慌てて確認すると、確かに少年は先ほどの場所から足を一步も動かしていなかった。

「あの攻撃を腕だけでいなしただのか!？このステータスの低さでか!？」

「ああ、普通なら不可能であろうよ。どうやら、あの坊主が持っている剣に秘密がありそうだな」

士郎が無傷であることに、さらに笑みを浮かべる英雄王。

ギルガメツシユは続けるように、3本の宝具を射出する。

今度はその場から動いた士郎は、まるで剣の達人かのような美しき剣筋で迫る宝具をはじく。

止まらず4本、5本と射出する数を増やしていくも、士郎はそのすべてを綺麗にはじき返す。

「ならばこれはどうだ!」

英雄王の背後のゲートの数が一気に増える。

その数はおよそ30以上。

それを見た士郎は、魔力を電光丸に流す。剣の刀身が勢いよく光りだす。

「真名開放」

黄金色に光輝く剣を、前に構える。

今にも射出されそうな多くの宝具を前に、士郎が剣の真名を開放しようとしたその時。

「!」

笑みを浮かべていた表情を一瞬に不機嫌なそれへと変え、英雄王は虚空へと呟く。

「貴様ごときの諫言で王たる我に退けと?大きくでたな時臣」

すると背後で開いていたゲートはすべて閉じ、士郎がはじいた剣は粒子となって消えていった。

英雄王はライダー、ランサー、セイバーへと顔を向けた。

「雑種ども!次までに有象無象を間引いておけ!我と見えるのは真の

英雄のみでよい！」

そして士郎をチラリと見た後、彼は霊体化して消えていった。

あとに残ったものたちは、彼の去ったあとを無言で見ている。

「ふむ、どうやらあれのマスターはアーチャー自身ほど豪気なたちではなかったようだな」

ライダーは冷静にアーチャーのマスターを分析する。

「ん？」

ライダーがふと気になったのか、先ほどまでアーチャーと戦っていた少年を見やる。

それに続いてセイバーとランサー、そのマスターたちが視線を向ける。

そこには少年が足音をたてずにこつそりと逃げようとしている姿が目に入る。

まるでバラエティ番組でお笑い芸人がやるようなおかしな歩き方で、ライダーたちから離れようとしている。

「待て、そこな坊主」

すかさず止めに入るライダー。

肩を思いつきりビクツと動かし、冷や汗を浮かべた士郎は恐る恐る振り返る。

「なんででしょうか・・・」

「なに、別に取って食おうとは思っておらんわい。うぬにも問うておくことがある」

そしてライダーは口を大きく開き、今宵最大の音量で告げた。

「うぬは我が軍門に下り、聖杯を余に譲る気はないか！」

またか・・・とセイバーとランサーは眉をひそめる。

「ライダー！お前って馬鹿はまたッて痛あツツ!？」

ウェイバーは顔を真っ赤に染めて、ライダーに詰め寄る。

しかしライダーのデコピンを食らい、でこをおさええてうづくまる。

征服王の問に、士郎はすぐさま返答した。

「軍門に下るのは嫌だけど、同盟組んでくれたら聖杯は譲るよ」



「なッ!?!」

「ほお、同盟か」

ライダー以外が驚く中、セイバーは士郎に詰め寄る。

「馬鹿な！あなたも聖杯に呼ばれた英霊の身であるならば、聖杯にかける願望があるのではないのですか!?!」

「俺とマスターの願いはすでに叶ったよ」

「なに?」

士郎はその場にいる全員に聞こえるように言葉をつづけた。

「俺とマスターは聖杯にかける望みはない。俺の目的はマスターがこの聖杯戦争を生き残ることだから」

「生き残る…」

それは聖杯を得るために、自分たちの意思で参加したマスターたちにとって不思議なことだろう。

生き残りたいならそもそも参加しなければいいだけなのだから、それに加えて戦いを放棄すれば教会の保護も受けられる。

「脱落すればいいと思ってるかもしれないけど、今回に限ってそれはできない。特にセイバーのマスターを警戒しなければならぬから」  
「ッ!?!」

アイリスフィールは士郎の言葉を聞き、動揺する。

セイバーのマスターはアイリスフィールではなく、隠れている衛宮切嗣であることに気づいている様子だからである。

「で、ライダー。返答は?」

「よかろう！うぬとの同盟を結ぼうじゃないか!」

「ありがとう」

同盟を結んでくれた征服王に感謝を告げる士郎。

「後日話し合おう。使い魔を間桐邸に送ってくれ」

「わ、わかった!」

ウェイバーの返事に満足したのか、士郎は霊体化する。

彼の体が足元から粒子になっていく。

「そういえばセイバーのマスターに言っておくことがあった」

士郎はセイバーとアイリスフィールではなく、衛宮切嗣がいるであ

ろう方向へと振り向く。

「今の聖杯はあなたの願いを最悪な方法で叶える」

「ッ!?それはいつたい!?!」

アイリスフィールが慌てて尋ねるも、士郎は霊体となり消える。

「アイリスフィール!大丈夫ですか!?!」

「え、ええ... 大丈夫よセイバー」

動揺したアイリスフィールはその場で崩れ落ちそうになるも、傍にいたセイバーが支える。

「彼はいつたい...」

アイリスフィールを支えながら、セイバーもまた去っていった英霊について考える。

セイバーはアーチャーが彼に攻撃したとき、なすすべもなく敗北すると思っていた。

だが実際はどうだ。迫る宝具を華麗に撃ち落とし、達人のような技量を見せつけた。

おそらくあれは、かのサーヴァントのほんの一部の実力だとセイバーは直観で感じた。

より謎が深まる少年に対して、セイバーは警戒度を大きく上げた。

そうして、英雄たちが集った最初の一戦は終わりを迎えた。

「ライダー、あれでよかったのか?」

夜空を駆ける戦車の上で、ウェイバーは己のサーヴァントにそう言

う。

「ぬ？何がだ？」

「同盟のことだよ。お前のことなら軍門に入れなきや認めないと思つてたよ」

「ああ… そうさなあ」

ライダーは顎髭を撫でる。

「あれは軍門に下るような奴じゃありません。あれにはすでに『王』がいる」

「王だつて？」

「そうだ」

「よくわかんないな… 仕えていた王が生前にいたつてことなのか？」

「必ずしもそうではない。王とは導く者！仕えていたかどうかに関わらず、あの小僧にはすでに『王』に対する憧憬があるのだ!!かくおしいものよ！余の『王』としての格を先にあやつに見せてやりたかったわい!!」

なるほどと、ウェイバーは理解した。

あのサーヴァントは自分だけの『王』を既に見定めているのだ。だからライダーの軍門には…ライダーを『王』として扱うことを避けたのだ。

自分にもそんな『王』ができるのだろうか？

そう考えるウェイバーは隣にいるライダーの横顔を眺める。

月明りを背に、彼らは住処へと向かった。

「うん？」

雁夜はふと気づくと、真っ白な空間の中に倒れていた。起き上がって周りを観察するも、周囲には何も無い。

「どこだ……？俺は確か…… 土郎君と一緒に帰って」  
だんだんと記憶がよみがえってくる。

そうだ。倉庫街での戦いを終えて、間桐邸に帰ったのだ。

そして土郎に夜の警護を任せ、疲れた体を引きずって布団に入ったのだった。

「すると……ここは夢の中か」

ずいぶんと殺風景な夢である。

どうせならもつと楽しい夢でもみたいものだ。

「あれ？いきなり道が……」

ため息をついていた雁夜の目の前にいきなり道が現れた。

「行けってことなのか？」

再び周囲を確認するも何も起きない。どうやら行くしかないようである。

恐る恐る雁夜は歩き出す。夢の中特有の上手く歩けないなんてことはなく、雁夜はしっかりとした足取りで進み続ける。

「！何かある」

道を歩いていくと、道の先の両側に何かがあった。

雁夜はそれに近づく。

「これは…… 土郎君がくれた剣だ」

透明なショーケース内に土郎が投影してくれた剣が飾られている。

そのショーケースの上には額縁があり、写真が貼られている。

「…… 青い狸？」

写真には4人の少年少女と一匹の大きな青狸が笑顔を浮かべて手を取り合っている様子が映っている。

雁夜には、その少年たちが誰なのかわからない。

疑問に思いつつも、今度は道の反対側を振り向く。

そこにもまたショーケースがあり、中には土郎が投影してくれたも

う一本の剣が飾られている。

「これはエジプト神話の…」

雁夜は上に飾られた写真を見る。そこには雁夜も知っているエジプト神話の神の写真があった。

「ここはもしかして土郎君の夢の中の世界なのか？」

二つの剣を尻目に、雁夜は進み続ける。

歩く最中、雁夜はいろいろな剣を見た。

あまり詳しくない雁夜でも、飾られていた剣の凄まじさを理解できた。

とても小さな剣、視界一杯を覆うほどの大きさの剣。剣とは思えない形をした何か。

歩く雁夜は大小さまざまな剣を見て歩いた。

歩き続けてどれくらい経ったのだろうか。

歩き出してから数十分ほどかもしれないし、数日かもしれない。

この空間において、雁夜の時間感覚はとても曖昧なものだった。

そして雁夜は今も歩き続ける。

すると道に変化がおきた。

「…階段か」

道は途中で階段へと変化していた。階段のそばまで来た雁夜は階段を見上げる。先は見えない。

「行くしかないか」

雁夜は階段に足をかけ、上り始める。

階段を上っている途中試しに後ろを振り向くと、今までのぼってきいた階段が昇ると同時に消えていく。

夢の中だからだろうか、疲労は感じない。

雁夜は軽やかな足取りで階段をのぼり続ける。

しばらくのぼったあと、雁夜は踊り場にたどり着いた。

無限に白い空間が広がる中、目の前には一つだけショーケースがある。

雁夜は近づいて観察する。

赤い模様が入った円筒が三つあり、その持ち手は黄金の輝きをはなっている。

「これは、あのアーチャーか」

雁夜は写真を眺める。そこには眩しい太陽を背にし、黄金の鎧を纏ったかの英雄王が映っている。

しかし雁夜が気になったのはそこではない。

「なぜ錠前が？」

ショーケースを囲むように大きな錠前がかかっている。今までのショーケースには無かったものだ。

まるで使用することを禁じているような……

「まだ階段が……」

気になってもどうしようもないと思った雁夜は、さらに奥へと視線を向ける。

まだ階段が続いている。

錠前が気になるものの、雁夜は再びのぼりはじめる。

頂上らしき場所には案外すぐ到着した。

同じようにショーケースと写真が並んでいる。

その数は3つ。

雁夜はすぐに、これが士郎の言っていた3つの剣であることを理解する。

今まで見てきた剣もすごかったが、この3つは桁違いである。

じっくりと観察する。

指に乗る程度の大きさの鋼。何かを切るために作られたものではないと断言できるほど形が奇妙な杖。そして……

「ん？」

3つ目を眺めていた雁夜の視界の隅に何かが映る。

「なッ!？」

上へと続く階段がある

「まだ上があるのか…?」

雁夜は士郎から、彼が投影できる剣について大方聞いている。しかし彼は目の前に並ぶ3つの剣が最上であると言っていた。

もしかすると、士郎ですら知らない『ナニカ』がこの先にあるのかもしれない。

誘われるかのように、その階段へと歩き出す。

まるでアリジゴクに落ちる蟻のように、雁夜は危険な誘惑に逆らえず歩みを進める。

そして階段に脚をかけたその時、

「ウワツ!」

足場が消えた

「うわあああああツ!」

雁夜は重力に逆らえず、真つ逆さまに落ちる。

先ほどまで眺めていた3つの剣がどんどん遠くへ行く。

「ど、どこまで落ちるんだ!」

落ちている方向へ顔を向ける。やはりどこを見ても真つ白で、自分が本当に落ちているのかさえ錯覚しそうになる。

しかし、しばらく落ち続けていると、落ちる方向に一点の黒点が見えた。

その黒点はどんどん大きくなり、ついには視界半分が真つ黒に染まる。

そして視界を埋め尽くすほどに真つ暗になると、雁夜は盛大に黒い水しぶきをあげて着水する。痛みはない。

「今度はどこだ…は…」

顔にかかった黒い液体をぬぐい、周囲を見渡す。

真つ白の次は真つ黒か…と雁夜はため息をはく。

やはり周囲には何も見えない。

しかし、雁夜はあることに気づいた。

「この黒い液体…流れがある」

雁夜の腰の高さまで溜まっている液体には、かなり緩やかだが流れがあった。

流れてきている方向へ、雁夜は液体が体を押す力に逆らって歩く。今まで疲労を感じなかったのに、この場所では前に進むだけで疲れてくる。

時々休憩しながら、進み続けた。

「何だあれ」

黒い液体を辿るとそこには人がいた。

一言で表すと真つ白人だ。

髪や皮膚が真つ白で、白以外の色が見受けられない。

その目から流れ落ちる黒い涙以外は。

彼は黒い涙を流しながら、膝を抱えている。

「土郎君…なのか？」

雁夜はその人物が誰なのかすぐにわかった。自分が呼んだサーヴァントと同じ面影があるからだ。

呼びかけると、それは膝に埋めていた顔をゆっくりとあげた。

「あ」

雁夜の口から声が漏れ出る。

その顔を見たその瞬間

赤色に染まったその瞳を見た瞬間。

雁夜は一瞬のうちに切り刻まれた



「よし桜ちゃん。いつせーのーで行くぞ」

「…」コクリ

「よし！いつせーのーでツ!!ジャンプ!!」

「グハツ!?!… な、なんだ!?!」

いきなり腹に加わった力で、雁夜の肺の中の空気が一瞬にして吐き出される。

その衝撃で飛び起きた雁夜は、自分の布団の上で寝転がる二人に目を向ける。

「おっやっとなってきた。もうお昼ですよ雁夜のおっさん！桜ちゃんも何か言っておやり！」

「…」お寝坊さん

どうやら昼まで起きなかつた自分を強引に叩き起こしたみたいだ。「それにしてもおっさんひどい汗だゾ。悪い夢でも見た?」

「あれ?」

確かにひどく気持ち悪いと思ったなら、身に着けていたパジャマと布団が汗でビショ濡れになっている。

「うーん夢で何か見たような、見てないような」

「スタンド攻撃でも受けたんすか?」

士郎がよくわからないことを言っている。

夢で何かを見ていたような気がするのだが、何を見たのかは思い出せない。ひよっとしたら何も見ていなかったのかもしれない。

「そんなことより、もうご飯の時間だぞ。先に食べるからおっさんも早く着替えて食べなよ」

士郎はそう告げると、桜と共に部屋から出ていった。

雁夜は汗まみれの服を脱ぎ、普段着へと着替える。

「イタッ」

服を脱ぐ瞬間、首元に痛みが走った。

部屋にある鏡を見てみると、首に細く小さい切り傷があった。すでに血は固まっている。

「ん？昨日どこかで切ったかな？」

まあ小さい切り傷だし、大丈夫だろうと雁夜は着替え、桜と士郎がいるであろう食卓へと向かった。

士郎くんカルデアに召喚される

「のどかな一日だ……」

縁側に座り、ゆつくりとお茶を飲む。

第五次聖杯戦争が終わり、時は流れ今は春休み。

高校三年生を控えた士郎は一人でゆつくりとしていた。

「イリヤも皆も用事があつて外出つて珍しいな」

ズズズと士郎はお茶を口にしながら、一緒に住む同居人たちの思い浮かべる。

切嗣は町内会の用事、イリヤは学校の女友達と一緒に遊ぶらしい。

セラとリズは運動しに新都のトレーニンングジムに行つてるし、セイバーは最近始めたカフェのバイトを頑張つてるそうだ。

「数か月ぶりの一人きりか……」

そう思えばここ数か月はイリヤとつきつきりだったな。

縁側で横になる。

春の心地よい風が肌を流れる。

「あっそうだ。冷蔵庫にとつといたアイスがあるんだった」

前に切嗣からもらつた高級なアイスで、冷蔵庫に大切にしまつてあつた。もちろんちゃんど衛宮士郎と名前が書いてある。書いてないトリズとふじ姉に勝手に食べられるからだ。

勢いよく起き上がり、居間にある冷蔵庫へ向かう。

「ウヒョヒョヒョー！うまそうだねえ〜」

下卑た笑みを浮かべながらスプーンとアイスを手にし、縁側に戻つてくる。

アイスの蓋を開ける。すると美味しそうな濃厚なミルクの匂いが漂う。

これはたまらん。

士郎はその香りの魅力に耐え切れず、スプーンをアイスに突き刺

す。

カチカチに凍ったアイスだが、スプーンを使ってなんとか少し削り  
とることができた。

「あ〜〜ん」

口を大きく開き、スプーンに乗ったアイスを飲み込む。

その瞬間、士郎の視界は真っ白に染まった。

「立香ちゃん新しいサーヴァントを呼ぶ準備はできたかい？」

眼鏡をかけた人がそう呟く。その手には奇妙な形の石が三つあつ  
た。

「うん！大丈夫だよダヴィンチちゃん！」

問い掛けに答えたのは赤い髪をサイドテールにした女の子。名前  
は藤丸立香。

立香は眼鏡をかけた女性、ダヴィンチちゃんからサーヴァントを呼  
び出すために必要な聖晶石を受け取る。

「先輩！いつでも行けますー！」

盾を召喚陣にセットした女の子、マシユ・キリエライトが元気そう  
に呟く。

立香は腕をまくり、気合を入れた。

「おっけー！じゃあいくよー！」

手にした聖晶石を盾の上に置く。そして呪文を呟く。

すると盾の上に召喚陣が浮かび上がり、その上に浮かんだ白い球が  
回転を始める。

白い球が回転速度を上げ、それが三つの輪を作り出し、中央の一点  
で集束する。

「うわっ！」

三つの輪が集束した途端、視界が真っ白に染まる。召喚陣から発生した光に思わず手で遮る。

「これは・・・」

隣に立つダヴィンチちゃんが何かしら呟く。

光が収まる。私は遮っていた手をどけて、召喚されたサーヴァントを見る。

「…………… は？え？」

召喚された人は目をパチパチさせていた。その手にはなぜかスプーンとアイスらしきものが握られている。

「え〜と・・・」

目の前に正座で座るサーヴァントは周囲を見回しながらスプーンを握った手で頭を器用に掻いている。

「とりあえずこのアイス全部食ってもいいですか？」

私は思わずズッコケた。

「こちらへどうぞー！」

「おかのした」

そのあと手に持っていたアイスをじっくりと味わったサーヴァントは、マシユに案内されて近くにあったソファに座る。

彼はソファに深く沈む。

「ん？このカメラってなんですか？」

男は自らを撮っているように置かれたカメラを指さす。

「ああ。これは食堂や広間なんかの他の英霊たちがよく集まっているところに生放送しているのさ。新しく来たサーヴァントの紹介も兼ねてね」

「はえ〜。それじゃピースサインでも」

ダヴィンチちゃんの説明に、男は気の抜けた返事を返す。そしてカメラ目線でピースサインをする。しかしその表情は真顔である。

「それじゃあまず真名を教えてくださいかな」

「！衛宮士郎です」

私が質問を投げると男は少し驚いたような表情を浮かべ、質問に答えた。少し唐突すぎたかな？

「エミヤシロウ…エミヤ？」

脳裏に最初期からお世話になつている赤い外套を着たアーチャーとアサシンを思い浮かべる。

「もしかしてアーチャーとアサシンのエミヤさんをご存知なのでしようか？」

「おっ！アーチャーのやつここに來てるんですか！アーチャー！アーチャー！見てるかー！フラッシュュー！」

マシユがそう尋ねると、突然テンションが上がったエミヤシロウさんがビデオカメラに張り付きピースサインを再び行う。今回は顔に笑みを浮かべている。

「わーわー！ちよつと落ち着いて！」

「おっとすみません」

慌ててカメラを遠ざけると、ハツとしたシロウさんは冷静さを取り戻しソファに再び座る。

「な、なかなか個性的な人ですね先輩…」

「そ、そうだね」

隣に座るマシユとコソコソ会話する。

「アーチャーのエミヤとはどういう関係なの？」

「彼は私のお兄ちゃんですってね、よくお世話になっていたんですよ（大嘘）」

「今大嘘って言いましたよね…？」

私は思わず苦笑する。今回もまた特徴的な人がきたなあ。

「じゃあ次の質問はエミヤシロウさんの好きなことで」

「やりますねえ!!」

「何を!？」

大声で言った内容の無さに思わずツツコミを入れてしまった。

「冗談です。そうですねえ…。好きなことは日光浴です」  
「なるほど」

シロウさんは少し考えこんでから趣味を呟いた。

確かに日光浴は気持ちがいいものだ。ここ最近は忙しく、時間がなくてまったくできていないけど。

「えっ、身長と体重はどれくらいあんの？ えー身長が170cmで体重が59kgです。今なんかやつてるのスポーツ？ ガツチリしてるけど。 特にはやってないんですけどトレーニングはしてます」

「あ…。 自問自答はしないでいいから…」

唐突に自問自答を始めたシロウさんに頭を痛める。

駄目だこの人。 バースーカー特有の狂化スキルが入ってるのではないのだろうか。 とうかバースーカーより行動が読めないかもしれない。

「じゃあ日光浴っていうのは？ やりま\_\_\_\_\_」

「やめんかたわけ!!」

「グハツ!!」

「エミヤ!？」

ソファアアの後ろから唐突に現れたアーチャーがシロウさんの頭をしばいた。 叩かれたシロウさんはソファに顔を埋める。

今は食堂にいるはずなのだが、急いでやってきたのか、エミヤは息を切らしている。

「イテテ…。 何すんだアーチャー!」

「なぜ貴様がここにいるのかは知らんがとつと帰れ! マスター! 何を強制退去させよう! 今すぐに!」

「まーまー落ち着いて落ち着いて」

顔を真っ赤にして、シロウさんの腕を引くアーチャーのエミヤをダヴィンチちゃんが抑える。

ダヴィンチちゃんの静止により、少しは落ち着いたエミヤが不機嫌そうにしながらシロウさんに尋ねる。

「それで、なぜ貴様がここにいる」

「俺も知らねえよ。アイス食ってたらいつの間にかここにいたんだよ」

頭にできたたんこぶを痛そうに撫でているシロウさんがそう呟く。

「どういうこと?」

私が尋ねると、シロウさんが自分のことについて話し始めた。

彼が言うには、自宅でゆつくりアイスを食べっていると突然光に飲まれていつの間にかここにいたらしい。しかもどうやら彼が来たのは2004年の冬木からだそうだ。

「ふむふむ、なるほどなるほど。事情はわかったよ」

眼鏡をキリツと上げたダヴィンチちゃんが説明を始める。

「おそろくかつて立香ちゃんやんが修復した特異点冬木が原因じゃないかな? 特異点が修復されるときに発生した空間や時間のねじれにシロウくんが偶発的に巻き込まれてこのカルデアに流れ着いたってことかもしれないね。もちろんこれはただの仮説だよ?」

「つまり... どういうことだつてばよ?」

頭に?を浮かべたシロウさんが難しい顔をして唸る。

「つまり、今シロウくんを退去させたらどうなるかわからないってことさ。最悪虚数空間に放り投げ出されるかもしれない」

「フアツ!」

シロウさんは顔を青く染める。その隣に立つアーチャーは頭を抱える。

「大丈夫! こつちも原因を調べてシロウくんを元居た場所に帰すことができるようにするさ! けどその間はカルデアにいてもらうことになるけどいいかい?」

「あ、いっすよ(快諾)」

自分が元居た場所に戻れる保証があることがわかったシロウさんはすぐさま顔色を変え、カルデアに滞在することを快く受け入れた。

随分と気分がコロコロ変わる人だなあ...

「それじゃあよろしくなアーチャー! とりあえずここ案内してくれよな!」



「なんぴゃ...」

士郎に肩を叩かれているエミヤは途方にくれた。

<注意>ここからはF G O風のオリ士郎君の設定です。見なくても大丈夫です(たぶん)

「レア度」：星1

「クラス」：セイバー

「属性」：中立・中庸

「真名」：衛宮士郎

「時代」：21世紀 「地域」：日本・冬木 「性別」：男性

「パラメータ」  
筋力 E 耐久 E

敏捷 E 魔力 E X 幸運 D

宝具 E X

「スキル」

・戦闘続行：E

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能なスキル

しかしこのランクの低さでは常人より少しだけしぶとい程度である。

・投影魔術：E X

道具をイメージで複製する魔術。

しかし、士郎君は特定の剣以外を投影できないためそのランクは測定不能となっている。

「宝具」

『四宝剣』（封神演義より）

物の存在する確率を変動させる能力を持つ。士郎の持っている特にヤバい三つの剣のうちのひとつ。この剣を振るうたびに士郎は大きな負担を被る。

『二次元の刃』(魔人探偵脳嚙ネウロより)

斬るといふ過程が無く、ただ斬つたという結果のみを造り出すといふ強力な剣。士郎の持っている特にヤバい三つの剣のうちのひとつ。

『?????』

士郎の持っている特にヤバい三つの剣のうちのひとつ。今後のス

トリーで解放。

『?????』

今後のストーリーで解放。

『無限の剣戟』

士郎君が作りだす固有結界。

サーヴァントとなった今、この結界を使うためにはマスターの令呪の補助が必要となる。

<士郎君の反応>

・エミヤ(弓)

士郎君「マスターはアーチャーの料理を食べたことあるか?へえアーチャーが食堂でご飯作ってるのか。あの人俺が頼んでも全然作ってくれないんだぜ?ここなら毎日食べられるな!」

・エミヤ(殺)

士郎君「おっさんもやっぱりいるんだな。けどどうやって話しかけるよ...あの人の真顔にトラウマ持ってるんだけど俺」

・アルトリア・ペンドラゴン(剣)

士郎君「うおおおおお!あれが夢にまでみた青セイバーその人! やっぱり僕は王道を征く...マスター、うちのオルタと交換しませんか?」

・アルトリア・オルタ(剣)

士郎君「ヒエツ...マ、マスター!匿ってくれ!黒いあの人にさっきの交換の話がバレた!マジでキレてるよあの人!」

・クーフリーン(槍)

士郎君「おっ、ランサーじゃん。ん?お前そんな性格だったかだつて?俺も一皮むけたのさ(大嘘)」

・メデューサ（騎）

士郎君「マスター、ライダーのメデューサになんか避けられている気がするんだけど、気のせいかな？本当に避けられてたら泣いてしまおうぞ俺」

・イシユタル、エレシユキガル、パールヴァティー、カーマ、ジャーマン

士郎君「どうやら依代の記憶はあまり持っていないようで少し安心。たぶんあの人たちが知る俺と、この俺は違うからな。……本当に依代の記憶持っていないよね？」

・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン（術）

士郎君↑無言で鼻血を流し失神

・クロエ・フォン・アインツベルン

士郎君「最近クロエが夜遅くに自室に来て、俺をからかってくるから夜も眠れない……。お助けをマスター！」

・美遊・エーデルフェルト

士郎君「衛宮士郎が必死に守り続けた少女。マスター、彼女が戦闘にでるときは俺も呼んでくれ。絶対に彼女には傷一つ付けない」

・シトナイ

士郎君「シトナイもいるんだな。彼女にはお世話になったよ。それにしてもあのイリヤ、俺を知らないはずなんだけど……。気のせいかな？」

・ギルガメツシュ（弓）

士郎君「ウワツ!?ってなんだマスターか、びっくりした。今なにしているかだつて？最古のジャイアンから隠れてるのさ。あの人に捕まったら何されるかわからないからね。アツヤベ見つかった!?それじゃあなマスター！俺は逃げる！」

・ギルガメツシュ（術）

士郎君「ちよつとちよつと！俺は王様の仕事なんて一緒にしたくないです!!いやだああ過労死なんてしたくないいいいい！」

＜士郎君への反応＞

・エミヤ(弓)「なんてことだ……イシュタルやパールヴァティ、ジャガーマンの件があったからまさかなと予想はしていたが……よりによってあいつが召喚されるとは……」

・アルトリア・ペンドラゴン(剣)「彼が召喚されたのですね。私が知る彼ではないようですが、彼とは違ってなかなか愉快な人ですね」

・アルトリア・オルタ(剣)「ほう、奴が召喚されたか。能気なやつだが、その実力は折り紙付きだ……何？奴がそんなことを言っていたのか？……少しお仕置きといくか」

・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン(術)「ここは同じ顔でも、違う人生や違う歴史を歩んできた人たちがいると知っていたけど！さすがにはめを外しすぎじゃないお兄ちゃん!?キャラ崩壊つてレベルじゃないよ!」

・クロエ・フォン・アインツベルン「ふふふ、からかうとすぐ動揺するのは私の知るお兄ちゃんと変わらないわね!でも動揺しすぎじゃない?もしかしてロリコン?」

・美遊・エーデルフェルト「……戦闘で私を守ってくれる姿はあの人そっくりですけど……普段とのギャップが……」

・シトナイ「この体の記憶にあるあの人ではないけど、あの顔を見ていたらなぜか心が温かくなるの……それはそうと士郎ったらいつもあの英雄王と一緒にいて!お仕置きの必要かしら!」

・ギルガメッシュ(弓)「フハハハハハハ!あれが召喚されたか!あいつのもとへ案内しろ雑種!我直々に再会の祝いをくれてやろう! なに?戦闘はするんだと?考えておく!」

・ギルガメッシュ(術)「何があったかだど?見てわからぬか雑種。この我がくれてやった仕事から逃げたこいつに対する罰よ!仕事が終わるまでこの牢屋に閉じ込めているのだ!」

＜ ■■■■■への反応＞

・シトナイ「……………ばか」

・ギルガメッシュ(弓)「見るに耐えん。その首を切り落としてやろうか雑種。この私の慈悲よ」

## 士郎君のカルデアでの一日

「ふう〜疲れましたよほんと」

アーチャーに案内された俺は、時々すれ違ったサーヴァントの人に挨拶をしながらこのカルデアを見学した。

やはりカルデア、古今東西色々なサーヴァントがいる。まだ10数人くらいとしか出会ってないが、それでも所謂高レアの人たちが多かった。

おいおいこのマスターは重課金しているのか…？

「それにしても一人だけの部屋をくれるとは…」

カルデアの見学が終わると、我らが主人公の藤丸立香ちゃんに一人部屋をもらった。

俺は別にアーチャーと同室でもよかったのだが、その俺の意見を聞いたアーチャーの顔が非常に歪んでいたため、ありがたく部屋を受け取った。そんな顔しなくていいだろ！

「それにしてもやっぱり殺風景だな」

ベッドに腰かけ、貸していただいた部屋を見渡す。今まで誰も使つてなかったのか部屋には観葉植物しか置かれていない。

けど鏡や洗面台、机などが備わっているので十分生活できるだろう。

「何か置くとしても、置くものと言ったら何があるかね」

アーチャーに何か投影してもらおうかな？できるかわからないけど、とりあえずソファアでも作ってもらおうか。

けど俺が頼んだら絶対断ってくると思うんだよな。なんで？（威圧）

「おっそうだ。俺の投影した剣でも飾るか！」

トレース、オンと呟き剣を投影する。投影された剣をとりあえず壁に立てかけてみる。

「なかなかいい感じじゃん」

顎に手をそえ、部屋の入口から見栄えをしてみる。

「でも…ひねりがないよねえ…」

部屋全体を視界に入れて眺めると、微妙に違和感が湧いてきた。  
剣が足りないのか？

「トレースオン。名刀電光丸」

いつもの愛用の剣を投影し、今度は机の上に横向きに置く。

「おお！さすが日本刀、横向きにしたら様になるな！よおしどんどん飾っちゃおうぞお〜！」

一度ハマってしまえばもう止められない。士郎は自分の考えに赴くまま部屋を改造していった。

「士郎さんに渡した部屋ってこっちであってたっけ？」

「はい。確かこちらの部屋のはずですが」

マシユと一緒にマスターとしての用事を終わらせた私は、新しくカルデアに来た士郎さんの部屋へと向かっていった。

エミヤの案内はもう終わっているだろうし今は部屋にいるだろう。

「そういえばあの部屋何もないから士郎さんに何か欲しい家具はあるか聞かないとね」

「そうですね…。今まで誰も使っていないなかった部屋ですのでベッドしかないはずですし」

間違えて彼を召喚したこちらとしては、カルデアでの彼の生活に何ひとつ不自由がないようにしなければ。

「おや、マスターとマシユ。君たちも奴の部屋に行くのか？」

「あつエミヤ！エミヤも士郎さんのお部屋に行くの？」

「業腹だがな。案内しているときに、あれにあることを注意するのを忘れていた」

「？注意ってなんかあるの？」

私が尋ねると、エミヤはため息をついた。

「そういえばマスターはあの小僧の特異性についてまだ知らなかった

な。ちようどいい、教えておこう」

エミヤは歩きながら、土郎さんの能力について語る。

「マスターは私の投影魔術を知っているだろう？あの小僧も同じだ。投影魔術で武器を作ることができる」

「へえ、土郎さんも投影で…」

そう考えるとエミヤと土郎さんってやっぱり似ているような。どちらもエミヤと名がついてるし、投影魔術を使えるし。土郎さんはエミヤのことをお兄ちゃん（大嘘）と言っていたけど、本当はどういう関係なのだろうか？

「そして小僧の特異性こそがその投影魔術だ。私の投影も通常のものどだいぶ異なると理解しているが、奴はその比ではない」

「土郎さんの投影がですか？英霊の宝具を複製できるエミヤさんもかなりすごいと思うのですが…」

疑問に思ったマッシュがそう呟く。確かにエミヤはベオウルフのフルンディング赤原獵犬やフェルグスのカラドボルグなど、英霊の宝具を複製できて充分すごいと思うけど。

「奴が言うヤバい剣を見たらわかるさ。あれはまさしく別格だ」

「ヤバい剣…？」

随分と抽象的な言葉である。エミヤは苦笑して、頭を傾ける私たちを見る。

「まあ、なんだ。あれをよろしく頼むよマスター。ああ見えて戦闘ではそれなりに役に立つさ」

そう呟くエミヤは少し困ったかのような表情を浮かべた。

「さてついたか。小僧、入るぞ」

「入って、どうぞ」

土郎さんの部屋の扉を礼儀正しく数回ノックしたエミヤは、部屋の中の土郎さんの了承を聞き扉を開ける。

「ようこそ、『俺の部屋』へ！」

… 部屋を開けると土郎さんが腕を広げて待っていた。部屋中に



はいつの間にかいろいろな剣が置かれている。

その全てにとてつもない神秘が込められていることがわかり、あまりの存在感に少し眩暈がする。

「……………この」

エミヤが何かを呟く。私はチラつとエミヤの横顔を見てみると、その顔はだんだんと赤く染まっていき、青筋がくつきりと浮かんでいく。

「たわけがツツ!!」

「あべしっ!?!」

ゴンツと鈍い音が部屋中に響いた。

エミヤのチョップを頭に食らった土郎さんはその場にうずくまる。

「うおおおお!俺の頭があああ!」

「この愚か者!こんな剣を投影するとは何を考えている!?!さっさと消せ!」

すると土郎さんは涙目になり、頭をおさえながらエミヤを見上げる。

「に、2度もぶつたね…おっさんにもぶたれたことないのに!」

「三発目もいくか?」

「すみませんでした」

謝罪とともに土郎さんは土下座する。すると部屋中にあつた剣が粒子となって消えていった。

少しホツとした私がかがんで土郎さんと向き合い、涙目の土郎さんと目を合わせる。

「土郎さん……とりあえずカルデア内で投影は今後禁止ね」

「ヒエツ……わかりました…」

土郎さんは私の顔を見て青ざめた。そんなに怖い顔だったかな…

「イタタタ……頭が割れたかと思った。へこんでない?俺の頭」

「うーんちよつとたんこぶができてるような」

その後エミヤが土郎さんを激しく叱り、私の代わりにカルデアでの規則を細かく教えてあげた。

土郎さんは正座をして、「はい…… はい……」と頷きながら真面目に聞いていた。

そしてエミヤの長い説教がすむと、ちょうど夕飯の時間となったので私は土郎さんを食事に誘った。

私たちは現在食堂へと歩いている。

「それにしても、あの剣の山には驚きました。どれも超一級のものでしたね」

「確かに……」

脳裏に先ほど見た光景を思い浮かべる。どれも見たことのない剣だったが、一目見ただけでそのどれもがヤバいことがわかった。エミヤが言っていたのはあのことなのだろう。

「投影なしの実力ではこのカルデア最弱だがな」

「おっと、心は硝子だぞ」

エミヤの馬鹿にするような物言いに土郎さんは歯ぎしりする。

「そういうアーチャーはムキムキのくせに筋力Dランクじゃん」

「おっと、心は硝子だぞ」

土郎さんがエミヤに反論すると、エミヤは一字一句同じ言葉を口に出した。やっぱり本当に兄弟なんじゃないかなこの二人。

「あっそうだ、マスター」

「ん？どうしたの土郎さん」

エミヤと口論していた土郎さんがこちらへと振り向く。

「俺のことはさん付けで呼ばなくてもいいよ。とかさん付けされるのに慣れてないからな」

「わかった、じゃあ土郎って呼ぶねー」

「いいぞーこれ」

土郎はうんうんと頷く。こうしてみると、意外と接しやすい人なのだろうか。

「ここが食堂だ。それではマスター、私は厨房に向かうよ」

「今日もご飯楽しみにしとくね！」

「ついに俺もアーチャーの飯を食す時が来たか…。」

士郎はエミヤの作るご飯に心を弾ませているのか、グへへと口から笑みを漏らす。

「エミヤとは親しそうだけど、士郎は一度もエミヤのご飯を食べたことないの?。」

「そうなんすよ。あの人、俺が必死に頼んでるのに馬鹿にして一度も食べさせてくれないんだよ」

「エミヤがそんな態度をとるなんて珍しいね」

エミヤは誰かに自分の作った食事を食べてもらうことに喜びを感じているはずなのに、どうして士郎に食べさせないのだろうか。

「でも俺はまだマシなほうよ。前までのあの人なら、隙あらば殺しにかかるような人もいるし」

まあそいつも衛宮士郎なんだけど…と士郎は誰にも聞こえない声でつぶやく。聞き取れなかった私は首を傾げながらも、気にせず士郎を席へ案内する。

時間帯のせいかサーヴァントの皆で食堂が少し混んでいるが、4人掛けのテーブルが開いていたのでそこに名札を置いて場所取りをする。

私が名札を置くと、周囲を見回す士郎が視界に入る。

「どうしたの?。」

「知り合いの英霊とかいないかなと思って」

辺りをキョロキョロと見回す士郎。エミヤとも知り合いらしいし他にも知っているサーヴァントがいるのだろうか。

「ちなみに知り合いの英霊って誰がいるの?。」

「うーん、真名を言えばアーサー王、クーフーリン、メディア、メデューサ… あと英雄王とシトナイ」

「け、結構知ってるんだね。うん、言われた人たちならクラス違いも含めて全員いるよ! たぶんそのうち出会うと思うけど」

「おつ、皆いるってことはマスター結構課金してるね」  
「課金って何…?。」

意味の分からないことを士郎が言ってきたので、首を傾げる。士郎は気にしないでと言って笑う。

そして彼はウキウキとした表情でエミヤのいる厨房を指さす。

「よし！それじゃあアーチャーの飯をもらいにイクゾー！」

「らじやー！」

「は、はい！」

名札を置いた席を離れて、エミヤたちがご飯を渡している場所へと向かう。

「ご飯を受け渡している人の姿が見える。今日はあの人も厨房にいるんだ。」

「おつ、君が新しく来た新人かい？」

「オッスオネシヤス！」

「ははは！映像で見た通り面白そうな人だね！あたしはブルーティカ！よろしくね」

腰まで伸ばした赤い髪と長身が特徴のブルーティカが何かを思い出したのかクスクスと笑う。

「君が来たときのエミヤの焦り具合といたらもう！勢いよく飛び出していた彼に食堂の皆が騒然としたものさ！」

「からかうのはやめてくれブルーティカ……」

ブルーティカの笑い声を聞いたのか奥からエミヤが出てくる。

「アーチャー！飯もらいに来たぞ！」

「フン、貴様の分はしっかりと用意してある」

自分の配膳トレイをエミヤの前に置いた士郎はエミヤのご飯を今か今かと待っている。

エミヤは再び厨房の奥へと戻り、何かを手にして戻ってきた。

「受け取れ」

そして士郎の配膳トレイの上に適当に乗せる。

「……一応聞くけどこれは？」

「見てわかるだろう？カップ麺だが」

士郎は青筋を浮かべながら、配膳トレイの上にあるカップ麺を掴む。

「頭にきますよお！いい加減飯食わせろこの朴念仁野郎！」

「失礼な奴だ。言っておくがカップ麺は補充できないから結構貴重なんだぞ」

「だったら普通にお前の飯食わせろ！」

……仲がいいのか悪いのか。この二人の口喧嘩に私は苦笑する。

「もうエミヤったら新人いじめしちやだめだよ。ほら新人さん、こっちがエミヤの作ったご飯ね」

「ありがてえ……」

二人の口喧嘩を見かねたブーティカが士郎のトレーの上にご飯を置いていく。士郎はブーティカに手を揃えて感謝の言葉を告げた。

「貴様の飯はいただいたアーチャー！次も頼むぞ！」

「さつさとどっか行け」

シツシと手を払うエミヤを気にせず、士郎はカップ麺とトレーを手に笑顔で席へと一足先に戻っていく。

私とマシユも自分が持ったトレーをエミヤの前に出す。

「エミヤはなんで士郎に厳しいの？」

「あいつにはこれぐらいがちようどいいさ。甘やかすと調子に乗るか  
らな」

「うーん、否定できない……」

自室であんな剣を勝手に投影した件があるし、そのうちもつとヤバい問題ごとを起こすかも。

「安心しろマスター。奴が問題ごとを起こさないように監視しておく  
や」

「ふふ、じゃあよろしく頼むねエミヤ！」

監視じゃなくて世話焼きだろうに、素直じゃないんだから。

料理を受け取った私とマシユは先ほどの席へと戻る。士郎が先に料理に手をつけずに私たちを待っていた。

「ごめん士郎、待たせた？」

「もう待ちきれないよ！はやく食べようぜ！」

「それじゃあ食べようか」

三人でいただきますと声に出し、手を合わせる。  
今日のご飯は和食。お米に味噌汁、お魚などの栄養を重視したもの  
となっている。

「士郎はさっき言った英霊の皆とどういう風に知り合ったの？」  
「ん？」

美味しそうにご飯を食べている士郎に私はそう尋ねる。士郎は手  
に持つ箸を一度トレーの上に置く。

「あーそうだな。昔俺は聖杯戦争に参加していたんだよ」

「聖杯戦争にですか？」

「そう、英霊を呼び出して戦う戦争ね。まあ戦争って言うけど、実際は  
一回しか戦闘してない」

「？一度の戦闘で決着がついたの？」

すると士郎は自らが経験した聖杯戦争について細かく説明してく  
れた。聖杯の汚染、この世すべての悪、英雄王のことなど全て話して  
くれた。

「へえ、てことは英雄王に全員で挑んだんだ」

「いや、王様と直接戦ったのは俺一人だけだよ」

「ええ!?英雄王相手にサーヴァントを連れずに一人で戦ったの?!」

あまりの衝撃的な事実に大声で驚いてしまう。周りにいるサー  
ヴァントたちもなんだなんだとこちらを見てくる。

「本当死ぬかと思ったよ……もう二度とあの人と戦いたくねえ」

「ほお、ならばこの場でもう一度戦うか雑種」

「!？」

ビクツと肩を震わせて、士郎は恐る恐るその声が聞こえてきた背後  
をゆっくりと振り向く。

「お、王様……」

「貴様が召喚されるとは驚きだったぞ。だが最初に我を謁見しなかつ  
たことは万死に値するな」

「そんな!?まず王様がいるなんて知りませんでしたよ!？」

突如現れた英雄王に、恐れおののく士郎。戦ったと言っていた割に  
は仲が良さそうだけど。

「だが、我がくれてやったその腕輪を肌身離さず付けていることに免じて此度は許そうではないか。あとで我の部屋に來い雑種」

英雄王は士郎の右手に輝く青い宝石の腕輪を見て、踵を返す。さつきから気になっていたあの腕輪は英雄王が士郎にあげたものだったのか。

「えっ、めんどくさ—— わかりました！わかったからゲート開かないでー！」

自らを囲むようにして開かれたゲートオブバビロンに士郎は手を合わせて謝る。英雄王はフハハと笑いながら食堂の出口を出ていった。

「相も変わらず嵐のような人だ」

「英雄王と結構仲いいんだね」

「奴隷みたいに扱われてるけどな」

士郎はテンションただ下がりて再び箸を手に持ち、食事を再開する。

「大人の僕がすみませんねお兄さん」

「ん？あつ！子ギル先輩！」

「またもや士郎の背後から声をかけたのは紅顔の美少年、英雄王の若かりし頃の姿、子ギルである。」

彼はニコニコとした笑顔を浮かべている。

「子ギル先輩もいたんすね。どうです？カルデアでの生活は」

「居心地のいい場所ですよここは。たぶんお兄さんも気に入ると思いますー！」

「それならよかったです」

「どうやら士郎は子ギルとも仲が良さそうだ。楽しそうに会話を続けている。」

「別にあの人の言うことなんて聞かなくてもいいんですよ？」

「いやでも無視したら後が怖いし…。」

「顔真っ青だよ士郎」

英雄王の誘いを無視した後を想像したのだろうか、士郎の顔が真っ青に染まる。

「あはは。それなら早くご飯を食べたほうがいいですね」

「?どうしてですか?」

「大人の僕を待たせすぎたら、お兄さんに何するかわかりませんよ」  
「!？」

士郎は子ギルの忠告を理解し、ご飯を猛スピードで平らげていく。  
そして最後に残ったお米を口いっぱいに放り込んで、コップの水で押し流す。

「それじゃあマスター!先行くわ!」

「いつてらっしやーい」

空になった食器を乗せたトレーをもつて、士郎は早歩きで去っていった。彼が英雄王にいじめられないことを願うばかりだ。

「英雄王も子ギルも、士郎と親しそうだね」

「お兄さんと戦った大人の僕の心情は知りませんが。僕は結構好きですよお兄さんのこと。マスターも見ました?彼の投影した武器」

「うん。すごかった」

上手く言葉で言い表すことはできない。けど言葉で言い表せないほどの剣はすごかったのだ。

「そうですねー。お兄さんの『底』は僕の目でも見えづらいですし、本当に面白い人です」

すると子ギルは片手の指を三つ上げた。

「あの人の持つ剣でも特にすごいものが三つあるらしいのですが、まだ僕は二つしか見てないですよ。いつか残りの一つも見てみたいものです」

フツツと笑う子ギルはそう言うと、食堂の出口へと向かっていった。士郎の後について行って様子でも見に行くのだろうか。

「士郎の三つの剣かあ」

「いったいどういうものなのでしょう?」

うーん。子ギルはそのうちの二つを見たらしいし、私も見てみたいな。

「めちやくちや大きい剣だったりしてね」

「ふふ、そうかもしれないね」



私は幼心に戻り、かつこいい剣を想像し続けていた。

「コーナーで差をつけろ！」

カルデアの曲がった廊下を颯爽と駆ける俺。

一秒でも早く、先ほどすれ違ったサーヴァントの人に教えてもらったギルガメッシュの部屋へとたどり着くのだ。

もちろん。大勢のサーヴァントや職員がいるカルデアで注意もせず走り続けたら、誰かとぶつかることは必然である。

「おわっ!？」

「きやあ!？」

曲がり角から出てきた人とぶつかってしまう。

「おわっーーーーー!？」

直前に急ブレーキをしたことで衝撃は少なかったが、足がもつれて地面へとヘッドスライディングしてしまう。顔の皮が剥けるかと思っただ。

「わわわ!大丈夫ですか!？」

「何?どうしたのよ?」

「イリヤ...大丈夫?」

床に倒れ伏す俺の耳に三人の少女の声が聞こえた。ていうかこの声は!!

「わっー!!!」

「わっ!?!っってお兄ちゃん!?!どうしてここにいるの!?!」

「!?!」

勢いよく飛び上がり、少女たちと向かいあう。

うむ。イリヤ、クロエ、美遊の魔法少女トリオですな。

「今朝ぶりだなイリヤ!ところで後ろの二人はどなた?」

俺は知ってるけど、一応尋ねてみる。三人とも穂群原学園の制服を身に着けているが、魔法少女の服じゃないんだな。まあさすがにあの服装でいたら恥ずかしいか。

驚いている目の前の少女たちは、俺を尻目にお互いに顔を合わせコソコソ話を始めた。

「クロと美遊を知らないってことは私たちの知るお兄ちゃんじゃない…？」

「そうなのかも、ここはいろんな世界の人が集まる場所だから」「てことはあのお兄ちゃんも並行世界のお兄ちゃんなの？」

小さい声で話し合ってるせいイリヤ達の話が聞こえない。するとイリヤがこちらへと振り向く。

「あの！お名前を聞いてもいいですか！」  
「愚地独歩です…」

「やっぱり私たちの知らないお兄ちゃんだよ！」

「いや、あれはからかってるだけでしょ…」

イリヤの慌てようにクロエは呆れたような顔を浮かべる。

「ごめん嘘、本当は衛宮士郎。ところで三人はどういう集まりなんだっけ？」

「どうしようクロ、美遊。私このお兄ちゃんのテンションについていけないよ…」

「やっぱり別人よね」

「私もそう思う」

またコソコソ話を再開した三人。俺も仲間に入れてくれよ。

あつヤベ、そういうえば王様待たせてるんだった。

「それじゃあなイリヤとそこの二人とも！俺はちよつと用事があるから急ぐわ！ぶつかってごめんね！」

「あつー待ってお兄ちゃんー！」

走り去る俺に静止の声がかかるが、罪悪感よりも英雄王のお仕置きへの恐怖が勝ったので心を鬼にして駆ける。

あとでちゃんと埋め合わせするから……

「ひどい目にあった……」

あの後英雄王の部屋へとたどりついた俺は、見てわかるほど不機嫌な王様のゲーム相手をさせられた。一番最初はレースゲームだったので何とか粘れたものの、英雄王の持つ巧みな運転技術によって全て負けた。

その次にチェスや将棋などのボードゲームもやったが、当然俺が勝てるわけがなく、そこでも全て負けた。

英雄王から解放されたのは夜遅く。

全負けした俺の精神はボロボロだ……

だがまあ肉体的なお仕置きがなかっただけマシか。

「眠い、眠くない？」

お風呂に入ってないけど、もう夜も遅いのでベッドで寝ることにする。それにしても今日一日は劇的すぎた。

靴を脱ぎ、ベッドに寝転がる。軽いストレッチをして、薄い布団をかぶる。

電気を消す。俺しかいない部屋に夜の静寂が満ちる。

「今日はすぐ眠れそう」

明日のことを考えながら、俺は夢の中へと飲み込まれた。

士郎が寝静まったころ、士郎の部屋の扉が静かに開く。そして一人の少女が部屋に入ってきた。

その少女は忍び足で士郎の眠るベッドに近づき、士郎を起こさないようにその布団を静かにめくる。

そして士郎に抱き着くように寝転がる。

「…んう？」

士郎は自分に触れる何かに気づき目を覚ます。重い瞼をこすりながら、抱き着いてきた張本人を見る。

「起こしちゃった？士郎」

「フアツ!？」

自分の腕に抱きついていたのは、真っ白な女の子。士郎のよく知るシトナイその人だった。

彼女はむうーと怒ってるような表情を浮かべる。

「シトナイ!?!なんでここに!？」

「士郎がいつまでたっても私に会いに来てくれないからこっちから来たよ」

士郎の腕に抱き着く力を強める。シトナイは先ほどの怒り顔をなくし、にこやかににはにかんだ。

「シトナイは『俺』を知ってるのか？」

「うーん、私の知る『士郎』じゃないそうだけど、士郎は士郎じゃん！」

「ははは、そうか」

頭を搔く士郎は、飛び上がった体を再び布団に沈める。

「それじゃあ一緒に寝るか」

「うん！」

仲良くベッドに並ぶ彼ら。それは士郎君にとっていつも通りの日常であった。